

# マヤ・インカ神話伝説集

松村 武雄 編  
大貫・小池 解説

教養文庫

1098

D

611

¥400

## マヤ・インカ 神話伝説集

松村武雄編

大貫良夫・小池佑二解説

現代教養文庫

いまだに部分的にしか解説されていない象形文字を残したマヤ族、それ以前のナワ族（トルテカ、アステカなど）、そして、太陽神の信仰で有名なインカ族。スペイン人ピサロやコルテスに襲われるまで、中・南米の国々は優れた文化を築き、その宗教儀礼は時には凄惨でさえあった。彼らが残した神話伝説は、現在では多くが変容してしまっているが、それでも、「千一夜物語」を思わせるほど豊かで華麗なものが多い。



現代教養文庫

1098

マヤ・インカ神話伝説集

松村武雄編  
大貫良夫 解説  
小池佑二

社会思想社





現代教養文庫

1098

マヤ・インカ神話伝説集

松村武雄 編  
大貫良夫 解説  
小池佑二

社会思想社







マヤ・インカ神話伝説集

目次



ナワ族の神話伝説

7

世界の始め

大洪水

山彦の由来

太陽の出現

眼を泣き出した神

決死の組打ち

腹の中の神

火の起源

ケツァルコアトルの威力

蜘蛛の災い

四人の若者

金星の由来

妻奪い

隠者の墮落

オマカトル神の怒り

死人の旅

建国の伝説

ウエマク王の物語

トルテカ国の滅亡

メキシコ市の建設

乙女の犠牲



マヤ族の神話伝説

77

万物創造

人間創造

火の起源

太陽の出現

冥府からの挑戦

人猿の起源

インカ族の神話伝説

136

電光と雷鳴との由来

ビラコチャ神の創造

四つの風の起源(一)

四つの風の起源(二)

双生児の冥府攻め

巨魔と贗医者

シパクナ退治

カブラカン退治

卵から生まれた小人

乙女争い

人類創造(一)

人類創造(二)

リヤマの予言

ビラコチャ神と人間との争い



黄金の杖

ペルー人の階級の由来

海に消える神

四人兄弟

親子の試し

海の魚の起源

水晶の中の男

パリアカカ物語

ワチアクリ物語

原注 184

解題 松村武雄 199

メキシコの神々と神話伝説について

小池佑二 203

ペルーの神話

大貫良夫 222



ナワ族の神話伝説



## 世界の始め

太初<sup>たいしよ</sup>世の中には何もなかった。有るものはただどこまでも広がっている果てしない水だけであつた。その水の中からいつとはなしに大地が現われ出た。

大地が出来ると、ある日のこと、「豹蛇」と呼ばれる雄々しい鹿の男神と、「虎蛇」と呼ばれる麗しい鹿の女神とがどこからとなく現われた。二人はどちらも人間の姿をしていた。

二人の神は、満々たる水の中に高くて大きな岩をこしらえて、その上に美しい館を造つた。それから岩の頂に銅でこしらえた一本の斧を突き立てて、大地の上に円くなっている天空を支えることにした。

美しい館は、アポアラの近くで、上部ミシュテカの地にあつた。鹿の男神と鹿の女神とは、この館の中に幾世紀となく住みつづけていた。そうしているうちに、二人の男の子が生まれた。一人は「九蛇の風」と呼ばれ、一人は「九洞の風」と呼ばれた。



「九蛇の風」と「九洞の風」とは、すくすくと生い立って、立派なりりしい若者となった。両親が非常に気をつけて育て上げたので、若者たちは、さまざまの技に通じ、あらゆる動物に姿を変えることも出来れば、まるで姿を見えなくすることも出来た。またどんな堅いものでもするりとつきぬけることも出来た。あるとき「九蛇の風」が、「九洞の風」にむかつて、

「自分たちが、こんなに立派になって、いろんな技に通ずるようになったのは、まったく神々のお蔭だ。だからそのお礼に、神々にささげものをしようではないか」といった。「九洞の風」はしきりにうなずいて、

「まったくそうだ。それではすぐにその支度にとりかかることにしよう」

と答えた。二人は粘土を掘り取って、香炉をこしらえた。そしてその中に煙草を満たして、それに火をつけた。やがて香炉から煙が静かに立ち昇って、空にたなびき始めた。これが神々に対する最初のささげものであった。

それから二人は、花園をこしらえて、そこに灌木や、花や、実を結ぶ樹や、香りの高い薬草などを植えつけた。そしてそのすぐ側の地をならして、そこを自分たちの住居ときめた。二人は満足しきって、煙草をふかしては、神々にお祈りをするのであった。が、しばらくすると、二人は、どちらからとなく、



「お祈りの力を強めるためには、こんなにのんびりとしていては駄目だ。どこまでも身を苦しめて、懸命になってお祈りをしてこそ、その力が現われるのだ」

といい出した。そしてその後は、ひうち石でこしらえた小刀で、自分たちの二つの耳と舌とに孔を穿け、柳の小枝で造ったブラッシで木や草に紅の血を灌ぎかけて、お祈りをする<sup>(1)</sup>ことにした。

## 大洪水

ある時大雨がいつまでもいつまでも降りつづいた。やがて地上に大洪水が起こって、高い山も水の底に沈んでしまった。洪水はいつまでも退かないで、五十二度も春を迎えた。大地の上の人間はたいてい溺れ死んでしまった。

と、ある日ティトラカワン神が、ナタという男と、ネナという女のもとに現われた。二人はそのとき一生懸命になって飲物をこしらえていた。ティトラカワン神は、二人にむかって、

「飲物なんどこしらえている場合ではない。一刻も早く大きない、と杉の幹をくりぬいて、船をこしらえるがよい。今に水量が増して、大空を浸さんばかりになるから」

と告げ知らせた。

夫婦のものは、驚き騒いで、大急ぎで大きない、と杉の幹をくりぬいて、一艘の船をこしらえた。そしてその中に入り込むと、ティトラカワン神は、船の戸を閉じてやりながら、

「ナタよ、そなたはただ一本のとうもろこしの穂を食べていなくてはならぬ。そなたの妻のネナもまたそうするのじゃ」

といった。二人は神の教えに従って、ひたすらとうもろこしの穂を食べていた。そのうちに穂がなくなってしまった。ふと気がつくと、今まで波にゆられていた船が少しも動かなくなっていた。二人は怪しんで、船の戸を開いて見ると、いつの間にか洪水が退いてしまつて、残りの浅い水にたくさん魚が泳ぎ回っていた。二人は大喜びで船から飛び出して魚を捕えた。そして木をこすり合わせて火をこしらえて、それをあぶっていた。と、天にいるシタリニクエという神と、シタラトナクという神とが、ふと下界を眺めおろして、



「おや、どうしたのじゃ、あの火は？」

「なぜ人間どもはこんなに天界を煙らすのだらう」

といった。それを聞くと、ティトラカワン神がすぐに人間界に降りて来て、ナタとネナとにむかって、

「この火はどうしたのじゃ」

となじった。二人は恐る恐る、

「魚をあぶって食べようと思っているところでございます」

と答えた。と、ティトラカワン神は、

「神々にささげものをしないで、食物を口にしてはいけない」

といいながら、魚を掴んで、尻尾と頭とをひねくり回して犬にしてみました。夫婦のものは恐れ入って、すぐに空にいる神々にささげものをした。

二人は多くの子を産んで、新しい人類の始祖となった。<sup>(2)</sup>

## 山彦の由来

昔メキシコの地に大洪水があった。

流れみなぎる水は、奔馬のように大地を荒れまわった。人々は襲って来る大波にさらわれて、あちらこちらに逃げまどったが、とうとう逃げきれないで、たくさん溺れ死んだ。

やっと命を助かった人たちは、大きな岩によじ登ったり、高い木の梢にしがみついたり、山の上に駆け上がったりして、恐ろしい水の攻手をしのいでいた。

洪水は岩や木や山にぶつかって、耳をろうするばかり烈しい響きを立てた。人々はお互いに真青になった顔を見合わせて、

「何という烈しい音でしょう」

「まるで猛獣がほえるようですね」

などと話し合っていた。

しかし永いことたつと、洪水がしだいに退き始めた。それからまた永いことたつと、すっかり大地の面が現われてきた。そして夜昼鳴り響いていた烈しい音がぴたり



と止んでしまった。人々はやっと安心して、岩から木から山から降りて来た。

しかしそれからというものは、不思議なことが起こるようになった。人々が谷間に行って、なにげなく大きな声を立てると、あたりの山々からその声がそっくりそのまま返って来るのであった。人々は非常に驚き怪しんで、

「どうしたんだろう。あの声は誰が出すんだろう」

「山の中に怪物が潜んでいて、わたしたちの口真似をするのではなからうか」

「きっとそうかもしれないよ」

などと話し合った。そして元氣のいい若者たちが声をたよりに山の中をくまなく捜し回ったが、怪物などさらに見つからなかった。人々は不思議でたまらなくなつて、よるとさわるとその話ばかりしていた。すると一人の年とった男が、にやにや笑つて、

「あれは怪物などのせいではないよ」

といった。

「では、何ですかね」

と、人々が口をそろえてこう尋ねた。老人はしかつめらしい顔をして、

「お前さんたちは、あの大洪水のときに、水がいろんなものにぶつかつて、すさまじい響きを立てたことを忘れたかね」

といった。

「忘れるものですか。今でもありありと耳に残っていますよ」と、人々がいった。

「あの恐ろしい響きが、山々にまだ残っているのだよ。お前さんたちが谷間で大きな声を立てると、その残っている響きがついつり込まれて出て来るのだよ」と、老人がいった。

こうしてメキシコでは、山彦は、昔の大洪水の名残りであると信じられている。<sup>(3)</sup>

## 太陽の出現

昔は世界に太陽がなかった。世界中は真暗であった。人間は闇の中で寒さにふるえていた。

人間たちは困りきって、メツトリ（「月」のこと）に訴えた。

「一人の人間が犠牲にならなくては、太陽は現われないよ」



と、メツトリがいった。人間たちは闇と寒気も嫌であつたが、命を失くするのはなおさら嫌であつた。だからメツトリからこういわれると、お互いに顔を見合わせて黙りこくっていた。

メツトリはナナワトルというものを引き捕えて、

「そなたが犠牲になるのじゃ」

といった。ナナワトルは仕方がないのでその言葉に従うことにした。メツトリは、屍しかばねを焼く薪を山のように積み上げて、それに火をつけた。火がえんえんと燃え上がると、メツトリはナナワトルを掴んでその中に投げ込んだ。ナナワトルの体は見る間に焼け焦げてしまった。じっとそれを見ていたメツトリは、

「ナナワトル、そなたばかりを死なせはせぬよ。わしもいっしょに死ぬのじゃ」

というなり、たちまち身を跳らして焰の中に飛び込んだ。

人々は二人の死を悲しみながら、いっしんに東の空を眺めていた。しばらくすると遙かかなたの地平線のあたりがほの紅くなった。と思うと、円くて真赤なものがぬつと現われて、あたり一面に眩しいような光を投げかけた。

「太陽が現われた、太陽が」

と、人々はこう叫んで、うれしさに踊りまわった。<sup>(4)</sup>

## 眼を泣き出した神

昔、神が相談をして太陽をこしらえた。太陽が出来上がると、一人の神が、  
「これに命と力とを与えなくてはならぬ」といった。

「そうだ、ただ造りっぱなしでは仕方がない。強い光であまねく世界を照らさせるには、どうしても命と力とを与えなくては駄目だ」

と、他の神が応じた。

「では、どうしたら太陽に命と力とを与えることが出来るだろう」

と、また一人の神がいった。

「それには、わしたちが犠牲いけにえにならなくてはなるまい」

と、他の一人の神が答えた。

こうして神々は、出来たての太陽に命と力とを与えるために、自分たちのうちから



幾人かの犠牲を出すことに話をきめた。するとシヨロトルという神が顔色を変えて、「馬鹿馬鹿しい。たかの知れた太陽などのために、自分たちが命を捨てるなんて、そんな愚かなことがあるものか」

といい出した。しかし他の神々は、

「いや決して愚かなことではない。太陽が強い光を放つようにならなくては、世界はいつまでも闇ではないか。そして寒気のために人間どもが死に絶えてしまうではないか。どうしてもわたたちのうちから犠牲を出さなくてはならぬ」

といい張った。これを聞くと、シヨロトルは悲しそうな顔をして、

「それでは死にたいと思うものが死ぬがいい。自分はそんなつまらぬことに命を投げ出すのは嫌だ」

といって、神々のいるところから引きさがってしまった。

シヨロトルはただ一人になると、

「ああとんだことになってしまった。日頃仲よくしている神々が幾人か死んで行くとは、何という悲しいことだろう」

といって、声をはなって泣き出した。泣いて泣いて泣きつづけているうちに、とうとう目の玉が二つとも眼窩から脱け落ちてしまった。

だからショロトル神は今でも空洞のようになった眼窩をしているのである。

### 決死の組打ち

ナワ族の一人の若者が、ある乙女に想いを寄せていた。しかし乙女の心はかたくなであった。若者が熱のこもった言葉でいいよればいよるほど、彼女は冷ややかになつていった。

若者は夜となく昼となく苦しみ悶えた。そして思い余った末に、心の中に浮かんできたのはテスカトリポカ神の恐ろしい姿であった。

「そうだ、あの乙女と結婚することが出来なければ、さらに生きている甲斐がない。どうせ捨てる命なら、のるかそるか覚悟をきめて、テスカトリポカ神にぶつかってみよう。あの神との闘いに負けても、どうせ早かれ遅かれ失くなる命だ。万一勝負に勝つことが出来たら、それこそしめたものだ。テスカトリポカ神は、どんな願いでも叶えて下さるということであるから、乙女の心が自分になびくようにしてもらふこと



もきつと出来るに違いない」

若者はこう思いきめて、それからというものは毎晩のようにあちらこちらをさまよひ歩いた。しかしどうしてもテスカトリポカに出逢うことが出来なかった。が、若者は決して自分の企てを思いとどまろうとはしなかった。

「よし、テスカトリポカ神に出逢うまでは、いつまでも夜歩きを止めないぞ」

若者は齒を食いしばってこう独言をいった。そしてなおも根気よく夜歩きをつづけていた。

ある夜のことであつた。こんもりと草木の生い茂った野原を歩いていると、どこかでかさりという怪しい音がした。若者は胸をとどろかせて、音のした方を見やった。と、たちまち草木を掻き分けて、たくましい骨格をした一人の男が飛び出して来た。男は右の手に一本の投槍を握って、左の手に四本のひかえ槍のついた鏡楯かがみたてを携えていた。こんないでたちをしている神は外にはない。まぎれもないテスカトリポカ神の姿である。

テスカトリポカは月の光で蒼白くなつた若者の顔をじつと見つめていたが、やがて槍と楯とを投げ出して、ものをもいわずに躍りかかって来た。若者もかねて覚悟していたこととて、少しもわるびれずに、体中の力を二つの腕にあつめて、テスカトリポ



テスカトリポカ



カに組みついて行った。

テスカトリポカは、始めのうちは軽く若者をあしらいながら、  
「おい、お前はわしが誰であるということを知っているのかね」と尋ねた。

「知っていますとも。テスカトリポカ神ということ承知の上で勝負をいどんでいるのです」

と、若者が答えた。

「組打ちに負けたら、お前の命がなくなるぞ」

と、テスカトリポカが冷ややかにいった。

「それも覚悟の上です。でもわたくしが勝ったら、あなたさまはわたくしをお願いを叶えて下さるでしょう」

と、若者は、テスカトリポカに組みふせられまいと一生懸命に努めながら、あえぎあえぎ尋ねた。テスカトリポカはにやりと笑いながら、

「もちろんじゃ。おしを負かすものがあつたら、どんな無理な願いでも叶えてやるといふのが、日頃の約束じゃ。さあ、ひと揉みに揉みつぶしてくれるぞ」といって、烈しく若者に組みついた。

「いよいよ生死の瀬戸際になったぞ」

若者はこう思って、満身の力をふり起こした。二人は永い間揉み合っていた。なかなか勝負がつかなかった。テスカトリポカは心の中で、

「人間のうちにこんな手強い相手がいようとは思わなかった。うむ、えらい力じゃ」と驚き怪しみながら、なおも組み伏せようと骨を折っていた。しかし乙女を思う一念はとうとう神の力にうち勝った。

テスカトリポカは若者の必死の働きに腰がくじけて、もろくも大地に組みしかれてしまった。

若者は懸命にテスカトリポカをおさえつけながら、

「組打ちはわたくしの勝ちです。約束によって、わたくしをお願いを叶えて下さい」といった。

「よし、叶えてやろう。どんな願いじゃ」

と、テスカトリポカが尋ねた。

「一人の乙女と結婚をしようと思っっていますが、相手がどうしても聞き入れてくれません。どうかあなた様の力で乙女の心をやわらげて下さい」

と、若者がさも切なそうにいった。

「承知した。早く押えている手を放してもらいたい」

と、テスカトリポカが苦しそうにいった。若者はすぐに手を放した。するとテスカトリポカは、大地に落ちていた投槍と楯とを拾い上げるなり、こそそと茂みの中に姿を隠してしまった。

若者は烈しい闘いに疲れきってはいたが、永い間恋いしていた乙女を妻にすることが出来るという喜びで顔を輝かしながら、家路についた。

とある小路で意中の乙女とばたり出逢った。若者はテスカトリポカの約束を思つて、覚えず胸をとどろかした。乙女はいつものように顔を背けて、すげなく行き過ぎようとはしなかった。彼女はつかつかと若者の側に歩みよって来た。そして顔を紅くしたまま、しばらくの間もじもじしていたが、やがてさも思いきったような風情で、「ほんとうにすみませんでした。これまでの冷たい仕打ちはどうかおゆるし下さい」といった。若者は夢心地で、

「ではわたしの心を酌んで下さるでしょうか。わたしとの結婚を承知して下さるでしょうか」

と叫んだ。乙女はいよいよ顔を紅くして、小さな声で、「何事もあなた様のお望みに従います。どうかよろしく」



と答えた。

こうして勇敢な若者は、とうとう意中の乙女をわが妻とすることが出来た。彼はテスカトリポカ神の厚意を謝するため、急いでその像の前に駆けて行った。そして像の脚下にひざまずいて永い間熱心に感謝の祈りをささげていた。

### 腹の中の神

トルテカ族がこしらえたトランの町の近くに、コアテペクという山がある。その山陰にコアトリクエと呼ばれる寡婦<sup>やもめ</sup>が住んでいた。

コアトリクエには一人の娘があった。名をコヨルシャウキといった。それから数人の男の子もあった。

コアトリクエは信心深い女であった。だから毎日家からさほど遠くない小丘に登って、そこで真心こめて数々の神にお祈りをささげるのを常としていた。

ある日のこと、いつものように丘の上で熱心にお祈りをしていると、何やら空から

彼女の体に落ちかかった。彼女は驚いて身を退けた。落ちかかったのは、華やかに美しい色彩をした小さい珠であった。コアトリクエはじっとそれを見つめていた。そのうちに珠の綾なす色彩が気に入って、

「ほんとに何という見事な珠でしょう。しまって置いて、いい折に太陽の神さまにささげることにしてよう」

といいながら、それを拾い上げてふところにおさめた。

しばらくすると、コアトリクエは身重になった。彼女はそれに気がつくとき、夢かとはばかり驚き嘆いた。夫を失って以来、つましい生活をつづけている自分が、どうして新たに子を産むようなことになったのだろうか？ コアトリクエはいくら考えても、そのわけがのみ込めなかった。彼女はもう悲しくてはずかしくてたまらなかった。

コアトリクエの子たちは、それに気がつくとき、心から母を憎んだ。男の子たちは面とむかってコアトリクエを散々にのしつた。女の子のコヨルシャウキも弟たちをそのかしては、あらゆる手段をつくして、哀れな母を辱しめた。

コアトリクエは途方にくれて、恐れながら心配しながら、駆り立てられる野の獣のようにうろつき回っていた。と、ある日どこからとなく、

「お母さん、お母さん」

と呼びかける声が聞こえた。コアトリクエはぞっとして、こわごわあたりを見回したが、どこにも人影らしいものは見えなかった。彼女はきょとんとした顔をして突っ立っていた。

と、また怪しい声がして、

「お母さん、お母さん、何をしていらっしゃるのです。わたしですよ、あなたの子供ですよ」

といった。コアトリクエは初めて怪しい声が自分の腹の中から出ているのに気がついた。腹の中の声は、

「お母さん、そんなに心配しなくてもいいですよ。お母さんを苦しめるものなんか、ちっとも恐がらなくってもいいんですよ。わたしが生まれたら、すぐに仇をとって上げますよ。しっかりしていらっしゃい」

といった。これを聞くと、コアトリクエは悲しいようなうれしいような気がして、子供の生まれるのをひたすら待ちわびていた。

コアトリクエの男の子たちは、そっとあるところに集まって、

「お母さんが父無し子を産んだら、わたしたちの大恥だ。今のうちに何とかしなくてはならない」



「仕方がない、お母さんを殺してしまおうことにしよう。かわいそうだが、わたしたちの恥にはかえられないからね」

などと話し合って、とうとうコアトリクエを殺すことに決めてしまった。彼らは戦に出かけるときの戦士の風にならって頭髪を飾り、体にはすっかりよろいを着けた。

しかしいよいよしたくが出来ると、彼らのうちの一人のアウイトリカクが、母を殺す罪の恐ろしさに脅えて、そっとコアトリクエのところに行って、兄弟たちの大胆な企みをうち明けた。コアトリクエは驚き悲しんで、

「どうしよう、どうしよう、わたしの子供がわたしを殺すなんて、ほんとにひどいわ」

と叫んだ。すると腹の中の子供が声をかけて、

「お母さん、大丈夫です。わたしが助けてあげます」

といった。それから今度はアウイトリカクに声をかけて、

「兄さん、わたしのいうことによく気をつけて下さい。わたしはもうとっくにあなた達の悪い企みを聞き込んでいたんですよ。わたしはウィツィロポチトリといって、天なる神さまの子です。お母さんに罪はありません。神さまが五色の羽根の珠となつて、お母さんを身重になすただけです。今後あなたはわたしの言葉をよく守らねば

なりません」

といった。これを聞くと、アウイトリカクは非常に驚き怖れて、一も二もなく腹の中の神の子の言葉に従うことを誓った。

そんなこととは夢にも知らぬ兄弟たちは、姉のコヨルシャウキを先頭に立てて、あちらこちらとコアトリクエを探し回った。彼らはたくさんの投<sup>や</sup>箭を手にしていた。母の姿が見つかり次第に、それを投げつけて殺してしまいうつもりであった。

ウイツィロポチトリは、母の腹の中からアウイトリカクに声をかけて、

「兄さん、高い山に登って、あいつたちの様子を探して下さい」

といった。アウイトリカクはすぐに近くの山の頂に登った。と、ウイツィロポチトリがまた声をかけて、

「あいつらはどこまで進んで来たんです」

と尋ねた。

「ツォンパンティトランまで来たよ」

と、アウイトリカクが答えた。しばらくするとウイツィロポチトリがまた、  
「今度はどのあたりに来ているんです」

と尋ねた。

「コアシャルコまで来たよ」

と、アウイトリカクが答えた。それからまたしばらくたつと、ウィツィロポチトリが、

「今はどこまでやって来たんです」

と尋ねた。

「ペトラクまでやって来たよ」

と、アウイトリカクが答えた。

こうして自分の命を狙う恐ろしい人々は、次第にコアトリクエに近づいて来た。コアトリクエはどうなることかと、心配のあまりぶるぶるえていた。と、たちまちアウイトリカクがあわてたような口調で、

「ウィツィロポチトリ、気をつけておくれ。あいつらはコヨルシャウキを先頭に立てて、すぐそばまでやって来てるよ」

と叫んだ。その瞬間神の子は青い色彩をした楯と投槍とを振り回しながら、勢いよくコアトリクエの体から飛び出して来た。神の子ウィツィロポチトリは、全身を美しく彩って、鳥の羽根飾りを頭につけて、左の脚にさまざまな羽根をまっていた。

ウィツィロポチトリは大地の上にしっかりと足を踏みしめて、近づく姉や兄たちを



じつと見つめていた。悪者どもは、得体の知れぬ子供が自分たちの方を眺めて踏んぞり返っているのを怪しんだが、

「たかが子供一匹だ。さあ、やっつけろ」

と、いっせいにコアトリクエを目がけて駆け寄った。とたんにウィツィロポチトリが体をひとゆりゆり動かすと、たちまち蛇のような形をした電光がさっとほとばしり出て、真先に立っていたコヨルシャウキをつつんだ。と思うと、彼女の体は微塵に砕けて、大地の上にけし飛んでしまった。

これを見ると、悪者どもは気が遠くなるほど驚き恐れて、後をも見ずに一散に逃げ出した。ウィツィロポチトリは、

「生みの親を殺そうとした不届き者。逃げようたって逃がすものか」  
と叫びながら、まっしぐらにその後を追っかけた。

悪者どもとウィツィロポチトリとは、追いつ追われつして、山のまわりを四度めぐった。が、悪者どもはとうとう追いつめられて、苦しまぎれに湖の中に飛び込んでしまった。ウィツィロポチトリは、岸边に突っ立ちながら、

「さあ、いよいよお前たちの最期だぞ」

というなり、投槍を飛ばして、彼らを殺してしまった。

## 火の起源

人間は初め火というものを持たなかった。だから鳥や獣を手に入れても、生のままで食べなくてはならぬし、寒いときには、ひどい苦しみを受けねばならなかった。ケツァルコアトル神がそれを見て、非常にかわいそうだと考えた。

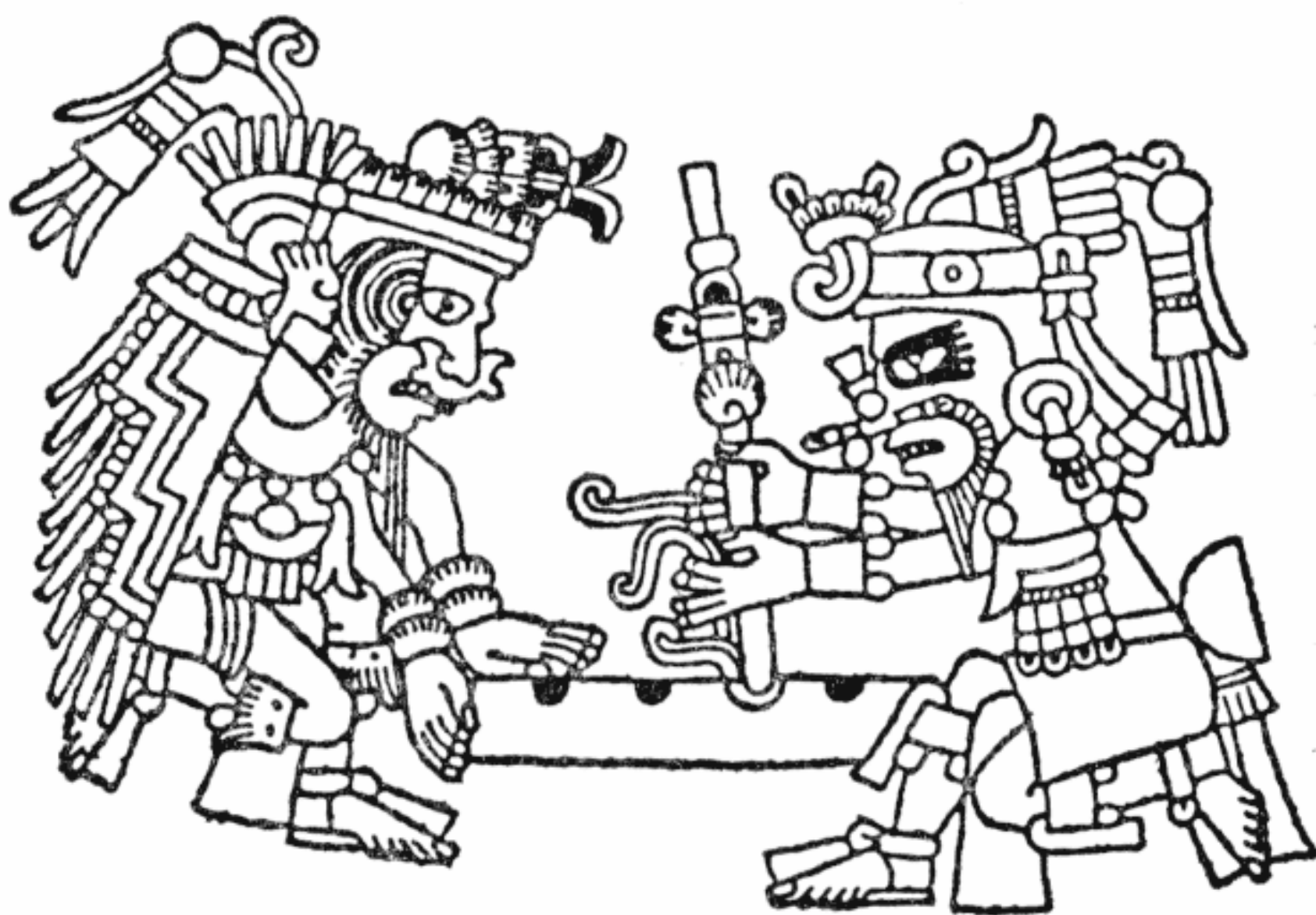
ある日ケツァルコアトルは、人間たちを呼び集めて、

「今日は、わしがお前たちに大変便利なものをこしらえてやる」といった。人間たちは非常に喜んで、

「ありがとうございます。その便利なものと申すのは、いったい何でございます」と尋ねた。ケツァルコアトルはにこりと笑って、

「何だか、お前たちの方で当ててみるがいい」

といった。人間たちは互いに顔を見合わせて、しきりに考えていたが、やがて一人の男が、



「新しい火」を起こす儀礼



「わかりました。すばらしい投槍でございますう」といった。

「違う」

と、ケツアルコアトルが頭をふった。

「では、どんどん食物を出してくれる器でございますう」

と、また一人の男がいった。

「違う」

と、ケツアルコアトルが頭をふった。

「では、美しい着物でございましょう。きつとそうですわ」

と、一人の女がいった。

「違う」

と、ケツアルコアトルが頭をふった。

「では、きつと住みよい家でございましょう」

と、また一人の女がいった。

「違う」

と、ケツアルコアトルがまた頭をふった。人間たちは不審そうな顔をして、

「それでは何でございましょう。早く教えて下さい」と叫んだ。ケツアルコアトルは明るい微笑を見せて、

「火というものだよ」

といった。

「ええ、火ですって。火というのはどんなものでございませう。そして何になるのでございましょう」

と、人間たちが口々に尋ねた。

「血のように赤くて、太陽の光のように明るく温かいものだよ。これさえあれば、鳥や獣の肉も、生で食べるよりずっとうまく食べられるし、寒いときにも気持よく日を送ることが出来るのじゃ」

と、ケツアルコアトルがいった。これを聞くと、人間たちは飛び立つほど喜んで、「大変結構なものでございますね。どうか早くそれをこしらえて下さいませ」といった。

ケツアルコアトルは黙って、足に穿いていた靴を脱いだ。そしてそれをさっとうち振ると、血のように赤くて、太陽の光のように明るく温かなものが、とろとろと燃え出した。

「これが火というものだよ。大切にするがいい」

ケツアルコアトルはこういって、火を人間に与えた。こうして人間世界に初めて火というものが現われた。

### ケツアルコアトルの威力

ケツアルコアトルは、恐ろしい威力を持った神であった。この神が岩に手を当てる、岩が凹んで、ありありと手の痕が出来るし、大きな石を抱え上げて、雨のように八方に投げとばすと、森という森が見る間にただの平地になってしまふし、また矢を射ると、どんな大きな樹の幹でも突き抜けてしまふのであった。

それからこの神が自分の思っていることを人間たちに伝えようとするときには、いつも一人の使いを出すのであったが、その使いが「叫びの丘」と呼ばれているツァツィテペクの頂に突っ立って、ケツアルコアトルの言葉を口にする<sup>(5)</sup>と、その声は雷も及ばぬほど高く鳴り響いて、五十里の外に聞こえたということである。



## 蜘蛛の災い

ケツァルコアトルが、トルテカ人の王であつたときには、すべてのものが非常に幸福であつた。するとアステカ族の神テスカトリポカが、それを忌々しく思つて、どうにかしてケツァルコアトルを苦しめてやろうと考えた。

あるときテスカトリポカは、自分の姿を蜘蛛に変えた。そして美しい糸を吐いて、その糸にすがりついて、空から大地に降りて来た。そしてケツァルコアトルの館に這つて行つて、プルケという酒を王に勧めた。王がその酒を飲んでみると、何ともいえないほどいい味がしたので、その後は毎日のようにこれを飲みつづけていた。そうしてゐるうちに、ケツァルコアトルの心が次第に荒んできて、妃のケツァルペトラトルのことなどすっかり忘れてしまつて、淫らな女たちを愛するようになった。

こうしてケツァルコアトルの身に恐ろしい呪いがふりかかつて来た。王は永い間住みなれたアナワクの都を立ちのかねばならなくなった。ケツァルコアトルはやっと気

がついて、

「愚かなことをした。アステカ族の神に欺かれて、なつかしい国を失うことになってしまった。だが、ここを立ちのく以上、美しい国をそのままの姿でおめおめと敵の手に引渡すことはしないぞ」

といって、かずかずの宮殿をすっかり焼き払って、黄金や白銀でこしらえたおびたらしい宝をみんな隠してしまって、ココアの樹をつまらぬ雑木に変えて、ありとある鳥どもをトラン地方から追ひ払ってしまった。

こうして国中は寂しくて汚なくて、見る影もなくなってしまった。アステカ族の魔術師は驚きあきれて、

「これではせつかくケツアルコアトルを逐い出しても仕方がない」

といって、立ちのこうとするケツアルコアトルを急に引き留めようと努めた。しかしケツアルコアトルは、強く頭を振って、

「だめじゃ。太陽がわしを呼んでいるのだから」

といった。魔術師は困ってしまった。

「それでは宝物の所在を教えて下さい」と願った。

「わしは知らぬ。宝物が欲しけりや、自分で探し出したがいい」

と、ケツァルコアトルが冷ややかに答えた。

「では、雑木を元のココアの樹に還して下さい」

と、魔術師が頼んだ。

「わしは知らぬ。ココアの樹が欲しけりや、お前たちの手で雑木の始末をしたらいいだろう」

と、ケツァルコアトルが、にやにや笑いながら答えた。

「それでは、せめて鳥たちを呼びかえして下さい」

と、魔術師たちが情なさそうな声を出した。しかしケツァルコアトルはやはり冷然として、

「わしは知らぬ。鳥たちが欲しけりや、お前たち自身で呼びかえしたがいいだろう」

と答えた。そして悠々として歩き出した。魔術師たちはもうどうともすることが出来ないで、ぼんやりした顔をして、その後ろ姿を眺めているだけであった。

ケツァルコアトルはタバスコというところまで歩きつづけた。そしてそこにあった蛇の筏に乗るなり、浪に漂って太陽の出る東の方へと消えて行った。<sup>(6)</sup>



## 四人の若者

ケツァルコアトルは、蛇の筏に乗って東の方に去ってしまった後でも、自分がこれまで治めていた国のことが心に残っていた。

ある日ケツァルコアトルは、自分が信頼している四人の若者を呼び出した。彼らは主なる神と悲しい運命をともにするためにやはり東の方について来ていたのであった。

四人の若者は、ケツァルコアトルの前にかしこまって、

「何かご用でございましょうか」

と尋ねた。ケツァルコアトルはおごそかな声で、

「わしが立ちのいたあとの世界が気にかかってならぬのじゃ。だからお前たちは、再び元の国に帰って、四人で土地を分けて、仲よく治めてもらいたい」

といった。若者たちは悲しそうな顔をして、

「わたくしたちは、いつまでもお側についていたい願いでございます。わたくしたちだけで元の国に帰ることはいやでございます」

といってケツアルコアトルのいいつけに従おうとしなかった。ケツアルコアトルは、今までよりもいっそうおごそかな声で、

「いや、どうあっても立ち帰ってもらわなくてはならぬ。このままにしておくと、国は乱れるばかりじゃ」

といった。若者たちは心細そうな顔をして、

「では、どうしてもあなた様と永久にお別れしなくてはならないのでございますか」と尋ねた。するとケツアルコアトルは急に優しい顔にかえって、

「いや、そんなことはない。わしもこのまま東の国にいつまでも留るつもりではない。ときが来たら、またあの国に立ち帰って、再び勢いをふるうつもりじゃ。お前たちは、それまでわしの代りになってくれるまでじゃ」

と答えた。これを聞くと、四人の若者は顔を輝かして、

「では、すぐにこれから立ち帰ることにいたします。あなた様にも一日も早くお出で下さるようお願いいたします」

といって、ケツアルコアトルのもとを離れた。

四人の若者は、いずれも風のように速い足をしていた。彼らはやがていったん立ちのいた世界に帰りついて、四人で土地を分けて、仲よくこれを治めながら、主なる神ケツァルコアトルの姿の現われるのを待ちくらしていた。<sup>(7)</sup>

### 金星の由来

ケツァルコアトルが、アステカ族の神々に苦しめられて、自分の国を立ちのかねばならなくなると、非常に悶え苦しんで、

「せっかく永年かかって拓いた自分の領地を立ちのくほどなら、いっそのこと死んでしまった方がいい」

といって、どんどん薪を積み上げ始めた。薪の上に体を横たえて、火をつけて焼死をしようというのである。それを見ると、ケツァルコアトルの従者たちはひどく気を揉んで、

「大切なお体です。短気なことをなさいますな」

「いったんここを立ちのいて、折を見て敵のやつらを取りひしぐことになすったがいと思います」

と熱心に説き勧めた。しかしケツァルコアトルはどうしても従者たちの言うことを聞かなかった。彼はしきりに薪を積み上げつづけた。そして山のようになると、静かにその上によじのぼって、薪に火をつけた。

ケツァルコアトルは目をつぶって、じっと薪の山の中に横たわっていた。こうなると、従者たちはどうすることも出来なかった。みんな薪のまわりに立ち並んで、心から泣き悲しんでいるだけであつた。しばらくすると、ケツァルコアトルは少し目を開いて、従者たちの方を見ながら、

「そんなに悲しまなくてもいい。わたしはこの世から姿を消すが、また天界に現われるのだから」

といった。従者たちは少し元気づいて、

「それは本当でございますか。ではどんなお姿で天界にお現われになるのでございますか」

と尋ねた。

「星になるのじゃ。美しく光り輝く星になるのじゃ」



ケツァルコアトルはこういつてまた目をつぶった。

火は大きな音を立てて燃え上がった。炎々たる焰がすっかりケツァルコアトルの体を包んでしまった。彼の体は見る見る燃え崩れていった。従者たちは大きな溜息をついて、

「もう駄目じゃ。お体はすっかり灰になってしまった」

と泣き声を立てた。しかし従者たちの目にはつかなかったが、ケツァルコアトルの体は決してすっかり灰になってしまったのではなかった。心臓だけが燃えのこって、猛火の中でびくびく動いていた。と思うと、たちまち火の中から跳り出して、大空に舞い上がった。それに気がついて従者たちは、

「あれ、ケツァルコアトルさまの心臓が空中に飛び上がったぞ」

「きつとあれが天まで昇って行って星になるだろう」

と、口々に叫んで、いっせいに空を仰いでいた。心臓はすばらしい勢いで上へ上へと飛んで行った。そしてやがて天界に届いたかと思うと、光り輝く一つの星に変わった。それがすなわち金星であった。<sup>(8)</sup>

## 妻 奪 い

雨の神トラロクの妻にトラソルテオトルという女神があった。

トラソルテオトルは、多くの女神のうちで一番美しかった。ふさふさとした髪の毛、肉づきのいい体、ふっくりと豊かに盛り上った乳房、そして五体から光明がさすかと思われるほど麗しかった。

だからトラロク神は心からトラソルテオトルを愛して、片時もその側をはなれぬようにしていた。大勢の男の神たちはそれがうらやましく妬ましくてたまらなかった。そして誰も彼も心の中では、

「トラロク神は本当に果報者だな。わしにもあんな美しい妻があったら、どんなにいいだろう。何とかしてトラソルテオトルをわしのものにしたいものだな」

と思ったが、しかしトラロク神はなかなか勢力のある神なので、誰も心の中で思っていることを実行しようとはしなかった。

すると、ある日神々のうちで一番勢力の強いテスカトリポカが、みんなの神にむかって、

「トラソルテオトルは、実に美しい女ではないか」

といい出した。神々はお互いに顔を見合わせて、にやにやと笑うだけで、何とも答えなかった。と、テスカトリポカ神がさらに言葉をついで、

「誰かあの女をトラロク神の手から奪いとるものはないかね」

といった。神々はまた顔を見合わせたが、やがて、

「そんなことは思っても駄目です。そんなことをすると、トラロク神の祟りが恐ろしいですからね」

と答えた。テスカトリポカ神は、しばらくの間黙っていたが、やがて、

「みんな臆病者ばかりだな。よし、それではわしがあの女を奪いにとって見せよう」

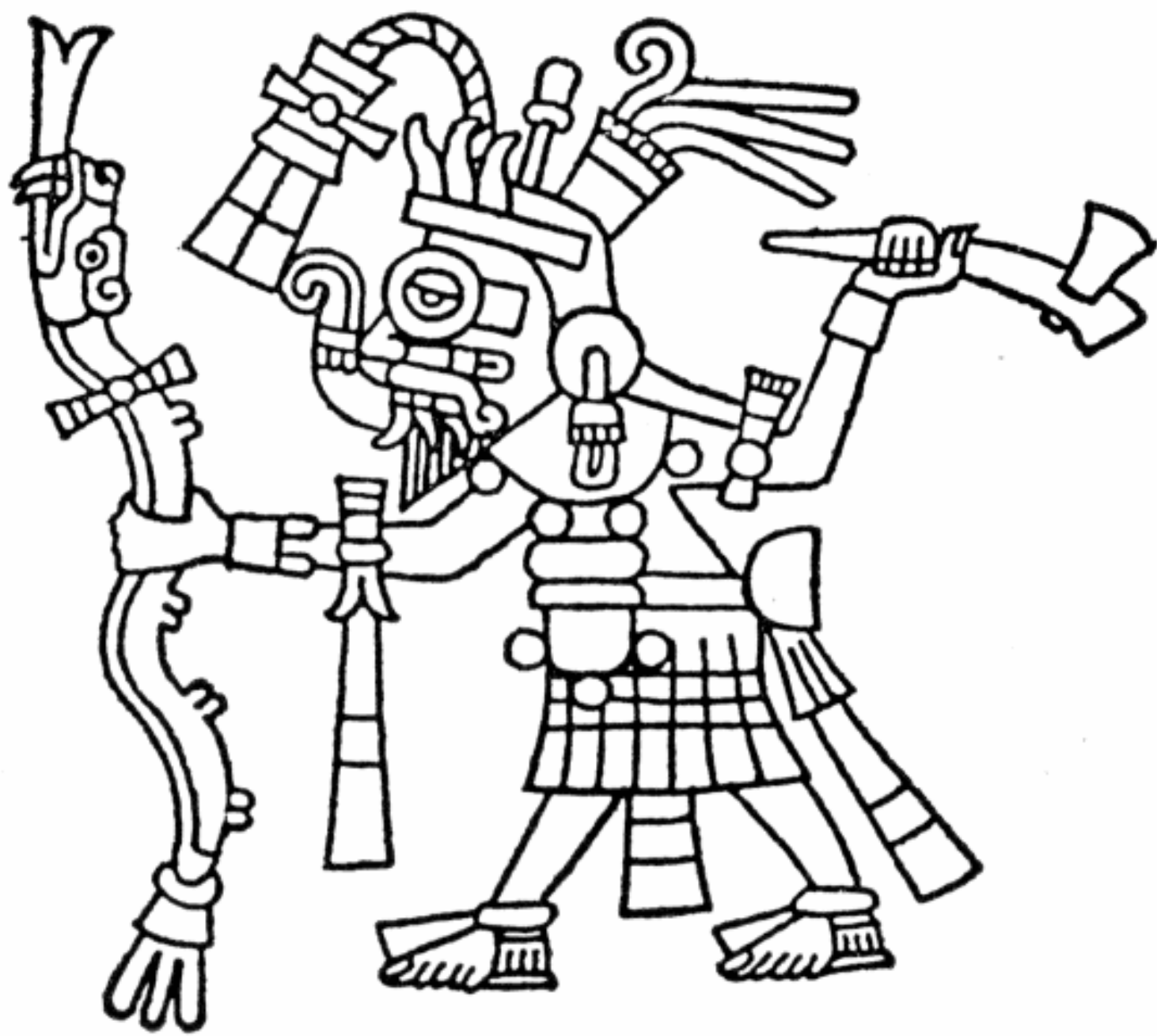
といい出した。神々は驚いて、

「お止しなさい。そんなことをすると、ろくな目にはあいませんよ」

とおし止めた。と、それがぐっとしゃくにさわったと見えて、テスカトリポカ神は、たちまち目を怒らせて、神々を睨みつけた。そしてきっぱりした口調で、

「いや、そういうなら、わしは意地ずくでもあの女をわしのものにしてみせるぞ」といった。

ある日トラロク神は、下界に雨を降らせるために、自分の館を出て行った。あとに



トラロク（雨の神）



はトラソルテオトルだけが残っていた。いいおりをねらっていたテスカトリポカ神は、それを見ると、すぐにその館に訪ねて行った。そして言葉巧みにトラソルテオトルに言い寄ると、愛欲と奢侈との女神だけに、彼女は、テスカトリポカのような偉い神といっしょになったら、さぞかし楽しいことであろうと思って、とうとうその言葉に従うことになってしまった。

テスカトリポカ神は非常に喜んで、

「あの男が帰って来ると面倒だ。今のうちにここを立ちのくことにしよう」

といったかと思うと、たちまちトラソルテオトルのしなやかな体を小脇に引っかかえて、どこともなく姿を隠してしまった。

帰って来て妻がいなくなったことに気がついたトラロク神は、さっと顔色をかえて、あたりを隈なく捜し回った。しかしどこにも妻の姿が見えないので、大急ぎで、神々のいるところに駆けつけて来た。

そして声を荒らげて、

「わしの妻を隠したのはお前たちだろう。さあいえ。いわないと、ひどい目にあわせるぞ」

と叫んだ。これを聞くと、神々は心の中でさてはと思ったが、トラロク神の怒りをお

それで、誰一人口をきくものがなかった。トラロク神はますます猛り立って、  
「早く白状しないか。よし、いつまでも黙っているなら、片端から叩き殺してしま  
うぞ」

と叫んだ。神々は困ってしまったて、とうとうテスカトリポカ神がトラソルテオトルを  
奪って行ったと話した。

テスカトリポカの名を聞くと、トラロク神の真赤になった顔から、見る見る血の気  
があせて行った。神々のうちで一番勢力のあるテスカトリポカの仕業と聞くと、どん  
なに口惜しくても、どんなに腹が立っても、どうも手の出しようがなかった。トラロ  
ク神は歯がみをして突っ立っていたが、やがてすごすごと自分の館に帰って行った。<sup>(9)</sup>

### 隠者の墮落

昔ヤプ・パンという一人の隠者がいた。ヤプ・パンは人間生活のわずらわしさを避け  
て、とある山の奥に引きこもって、ひたすらきよい月日を送ることにつとめていた。

初めのうちは、人界の乙女たちがそれを珍しがって、

「ヤプパンさんは、森の中に引き込んで、肉欲から遠ざかることに苦心していらっしやるそうだわ。おかしいわ。わたしたちがおしかけて行って、血の気の多い生活に引きもどきましょうよ」

と話し合って、かわるがわる森の中におしかけて行っては、あらゆる淫りがましい嬌態<sup>な</sup>をつくして、ヤプパンの心に情火を燃やし立てようと努めた。しかしヤプパンはそれを眺めても、まるで枯木や冷たい岩のように落ちつき払っていた。乙女たちはとうとうあきれ返って、

「ほんとにあの人はまるで死人のようだわ。大騒ぎをして、こんな馬鹿馬鹿しいことはなかった」

と呟きながら、みんな人里に帰ってしまった。

すると今度は、いろんな悪魔どもがそれを聞き込んで、

「ヤプパンの奴、いやに隠者顔して行いすましているな。人間の乙女には目もくれなかったとしても、おれたちの手にはきつとのるだろうよ。いやどうしても物せなくては、おれたちの顔にかかる」  
といい出した。

悪魔どもは、かわるがわる森の中に訪ねて行った。そして目もさめるような美人となって、一生懸命に口説き立てたり、莫大な金銀財宝を持ち出して、浮世の楽しい生活に入るように勧めたり、もしくは恐ろしい怪物の姿となって、隠者の生活を止めなくて、食い殺してしまふぞと嚇しつけた。しかしヤプパンはやはり冷然と行いすまして、そうした誘惑や威嚇をはねつけてしまった。

天界にいる神々はそれを見て、

「えらい奴じゃ。感心な男だ」

と、口々に褒めそやした。すると愛欲の女神トラソルテオトルが軽く笑い出して、

「いや、わたしなら見事あの隠者の心に情火を燃やし立ててみせる」

といった。神々はむきになって、

「そんなことが出来るものか。出来ると思うなら、やってみるがいい」

といった。

「ではやってみますよ。まあどんなことになるか、みんな楽しんでいてもらいましう」

トラソルテオトルはこういって、天界から人間世界に降って来た。そしてヤプパンが行いすましている森の中に行って、夜となく昼となく誘惑の手のかぎりをつくし



て、隠者の心を蕩かそうとつとめた。そうしているうちにさしも道心堅固であったヤブパンも、女神の花のような姿と蜜のような言葉に次第に心が乱れて来て、とうとう身も心も淫らな情欲に浸ってしまふようになった。

トラソルテオトルはしすましたと思って、恋に狂うヤブパンを残したまま、天界に引き上げた。そして神々の前に出て、

「どうでしょう。わたしが言ったとおりではありませんか」

と、誇らしげに眼を輝かせた。神々はもう一言もかえす言葉がなかった。それが口惜しくてたまらないので、

「ヤブパンの奴、不屈きな奴じゃ。いやに隠者顔して、何というふしだらなことをするのだらう。どうしてもあのままにしては置けぬ」

と叫んだ。そしていろいろ話し合った末に、ヤブパンをさそりに変えてしまった。

さそりになったヤブパンは、せっかく永い間行いすましていた身の、ふとしたことから淫らな行いをするようになったのが恥かしくてたまらなかった。で、日の光を見ることが恐れて、いつも石の下に隠れ潜むことにした。しかし何といっても女性に道心を破られたのが口惜しくてたまらないので、人さえ見ると、その体を刺して、恐ろしい毒液を注ぎ込んで、これを悩まし苦しめるのであった。

だから今日でもさそりは石の下に隠れていて、人を刺すのである。<sup>(10)</sup>

### オマカトル神の怒り

あるとき一人の金持ちが、饗宴を催して盛大に歓楽の神オマカトルを祭ることにした。

金持ちは形の通りにオマカトルの神像を広間に安置して、古くから定められたいかめしい儀式に従って、その前に種々の供物をささげた。

そうしているうちに、あらかじめ招待して置いた客人たちがあとからあとと訪ねて来た。金持ちはその応接にとり紛れて、オマカトル神を祭る儀式に少しばかり手落ちがあったのに気がつかなかった。

やがて華やかな酒宴が始まった。ずらりと広間に居並んだ客人たちは、勧められるままに心おきなく酒を飲んだり肴を食べたりして、陽気に騒ぎ始めた。

酒宴がたけなわな頃に、どこからとなく一人の見知らぬ男が広間に入り込んで来

た。その男は黒と白とに体をいろどって、色紙を垂らした紙の冠を戴いて、花模様の縁をとった衣を纏っていた。人々はその男を見ると、みんなさっと顔色を変えて、「オマカトル神だ。とんだことになったぞ。きっとお祭りの儀式に手落ちがあったに違いない」

と、声をひそめてささやき合った。オマカトル神は、自分のお祭りに気に食わぬことがあると、きっときびしい罰を加えるということによく知られていたのであった。

果たしてオマカトル神は、金持ちの前に突っ立って、苦りきった顔をして、

「無礼な奴じゃ。わしを祭るなら祭るで、なぜ形の通りの儀式を執り行なわないのか」

となじった。これを聞くと、金持ちは真青になって、風に吹かれる葦の葉のようにぶるぶるとふるえ出した。そしてかすれた声で、

「どうかおゆるし下さい。決して悪気で致したことでございませんから」

と詫びた。しかしオマカトル神は頭を振って、

「今になってそんなことを申しても、もう遅い。お前のような無礼なものは、今後わしの崇拝者とは思わぬ。どんな災いが降りかかっても、自業自得と心得るがよいぞ」

といいすてて、そのまま立ち去ってしまった。金持ちはもとより、招かれた客人たちもすっかり怖気がついて、そこそこに酒宴を止めてしまった。そしてどんな災いが身にふりかかるかと、夜昼心を痛めていた。

しばらくすると、金持ちを始めとして、饗宴の座につらなつた人々が一人残らず烈しい胃の病いにかかつて、どんなに養生をしても治らなかつた。人々は青息吐息をういて、

「さてもオマカトル神の罰の恐ろしさよ」  
と語り合つた。<sup>(11)</sup>

## 死人の旅

死の世界をつかさどっているのは、ミクトランもしくはミクトランテクトリという神である。この世での命がすぎたものは、みなこの神の支配している冥府<sup>よみぢ</sup>に行くのである。

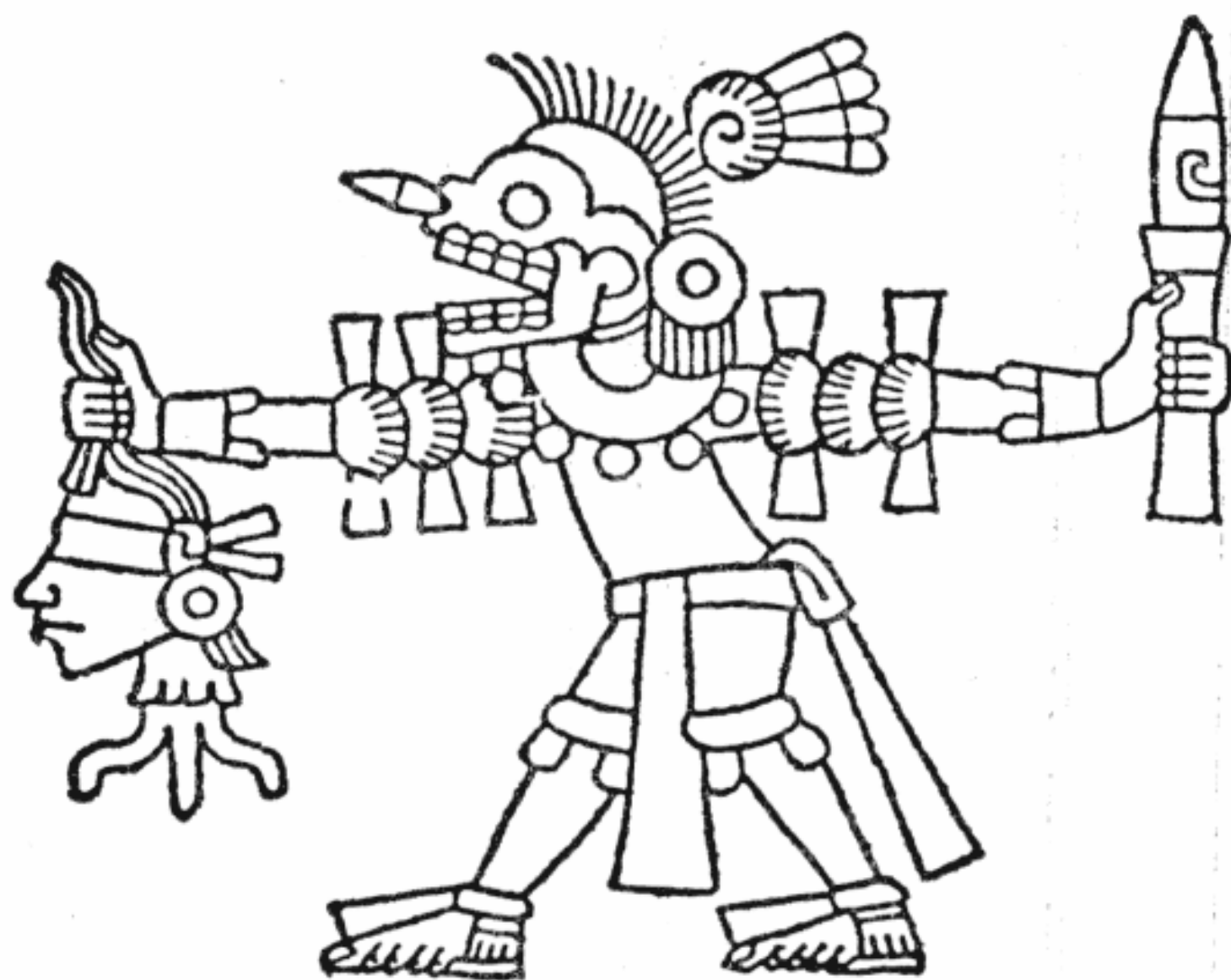


メキシコ人の信仰によると、死人はこの世からあの世に辿りつくまでに、さまざまに危い目に会わなくてはならぬ。だからメキシコ人は、死人があると、幾本かの投槍を束ねたものをこれに与えるのであった。

冥府への旅人は、投槍の束を手にして、寂しく恐ろしい旅へと出かける。しばらく行くと、彼は、二つの高い高い峰が向き合つて聳そびえているところに来る。彼はどうしてもその間を通りぬけなくてはならぬのであるが、うっかり歩いていると、二つの峰がだしぬけに落ちかかつて、彼の体を微塵にうち砕いてしまうのであった。

二つの峰の間をうまく通りぬけると、今度はもの凄いの蛇がその行手にとぐろを巻いていて、死人を見るなり跳りかかつて来る。死人は投槍を使って、これと烈しく闘わなくてはならぬ。やつのことで蛇をうち負かして進んで行くと、今度は一匹の恐ろしい鰐がながながと路に横たわっている。鰐の名はショチトナルと呼ばれる。ショチトナルは死人の足音を聞きつけると、大きな口をくわつと開いて飛びかかつて来る。死人は投槍をふるって、これと懸命に闘わねばならぬ。

鰐の難をのがれると、今度は八つの砂漠と八つの山とが、行手にずらりと連なっている。苦しい思いをして、それを通りぬけると、いきなり烈しい旋風つむじかぜが死人の体に吹きつける。旋風は刃のように鋭くて、堅い岩でも切りぬけるのであった。それをうま



ミクトランテクトリ

く避けることが出来て、なおも路を急いでいると、イスプステケという悪魔が待ちかまえている。イスプステケは、うしろ向きになった鶏の脚を持っている。そしてその大きな鋭い爪で死人を掴んでは、ずたずたに体を引き裂くのであった。

投槍のお蔭で辛くもこの悪魔からのがれると、今度はまたネシュテペワという悪魔が、行手に控えている。ネシュテペワは、死人がやって来るのを見ると、空中に灰を投げとばす。灰は空一面に雲のように漂ってあたりを真暗にしてしまう。死人は痛む目を見はって、それを通りぬけねばならぬ。

こうしたかすかずの危難を首尾よく切りぬけると、初めて冥府の門に着く。冥府のものどもは、死人を連れて、ミクトランの前に出る。死人はこの死界の王者の許しを得て、冥府に住むことになる。

## 建国の伝説

キリストの化身から五六六年たった頃、トルテカ族が、ウェイマツィン（「偉大な

る手」のこと」という名高い巫術師ふじゅしに率いられて、メキシコのトランにやって来た。ウェイマツィンはトルテカ人たちにむかって、

「ここは非常にめでたい土地じゃ。ここに都市まちをこしらえるがいい」

といった。トルテカ人たちはウェイマツィンの教えに従って、トランの地に都市まちをこしらえることにした。

彼らは六年の間懸命に働いた。その間に壮麗な宮殿や館などが、つぎからつぎへと建てられていった。かずかずの神殿も空にそびえて立ちならぶようになった。都市まちは大きな谷地に臨んでいたが、地が肥えて、さまざまな果実がよく出来るので、誰いうとなく、「果実の場所」と呼ばれるようになった。そして丘には鳥や獣類がたくさん棲んでおり、川には魚が群がっていた。

こうした結構な谷地に素晴らしく美しい都市が出来上がったが、まだトルテカ人を統すべ治めていく首領が無かった。そこで大勢の酋長たちが寄り集まって、いろいろと話し合った末に、チャルチウトナクというものを、みんなの王に戴くことにした。



## ウエマク王の物語

チャルチウトラトナク王から数代たって、紀元九九四年にウエマク二世が、トランの都市<sup>まち</sup>の王となった。

王は始めのうちは賢く国を治めていたが、年月がたつにつれて、次第にわがまま勝手な振舞いをするようになった。そこで国内のところに謀叛が起こり、さまざまの妖しい凶兆が現われ始めた。年をとった、考え深い人たちはみんな眉をひそめて、「どうも困ったことになった。由緒あるこの都市<sup>まち</sup>が亡びるのも遠いことではあるまい」

などと囁きかわすようになった。

狡猾な巫術師のトウエヨという男が、早くもその様子を見てとって、魔法の太鼓を持ち出して、しきりにそれを叩きつづけた。と、トランの都市<sup>まち</sup>の人たちは、目に見えぬ怪しい力に牽きつけられたように、トウエヨのまわりに群がって来た。トウエヨはなおも太鼓を鳴らしつづけた。いんいんたる太鼓の音につれて、人々は気が狂ったように踊り出した。

人々は踊って踊って踊りぬいた。そして草木も眠る真夜中になると、もののけにつかれたように、高い高い断崖の上に駆けあがるなり、遙か下の谷底にころげ落ちて、みんな冷たい石に変わってしまった。トウエヨはにやりとものすごく笑って、

「これが都市<sup>まち</sup>の亡びる手始めじゃ」

とつぶやいた。トウエヨの言葉が闇に消えたか消えないうちに、トランの都市<sup>まち</sup>に近くそびえ立っている山々が、すさまじい音を立てて、火を噴き岩を飛ばし始めた。そして炎々と燃え上がる焰のうちに、恐ろしい形相をした怪物どもが現われて、都市<sup>まち</sup>の人を脅かすような身振りをしながら、懸命に騒ぎまわった。

トランの都市<sup>まち</sup>の首領たちは驚き怖れて、

「まことに容易ならぬことじゃ」

「こうしたさまたまの怪しい兆しは、神がトランの都市<sup>まち</sup>の人々に対して怒っていらっしゃるしるしにちがいない」

「たしかにそうじゃ。わしたちは一刻も早く犠牲をささげて、神々のおゆるしを乞わなくてはならぬ」

と話し合った。

首領たちは、戦で生捕りにしたもののどもを祭壇の前に引っぱり出した。真先に一人

の若者が祭壇の上に横たえられた。お坊さんは、犠牲をささげる風習に従って、若者の胸を切り裂いて、心臓を取り出そうとした。しかし驚いたことには、若者の胸には心臓が入っていなかった。いなあらゆる血管に一滴の血潮すら見出されなかった。並み居る人たちは、あまりの怪しさに恐れおののいて、しかばね屍をほうり出したまま逃げ散ってしまった。

日がたつにつれて、しかばね屍は腐れただれて、何ともいえぬ悪い臭いが空に漂うようになった。それがためにトランの都市まち中に恐ろしい病いが起こり、それが見る間に四方にはびこって、片端から都市の人の命を奪っていった。

こうした騒ぎと不幸とをよそにして、ウェマク王は、お気に入りの家来たちをつれて、森の中をそぞろ歩きをしていた。と、うしろの方で、

「待て、ウェマク」

と呼ぶものがあつた。王は、

「おれの名を呼びすてにする不屈き者は、何奴だろう」

と思つて、目をいからせてうしろを振り向くと、大勢の神々がおごそかに立ち並んでいた。ウェマク王は驚き怖れて、頭を垂れたまま、じっと突っ立っていた。神々は王を見つめて、

「そなたの悪い行いが、どんな禍いを引き起こしているかは、よく知っているだろう」

といった。王はこれを聞くと、わが身の一大事とひとぢみに縮み上がって、

「どうかわたくしだけはお赦し下さい。王者の位と富とをわたくしから、お奪いにならぬよう、ひたすらお願いいたします」

といった。これを聞くと、神々は互いに顔を見合せて、しばらくの間黙っていたが、やがて、

「あきれかえった奴じゃ」

と、一人の神がいった。

「ほんとにそうじゃ。かずかずの禍いに苦しみ悩んでいる民草のことは気にもかけないで、自分勝手なことばかり申している」

と、他の神がいった。

「こうなっては仕方がない。民草には気の毒だが、まだまだ多くの禍いを下さなくては、王の目を覚すことが出来ないであろう」

と、さらに他の神がいった。神々はウェマク王にむかって、おごそかな声音で、

「今から六年の間恐ろしい禍いがうちつづくから、そう思っているがいい」



といいすてて、どこともなく姿を隠した。

冬になると、ひどい霜が日ごと降りつづけた。ありとある草木や作物が、そのために枯れしぼんで、人々はほとんど飢死にしそうになった。夏になると、烈しい日照りがつづいて、流れという流れがすっかりからからに乾上がるし、岩という岩がものすごい熱にとろとろと溶け出した。人々は暑さと渴きとに苦しみ悶えて、のたうちまわらなくてはならなかった。

それにつづいて、ものすごい雨風がやって来た。重く濁った水が、吹き荒ぶ風に大きな波を立てて、街路や小路に溢れみなぎり、恐ろしく大きながまが数知れず現われて、逃げまどう人々を苦しめた。翌年には、烈しい旱魃かんばつが襲って来た。そして雲霞のようになごが群がって、見る影もなく畑を荒してしまった。それから大地を叩きつぶすようにひょうが降り出し、つづいて世界がこわれてしまふかと思われたほどすさまじい雷雨がやって来た。

六年にわたるかずかずの禍いに、トランの都市まちの人々の九分通りがみじめに死んで行った。それを見ると、さすがのウェマク王も、心から神々の怒りが恐ろしくなつて、王も位を退くことに決心した。王は人々を呼び集めて、

「年々大きな禍いがつづくのは、全くわしの不徳のいたすところじゃ。よってわしは

位を退いて、アクシトルを新たに王者にするつもりじゃ」

といった。ところでアクシトルは、ウェマクの正当な子ではなくて、卑しい女に産ませた私生児であつた。だからウェマク王の言葉を聞いた人々は、口をそろえて、

「仰せではありませんが、わたし達は、アクシトル殿を王者にいただくことは出来ません」

と叫んだ。これを聞くと、ウェマク王は血相を変えて、

「それはまたどうしたわけじゃ。アクシトルには王者となる資格がないと申すのか」

といった。

「そうでございます。あの方には王者となる資格がないと存じます」

と、人々がいっせいに叫んだ。ウェマク王はますますいきり立って、

「何という不埒なことを申す。わけをいえ、わけをいえ」

と叫んだ。

「王者は神さまでございます。正しい血統の方でなくては、王者になることは出来ません。アクシトル殿は卑しい女の腹から出た方であります。とうてい王者になる資格はございません」

と、人々は熱心にいいはった。これを聞くと、ウェマク王は火のように怒り出して、「不屈きなことを申すな。アクシトルは立派にわしの子じゃ。お前たちが何と申しても、あれを王者の位に即けるぞ」

といって、とうとうアクシトルに自分のあとを嗣<sup>つ</sup>がせることにきめてしまった。

人々はそれが不平でたまらなかった。で、思い思いに寄り集まって、

「卑しい血統のものを王者にいただいては、神々に対してまことに相済まぬではないか」

「そうとも、そうとも。自分たちの目の玉が黒い間は、アクシトルなんぞを王者にすることははないぞ」

「こうなつては、腕ずくで、自分たちの思いをおし通すほかはない」

と話し合つた。そして自分たちのうちから二人の男を選び出して、これを首領に謀叛を起こした。ウェマク王は非常に驚いて、ひそかに二人の首領のところに使いをやつて、

「愚かなものどもにおだてられて、謀叛の張本人になつてもろくなことはない。おとなしくわしの味方になつておくれ。褒美は望みのままじゃ」

といわせた。二人の首領は、甘い言葉に釣られて、王の味方になつてしまったので、

いきり立った人々は、謀叛の腰を折られて、泣寝入りになってしまった。ウエマク王はそれ見ろといわぬばかりに、アクシトルにあとを譲った。

### トルテカ国の滅亡

アクシトル王は、始めのうちは賢明に国を治めていた。しかし年月がたつにつれて、父なるウエマク王にもまして乱暴な王者になってしまった。苦しみ悩んでいた人はとうとう我慢が出来なくなって、いっせいに謀叛を起こした。今度は名高い巫術師のウエウエツインが謀叛に味方して采配を振るうことになったので、なかなか勢いが鋭かった。

アクシトル王は、父なるウエマク王のやり方にならって、謀叛の輩の主立ったものを莫大な金で丸め込もうと一生懸命になっていた。が、トランの都市<sup>まち</sup>の近くに住んでいた野蛮人どもが、早くもこの様子を見てとって、

「トランの都市<sup>まち</sup>に内乱が起こっている。この機をはずさずトルテカ族を攻め亡ぼせ」

といって、アナワクの湖沼地帯に攻め入って来て、地味の豊かなところに根を生やしてしまった。

神々は、アクシトル王に対して烈しい怒りを燃やし立てた。それと知って賢い人々は、神々の心をなだめるために、トルテカ族の神聖な都テオティワカンに大きな集会を開いた。そしていろんなことを話し合っていると、どこからとなく一人の巨人が現われた。ものすごい形相をした巨人は、小山のゆるぎ出したように会議の座にふみ込んで来て、

「ちっぽけな人間の奴ら、何をくどくど喋っている」

というなり、大きな手をさし伸して、一度に二十人もの男をひっ掴んだかと思うと、おっと叫んで、地面に投げつけた。人々は大地に脳味噌をほとばしらせて、息が絶えてしまった。それを見ると、巨人はからからと笑って、

「もろい奴らじゃ。まるで蛙のようにへたばりおった」

といいすてて立ち去った。生き残った人々は、ほんと大きな息をついて、お互いの無事を祝し合っていた。と、どこからとなく美しい子供が一人会議の座に入り込んで来た。人々はその可愛い顔に心を牽かれて、子供のそばに集まって行った。と思うと、

「あっ、臭い」



「おお、これはたまらないぞ」

と叫んで、急にあとに飛びすさった。子供の頭が膿みただれて、鼻もちならぬ悪臭を放っていたのであった。子供は驚き騒ぐ人々を尻目にかけて、悠々と出て行った。そのあとで悪い臭いをかいだ人々が、ばたばたと床の上に倒れて、そのまま死んでしまった。怪しい子供は、巨人が姿を変えたのであった。

巨人は度々現われた。現われるたびに姿を変えて人々を苦しめ殺した。人々はもう生きた心地もしなかった。最後に巨人は生きのこっているものどもを睨みつけて、

「お前たちがいくら寄り合って相談をしても駄目だよ。神々はもうとっくにお前たちを見限っている。お祈りなんかしたって、耳にも入れはしないよ。それどころか神はお前たちを根こそぎ滅ぼしてしまおうと考えていらっしやる。命が惜しけりゃ、早くどこかへ逃げ失せた方がいいだろう」といった。

トルテカ族の主立った人々は、家族をつれてぞくぞくと国を立ち退き始めた。謀叛人の旗頭であるウェウェツィンは、

「さあ、アクシトル王を攻めほろぼすのは、もう一息だ」

といって、謀叛の輩を率いて、容赦なく攻め立てた。

隠退をしていたウェマク王は、わが子の一大事とばかり、奮い起った。アクシトル王の母も、国中の女を駆りあつめて女軍をこしらえた。アクシトル王は、それらの兵どもの真先に立って、懸命に謀叛人たちと戦った。

戦は数年にわたって勝負がつかなかった。そのうちに野蛮人どもが謀叛人に味方して、烈しく攻め立て始めたので、アクシトル王は散々のまけいくさとなった。そしてトルテカ族は、とうとうテスクコ湖のじめじめした地や深い山の奥に逃げ込まねばならなくなった。

こうしてさしにも栄えたトルテカ国も滅びてしまった。

---

### メキシコ市の建設

---

テスクコの湖の西の岸に近いところに一つの島がある。あるときアステカ族のお坊さんが、戦争で生捕りにしたコパルという乙女を、この島の岩石の上で殺して、神への犠牲にささげた。

それから幾年かたった後のことであつた。一人のアステカ人が、島の上を歩き回っている、乙女が殺された岩石の割目から一本のサボテンが生えていて、その上に一羽の大きな鷺がとまっているのを見つけた。鷺は鋭い爪に長い長い蛇を掴んで、折からさし昇る太陽の光をとらえるように、二つの翼を勢いよく張っていた。

「おお、何という素晴らしい勢いだろう。これはきつといいしるしにちがいない」  
アステカ人はこう叫んで、ある身分の高いお坊さんのところに駆けて行って、そのことを話した。お坊さんは話を聞いているうちに、何ともいいような神々しい気持がしてきた。

「水に潜れ、水に潜れ」

お坊さんはどこからとなくこういう声がするよう感じた。そこですぐ側にあつた池の中に飛び込んで、下へ下へと潜って行くと、水の底におごそかな姿をした一人の男が坐っていた。はっとしてよく見ると、それは水の神トラロクであつた。

トラロク神はお坊さんにむかつて、

「何しに来た」

と尋ねた。

「テスクコの湖の島の石から生えているサボテンに一羽の鷺がとまって、大きな蛇を

掴みながら、二つの翼を朝日にひろげているのでございます。いずれ何かのしるしだろうと存じまして、お尋ねに参ったのでございます」

と、お坊さんがうやうやしく尋ねた。トラロク神はしきりにうなずいて、

「そうであろう。実はわしがそなたを水の中に潜り込ませたのじゃ」といった。

「してあの鷺は何のしるしでございましょう」

と、お坊さんが重ねて尋ねた。

「そなたたちアステカ族の都市みやこを造れというしるしじゃ。テスクコの湖のそばに都市みやこを造るがいい。わしが許してやるから」

と、トラロク神がいった。

お坊さんは池からあがって来ると、すぐに人々を呼び集めて、トラロク神の言葉を伝えた。人々は喜び勇んで、みんな力を合わせて、テスクコの湖のそばに都をこしらえた。それがすなわちメキシコの市まちであった。

## 乙女の犠牲

アステカ族が、メキシコの町を造り上げると、一つの祭壇をこしらえて、これを戦の神のウィツィロポチトリにささげた。

ウィツィロポチトリは、ときどき犠牲を求める。そうした場合にささげるのは、普通は戦で捕虜にしたものの命であったが、国中に大きな災いが起こったというような大事な場合には、ウィツィロポチトリは、国内で最も身分のいいものを犠牲に求めるのであった。

あるとき、ウィツィロポチトリは、巫女の口を通して、

「一人の王女を祭壇にささげてもらいたい」

と告げた。これを聞いたアステカ族の王は、神にささぐべき娘がなかったのか、それとも自分の娘を犠牲にするのがいやであったのか、その点をはっきりしないが、とにかくコルワカン（メキシコの町の名）の王のもとに使いを立てて、

「どうか御身の娘御を一人送ってもらいたい。ウィツィロポチトリ神の母に仕立てて、一同で崇めること<sup>あが</sup>にしたいから」



といわせた。コルワカンの王は、欺されるとは気がつかず、自分の娘がウィツィロポチトリ神の母として崇められることに、大きな誇りを感じて、すぐに一人の娘をメキシコの町に送りどけた。アステカ族の王は、しすましたと喜んで、

「一刻も早く乙女の皮を剥ぎとって、お坊さんの衣にするがいい」

といった。人々はすぐに生きながら乙女の皮を剥ぎとって、ウィツィロポチトリ神の役目をするお坊さんの衣に仕立てた。そして乙女の体は、美しく飾り立てて、神の犠牲に供えた。

コルワカンの王は、自分のいとしい娘が、ウィツィロポチトリ神の母として崇められる盛んな祭礼を見ようと思って、メキシコの町に乗り込んで来た。王はすぐに神殿のなかに案内されたが、薄暗くて様子がわからないので、目をしばたたきながらまごまごしていると、一人の男が王に一本の松明を渡してくれた。

松明の光で照らし出された神殿のなかには、一人のお坊さんが、軍の神ウィツィロポチトリの装いをして、端然と坐り込んで、大勢の人々がその前に平伏していた。コルワカンの王はじっとお坊さんを眺めているうちに、その衣が自分の娘の皮で出来ているのに気がついた。途端に王は、悲しさと恐ろしさのために気が狂ってしまった、いきなり神殿から逃げ出した。そして娘の痛ましい死を嘆きながら、うつけたような



人身御供の図

日を送りつづけた。

マヤ族の神話伝説

## 万物創造

太初この世には何もなくて、常闇が<sup>とこやみ</sup>八方にひろがっていた。ただ神々だけが存在していた。神々の名は、フラカンといい、グクマツ（もしくはケツアルコアトル）といい、シュピヤコシュといい、シュムカネといった。

これらの神々は、

「まず大地をつくらなくては、何事も出来ぬ」といって、一人の神が大きな声で、

「大地よ、現われよ」

と叫んだ。と、たちまちその声に応じて、大地が現われた。神々はお互いに相談をして、いろんな動物をこしらえて、大地の上に住まわせることにした。それから一番しまいに木をきざんで、たくさんの小さい人間を造ったが、これらの人間どもは、どうも性質が悪くて、神々をないがしろにするので、神々はひどく腹を立てて、



「こんなやくざな生物は、ひと思いに滅ぼしてしまった方がいい」

と考えた。で、フラカン神が大地の水という水の量を増し、同時に幾日も幾日も大雨を降りつづけさせたので、見る見る恐ろしい洪水が人間を襲って来た。人間は驚き騒いで、あちらこちらに逃げまどった。それを追いまわすようにして、シュコトコバチという鳥は、その目をつつき出し、カムラツという鳥は、その頭を咬み切り、コツバラムという鳥は、その肉をくらくし、テクムバラムという鳥は、その骨を砕くのであった。いな、人間に飼われていた家畜や、人間に使われていた道具さえも、逃げまどい泣き叫ぶ人間を眺めて、気持よさそうに嘲り笑うのであった。

「お前さんたちは、これまでわたしたちをひどい目にあわせていたんだ。今度はわたしたちの番だ。思いきり咬みついてやるよ」

と、犬や鶏がいった。

「お前さんたちは、毎日夜となく昼となくわたしたちを苦しめた。わたしたちはいつも泣き叫んでいた。さあ、今度はこっちの番だ。わたしたちの力の程を見せてやるよ。お前さんたちの肉をひき砕いて、肉団子をこしらえてやるよ」

と、石臼たちがいった。

「お前さんたちは、わたしたちの頭や脇腹をいぶしたり、火の上にかけて火傷をさせ

たり、ずいぶんと痛い目にあわせたね。さあ、今度はこちらの番だ。思いきり火傷をさせてやるよ」

と、茶碗や皿がいった。

人間どもは、みんなに追いかけて、苦しまぎれに、家の屋根によじ登ると、屋根は、

「この悪者め、こうしてくれるぞ」

といって、わざと地面に突っ伏してしまった。人間はあわてて樹の上によじ登った。と、樹は、

「このやくざものめ、こうしてくれるぞ」

といって、烈しく枝を動かして、人間どもを大地にふり落とした。人間どもはもう困ってしまって、洞穴の中に潜り込もうとした。すると洞穴は、

「この性悪ものめ、こうしてくれるぞ」

といって、いきなり口を閉じてしまった。

こうして大地の上を右往左往に逃げ回っているうちに、小さい人間どもは、水に責められ、生物に苦しめられ、いろんな品物にいためつけられて、とうとうみんな滅びてしまった。



洪水により滅亡する地球の図（絵文書より）

## 人間創造

フラカン神を始め、天界にいる神々は、新しく人間を造ろうと考えた。そこでいろいろと相談した末に、黄色いとうもろこしの粉と白いとうもろこしの粉とをねって、一種の糊をこしらえて、その糊で四人の男の人間を造った。一人はバラム・キツェ（「美しい歯を持つ虎」のこと）と呼ばれ、一人はバラム・アカブ（「夜の虎」のこと）と呼ばれ、一人はマハクター（「著しい名」のこと）と呼ばれ、残りの一人はイキ・バラム（「月の虎」のこと）と呼ばれた。

これらの人間は、姿も心の働きもほとんど神とかわらなかった。フラカン神はそれが気に入らなかった。

「わたちの手から造り出されたものが、わたちのように偉いものであるのは、どうも面白くない。何とかしなくてはならぬ」

フラカン神はこう考えて、もう一度他の神々と相談をした。そして、

「人間というものは、もっと不完全でなくてはならぬ。もっと知識が少ない方がよい。人間は決して神となつてはならぬ」

ということに話がきまつた。そこでフラカン神は、四人の男の眼をねらつて、ふっと息を吹きかけると、眼がくもつて、大地の一部しか見えなくなった。神々は大地の隅から隅まですっかり見る事が出来るのであつた。

こうして四人の男を自分たちよりも劣つたものにすると、神々は男たちを深い眠りに陥れて、それから四人の女をこしらえて、男たちに妻として与えることにした。四人の女は、それぞれカハ・パルマ（「落ちる水」のこと）と呼ばれ、チョイマ（「美しい水」のこと）と呼ばれ、ツヌニハ（「水の家」のこと）と呼ばれ、カキシヤ（「輝く水」のこと）と呼ばれた。

これらの八人の男女が人類の祖先である。



## 火の起源

人間たちは、始め火を持っていなかった。だから夜は真暗なところにいなくてはならぬし、寒いときには、ただがたがたふるえていなくてはならなかった。そしてせつかく鳥や獣を手に入れても、生のままで食べるよりほかなかった。

トヒル（「ぶらつく者」のこと）という神が、それを見て、

「どうもかわいそうだ。人間どもに火を授けてやることにしよう」

といって、両方の脚を烈しくすり合わせると、たちまち火が燃え出した。人間たちはその火をもらって、みんなでわけることにした。そしてそれを消さないように大切にしていたが、あるとき大雨が降りつついて、国中の火をすっかり消してしまった。人間たちは非常に嘆き悲しんだ。と、トヒル神がそれを見て、

「よし、わしがも一度火をこしらえてやろう」

といって、自分の脚と脚とをすり合わせると、たちまち火が燃え出した。

こうして人間たちは、火を失くするたびに、トヒル神のおかげでそれを手に入れることが出来るのであった。<sup>(1)</sup>

## 太陽の出現

神から造られた四人の男と四人の女とは、闇の世界に住んでいなくてはならなかった。その頃はまだ太陽がなかったのであった。で、八人の男女は天を仰いで神々に、

「どうかわたくしたちに光明<sup>ひかり</sup>を与えて下さい。安らかな生活を恵んで下さい」

と祈ったが、いつまでたっても太陽は現われなかった。彼らは悲しみ悩んで、トゥラ・スィバ（「七つの洞窟」のこと）という地に移って行った。しかしそこでも太陽を見ることが出来なかった。

そうしているうちに、どうしたのか、言葉の混乱が起こって、八人の男女は、お互いにお互いのいうことが解らぬようになった。彼らはもうすっかり困ってしまって、トヒル神に、

「どうかわたくしたちを率いて、どこかもっと幸福な土地に移して下さい」と祈った。

とうとう彼らは、トヒル神の教えによって、長い旅路についた。高い山を幾つとなく越えて行くうちに、大きな海に出た。船を持たぬ彼らは、どうして満々たる海原を渡ろうかと思わずらっていると、不思議にも水がさっと二つにわかれて、一筋の路が出来た。彼らはその路をたどって、ハカビツという山の麓に来た。

「わしたちは、ここに留らなくてはならぬ。トヒルさまのお告げによると、わしたちはここで太陽を見ることが出来るのだから」

と、四人の男がいった。

「ええそうしましょう。日の光を見ることが出来たらどんなにうれしいでしょうね」と、四人の女がいった。

こうして彼らがひたすら日の光を待ちこがれていると、やがて太陽があかあかと東の空から現われて、明るく温かな日の光が野山に充ち満ちた。もっとも初めのうちは日の光がさほど強くなかった。あとでは祭壇の上の犠牲の血をすぐに吸いとってもさうほど烈しい熱を発するようになった太陽も、初めて八人の男女の目にうつった時には、鏡の中の影のように見えたのであった。それでも生まれてはじめて太陽を見たの



チャク（雨の神）

で、男も女もけだものも、うれしさの余り、ほとんど踊り狂わんばかりであった。彼らは声をそろえてカムクという歌をうたい出した。カムクとは「我らは見つ」という意味で、つまり初めて太陽を見た時の胸の中の歓喜が、おのずからほとばしり出たものであった。

こうして八人の男女は、ハカビツ山の麓にキチエ族の最初の町をこしらえて、そこに永く住むことになった。

時がたつにつれて、人間の数がだんだんとふえてきた。そしてその祖である八人の男女もだんだんと年寄りになった。と、ある日、神々が幻のように八人の男女たちの目の前に現われて、

「お前たちの子孫が、末永く栄えることを願うなら、わしたちに人間の犠牲をささげなくてはならぬ」

といった。八人の男女は、神々の教えに従うために、近くの土地に住んでいる他の部落を襲った。他の部落のものたちは、八人の男女に率いられたキチエ族に対して烈しく争った。血なまぐさい戦いが永くつづいて、どちらが勝つとも見えなかった。と、どこからとなく地蜂や熊蜂の群が現われて来て、キチエ族を助けて、敵の兵たちの顔に飛びついては、烈しくその眼をさした。敵の兵は目がつぶれて、武器をふりまわす



ことが出来なくなつて、ことごとく降参をしてしまった。八人の男女は、敵勢のうちから幾人かを選び出して、犠牲として神々にささげた。

こうしてキチエ族は、次第に近くの部落を切り従えて行つたが、そのうちに彼らの祖である四人の男はいよいよ年がいった。彼らは、臨終が近づいたということを知つて、別れの言葉をいって聞かすために、子や孫や親類たちを、自分たちのまわりに呼び集めた。

別れの言葉がすむと、四人の男の姿がたちまち見えなくなった。そしてそのあとに大きな巻束が現われた。キチエ族はその巻束を「包まれたる<sup>(2)</sup>巖の宝」と名づけて、決してこれを開かなかつた。

### 冥府からの挑戦

天地に存するすべてのものを造つたシュピヤコシュ神とシュムカネ神との間に、二人の男の子があつた。一人はフンフン・アップと呼ばれ、一人はブクブ・フナプと呼ば

れた。そしてフンフン・アップ神は、シュバキヤロという女神をめとって、二人の男の子を生んだ。一人はフンバツと呼ばれ、一人はフンチョウエンと呼ばれた。

これらの神々は、トラチトリという球遊びが大好きであった。大勢のものが、丸い石にあいている小さな穴に球を通そうと争って、それに成功したものが、賭物になっている着物や宝石を勝ち得るといのが、この遊びの趣向であった。

ある日、フンフン・アップ神とブクブ・フナプ神とが、トラチトリの球遊びを催した。お互いに勝負に夢中になって、どこまでもどこまでも飛び回っているうちに、いつの間にか死の世界シュンバルバの近くまで来てしまった。

冥府の支配者であるフン・カメとブクブ・カメとは、二人の神の姿を見つけると、「しめた、日頃憎いと思っている上界の神々がやって来た。いい機会だ、勝負にことよせて、きやつらを生捕りにしてやろう」

と考えた。そこで四人の手下を四羽の梟の姿にして、フンフン・アップとブクブ・フナプのところにやって、

「球遊びの賭をやろうではないか」

といわせた。きかぬ気のフンフン・アップとブクブ・フナプは、すぐに冥府の支配者たちの挑戦に応じた。

「よろしい。やることにしよう。早く冥府に案内してもらおう」

二人はこういって、梟たちのあとについて、下界へ通じている長い坂路を降って行った。彼らは血の河を渡って、死人の世界に入り込んだ。梟たちは、二人の神を案内して冥府の首領たちの館につれて行った。館の前には、いかめしい顔をした二人の男が腰をかけていた。フンフン・アップとブクブ・フナプは、

「ははあ、冥府の首領のフン・カメとブクブ・カメが出迎えをしているな」

と思つて、頭をさげて挨拶をした。しかし相手がすまし返っているので、変だなと思つて、よく見ると、それは木を刻んでこしらえた人形に過ぎなかった。冥府のものどもは、フンフン・アップとブクブ・フナプの顔を眺めて、

「頓間な奴だな。人形にお辞儀をしたり話しかけたりしている」

といわんばかりに、大口開いて嘲り笑った。二人の神はひどく腹を立てたが、

「今に見ろ、勝負でひどい目にあわせてやるから」

と考へて、やつと我慢をしていた。冥府のものどもは、二人を館の中に導いて、上座を指しながら、

「どうかあれにおかけ下さい」

といった。二人の神はなにげなくそれに腰を下した。と、それは真赤に焼き立てた石

であつたので、二人はあっと叫んで飛び立った。それを見ると、冥府のものどもは、いっせいに手をたたいて嘲り笑った。二人の神はもうたまりかねて、

「重ね重ね無礼なことをする奴じゃ。片端から叩き倒してくれろぞ」

と、猛然躍り立った瞬間、冥府のものどもがどやどやと駆けよって、手とり足とり二人を捕えて、「暗の家」にとじこめた。そして二人を殺して土の中に埋めてしまった。冥府の支配者たちは、手下のものにいつけて、フンフン・アップの頭を切りとって、たくさんのひょうたんのなっている一本の樹に吊させた。そしてみんなにむかって、「冥府に住んでいるものは、今後決してあの樹の実を食ってはならぬ」といつけた。

死の世界の貴人の一人クチュマキクの娘にシュキクという乙女があつた。ある日ひょうたんの樹のそばを通りかかって、

「まあ大きな果実だこと、一つ摘って見よう」

と、片手をのばして一つのひょうたんをちぎろうとすると、フンフン・アップの頭が、だしぬけにシュキクの手には唾を吐きかけて、

「そなたは今に母親になるよ」

といった。シュキクは驚き悲しんで、

「夫がなくて子を産んだら、わたしは殺されなくてはなりませんわ」

といった。しかしフン・フン・アップの頭は彼女を慰めて、

「決してそんなことにはならないよ。心配しなくてもいい」

といった。

それから二、三ヵ月たつと、クチュマキクが、娘の体のただならぬのに気がついた。彼は梟たちを呼びよせて、

「娘をつれ出して、殺してもらいたい。殺したら、その証拠に心臓を壺に入れて持つて帰るのじゃ」

といいつけた。梟たちはシュキクをだまして外につれ出した。少し歩いているうちに、シュキクは早くも梟たちのもくろみを悟って、

「お前たちは、わたしを殺すつもりだね。どうかそんなことをしないでおくれ。お礼には何でも上げるから」

と頼んだ。梟たちはかわいそうだと思って、シュキクの命をとらないことにした。そしてその代りに羊蹄草の真赤な液汁の凝り固まったのを壺に入れて持って帰った。

危い命を助かったシュキクは、冥府を逃げ出して、フン・フン・アップの母シュムカネの許を訪ねて行った。そして今までの出来事をくわしく話したが、シュムカネはあま



り思いがけないことなので、どうしても彼女のいうことを信じなかった。

彼女はたまりかねて、

「では、わたしの申すことが本当であるという証拠を立てましょう。何でもお望み下さい」

といった。

「ではとうもろこしの生えていないところに行つて、籠いっぱいのとうもろこしを集めて来ておくれ」

と、シュムカネがいい出した。シュキクは、

「そんなことは何でもありません」

といって、空籠を手にして、まるでとうもろこしの生えていない野原に出かけて行つた。そして平手で大地を叩くと、たちまちたくさんのとうもろこしが生えて、たくさんの実がなった。彼女はその実を籠いっぱい摘みとって、シュムカネのところに持つて来た。それを見ると、シュムカネは、初めて彼女の言葉を信じて、

「わたしのそばにいるがいい。産まれる子は、フンフン・アップの子に違いないから」

と、優しくいつてくれた。しばらくすると、シュキクは、やすやすと男子の双生児を

産んだ。一人はフン・アップと呼ばれ、一人はシュバランケと呼ばれた。<sup>(3)</sup>

### 人猿の起源

双生児のフン・アップとシュバランケとは、大きくなるにつれて、ひどい悪戯者<sup>いたずら</sup>になった。二人は絶えず大きな声を立てて騒ぎ回ったり、さまざまの悪戯にふけったりして、祖母のシュムカネ女神を苦しめていた。

シュムカネ女神はとうとうたまりかねて、二人を家から追い出してしまった。が、二人はかえってそれをいいことにして、山や野にきままな生活をするようになった。彼らは、誰から教わるともなく吹筒を吹くことに妙を得て、鳥や小さな獣を見つけると、すぐに吹矢をとばして、それを射とめるのであった。

彼らの腹違いの兄弟であるフンバツとフンチヨウエンとはそれを見ると、彼らが巧みな狩人になったのをひどく妬<sup>ねたま</sup>しく思った。

「双生児の奴、いやに吹矢を飛ばすのがうまいじゃないか。わしたちがさっぱり獲物

のないときでも、あいつらはどっさり鳥や獣を手に入れるんだからね。ほんとに癪にさわるではないか」

フンバツとフンチョウエンとはこんなことを話し合って、いろんなことをしては、双生児の狩の邪魔をするのであった。フン・アップとシュバランケとはひどく腹を立てて、

「兄弟のくせに、どうも意地の悪いことをするな」

「ほんとにそうだ。ひどい目にあわせてやらなくちゃ、気がすまんよ」

といって、フンバツとフンチョウエンとを醜い猿の姿に変えてしまった。シュムカネ女神は、二人の孫が醜い猿に変わったのを見ると、非常に嘆き悲しんで、彼女は、双生児を自分のそばに呼んで、

「そなたたちも知っているように、フンバツとフンチョウエンは、これまで歌をうたったり、笛を吹き鳴らしたりして、みんなの生活を明るく楽しくしてくれていたでしょう。だから猿なんどにしておかないで、早くもとの姿に還しておくれ。おばあさんからお願いするから」

と頼んだ。それを聞くと、双生児は、口をそろえて、

「そうですね、おばあさんのせっかくのお頼みだから、元の姿に還してやりましょ

う。でもそれには一つの条件があるんですよ」といった。

「どんな条件かね」

と、シュムカネ女神が尋ねた。

「何もむずかしいことではないですよ。猿がどんなおどけた振舞いをして、おばあさんが決して笑い出さないとしたら、二人を元の姿にしてやりますよ」と双生児が答えた。

「ええ、どんなことがあっても笑わないよ」

と、シュムカネ女神がいった。

双生児は、すぐに猿になっているフンバツとフンチヨウエンとを祖母の前に引っぱり来て、出来るだけおかしな身振りをさせた。シュムカネ女神は、始めのうちは一生懸命に笑いたいのを我慢していたが、二匹の猿があまりおどけた振舞いをするので、とうとうたまりかねてどっと吹き出してしまった。と、双生児は、

「おばあさん、笑いましたね。お約束だから、フンバツとフンチヨウエンはこのまま猿の姿にしておきますよ」

といった。

こうして世の中に人猿というものが出来たのであった。

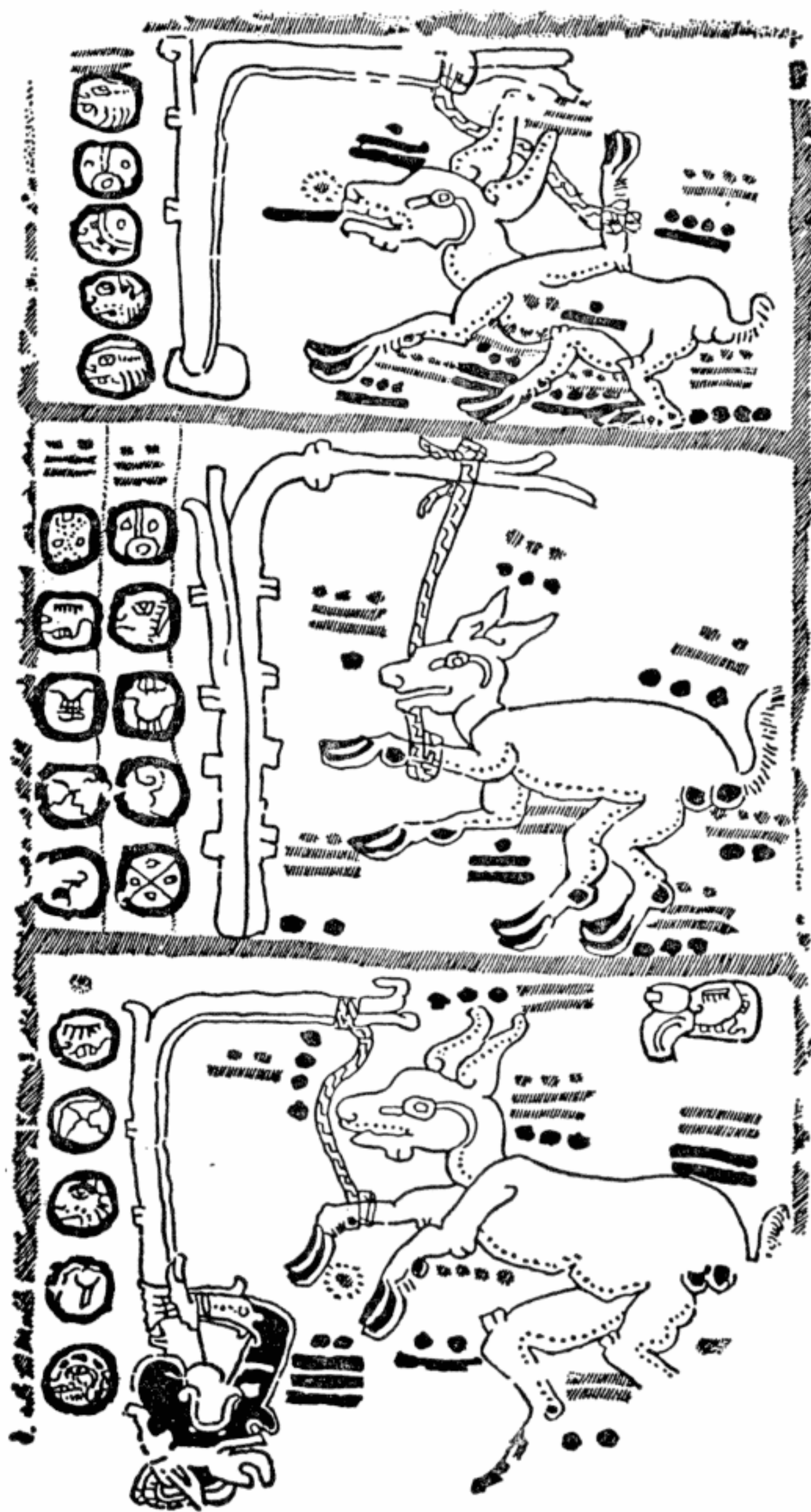
## 双生児の冥府攻め

双生児のフン・アップ神とシュバランケ神とは、魔法の道具を持っていた。その道具は、ひとりでにとろこしの畑を耕したり、種子を播いたり、収穫をしたりするのであった。だから双生児の神は、畑の仕事はこの道具にまかせきりにして、自分たちは安心して、山や野に、鳥獣を狩り立てることが出来るのであった。

シュムカネ女神は、双生児の神たちに畑の仕事に精を出すように日頃いつけて置いたのであったが、彼らは魔法の道具の助けで、畑仕事はそっちのけにして、吹筒を手にしては、絶えず山や野を駆けまわっていた。そして日暮になると、いつも手や顔に土をなすりつけて、終日畑に働いていたような風をして、シュムカネ女神の許に帰って来るのであった。

それを見た野獣どもは、申し合わせて、昼の間に魔法の道具がせっかく取りのけて





鹿を罾にかける図（絵文書より）

置いた木の根や石ころなどを、夜の間にすっかり畑の中に投げ込むことにした。双生児の神は、それを見ると、

「誰か、仕事の邪魔をしているな。よし、今にひっとらえてやるぞ」

といって、畑のそばに大きな罾をかけて置いた。夜になると、兎と鹿とが罾に尾をはさまれた。しかし彼らは一生懸命に身をもがいた末、尾を切って逃げ出した。だから今日でも兎と鹿とは、あんなに短い尻尾をしているのである。一番しまいに一匹の鼠が罾にかかった。鼠は力が弱いので、いくらもがいても罾から脱け出すことが出来なかった。そのうちに夜が明けて、鼠はとうとう双生児の神に捕まってしまった。

「仕事の邪魔をする憎い奴め、踏みつぶしてくれるぞ」

と、二人が足をあげると、鼠はあわててそれをおし止めて、

「どうか命だけはお助け下さい。そのお礼にあなた方に大切なことを話してあげますから」

と叫んだ。

「わしたちに大切なことって、何だね」

と、二人の神がいぶかしそうに尋ねた。そこで鼠は、二人の父のフン・フン・アップが、冥府の首領に欺かれて、あえない最期をとげたことを話すと、二人の神は悲しみかつ

怒って、

「卑怯な振舞いをする奴だ。わしたちはどうしても冥府の首領どもをやっつけなくてはならぬ」

と叫んだ。

耳ざとい冥府の首領フン・カメとブクブ・カメとは、早くもそれを聞きつけて、「いや、面白くなったぞ。今度も球遊びにかこつけて、双生児の奴を退治してやろう」

と考えた。で、シュムカネ女神の許に使いを立てて、

「お前さんの孫のフン・アップやシュバランケと球遊びの勝負をしてみたい。二人とも、戦いを挑まれてしりごみするような臆病者ではあるまいな」

といわせた。シュムカネは、二人の孫がその父のフンフン・アップや叔父のブクブ・フナプと同じような運命に陥るのを心配して、自分の側に居合わせた一匹の虱に、「一刻も早く冥府の首領からの申込みをフン・アップとシュバランケとに伝えておくれ」

といいつけた。しかし虱は思うように迅く歩けなかったので、

「これでは駄目だ」

と、がまにわけを話して、その腹の中にのみ込まれた。しかしがまも思うように迅く歩けなかったたので、

「これでは駄目だ」

と、蛇にわけを話して、その腹の中にのみ込まれた。しかし蛇も思うように迅く行けなかったたので、

「これでは駄目だ」

と、ボクという鳥にわけを話して、その腹の中にのみ込まれた。ボクは矢のように迅く双生児の神のところに飛んで行って、蛇を吐き出した。蛇ががまを吐き出すと、がまが虱を吐き出した。虱は双生児の神のそばに這いよって、冥府の首領からの申込みを伝えた。二人の神は父や叔父が冥府の首領に殺されたことを鼠から聞き込んでいたので、

「うまい、仇を討つ時が来た」

と喜び勇んで、祖母のシムカネにいとま乞いをして、その家の真中におのおの一本のとうもろこしをつき立てて、

「わたしたちの身にもしものことがあれば、このとうもろこしが枯れしぼみますから、よく気をつけていて下さい」

といって、冥府への路をたどり始めた。

二人の神は、自分たちの父や叔父が通った同じ路を歩いて行った。そして同じく血の河を渡って、いよいよ死人の世界に乗り込んだが、二人は父や叔父の失敗をくりかえさぬように、シャンという動物を見張りとして、自分たちの先に歩かせることにした。シャンは、フン・アプ神の脛から抜き取った一本の毛で、冥府に住んでいるあらゆるものの体をちくりちくりと刺しながら進んで行った。だから冥府の首領に似せて刻んである人形がすぐに見つかった。

双生児の神は、こうして人形にお辞儀をするという失策から免れたばかりでなく、真赤に焼き立てた石に腰をかけることや、「暗の家」にほうり込まれることも、うまく避けてしまった。そして冥府の首領たちと球遊びをして、手ひどく負かしたので、首領たちは烈火のように怒り出して、二人の神に、

「わしたちの花園から四つの花束を採って来てもらいたい」

といった。そして同時にそっと花園の番人を呼び出して、

「懸命に気をつけて、一本の花でも盗まれぬようにしろ」

と厳しくいつけた。しかし二人の神は、自分では出かけないで、たくさん蟻に花盗みの役を頼んだので、番人たちが目を皿のようにしてあたりを見張っていたにも拘



らず、四つの花束をこしらえるだけの花が、いつの間にか盗みとられてしまった。

冥府の首領はいよいよ腹を立てて、二人の神を「槍の家」に投げ込んだ。「槍の家」には、たくさんの悪魔が、手に手に鋭い槍を閃めかして、入って来るものに烈しく突きかけるのであった。が、双生児の神は、悪魔たちの姿を見ると、言葉巧みに彼らを説きつけて、槍の穂先からのがれてしまった。

それから二人は「寒気の家」に投げ込まれ、つづいて「虎の家」や「火の家」にしこめられたが、二人はそのたびに知恵をめぐらして、うまく危いところを免れた。しかしそのつぎにほり込まれた「蝙蝠の家」では、とうとう酷い目にあわされた。

二人が薄暗いこの家の中を手さぐりで歩き回っていると、蝙蝠の首領のカマソツが、大きな翼を怪しく唸らせながら、二人の頭の上に舞い降りて来た。そして剣のように鋭い爪をふり立てたと思うと、やにわにフン・アップの頭を切り落としてしまった。が、幸せなことに、そこを通りかかった一匹の亀が、床の上に横たわっているフン・アップの体に触ると、たちまち頭に変じて、フン・アップの頸に癒えついてしまった。フン・アップは、いやな夢から覚めたように、ぶるっと身ぶるいして、すつくと起ち上がった。冥府の首領たちは、どんなことをしても、二人の神が命を落とさぬので、もう手をつかねて、あきれ返っている外はなかった。二人は、いよいよ首領たちを退治して、

父と叔父との敵をうつ時が来たと思った。

双生児の神は、二人の魔術師を呼んで、火葬の薪をうずたかく積み上げさせた。そしてその上に横たわって火をつけさせた。炎々たる焰につつまれて、双生児の神は間もなく骨ばかりになった。魔術師はその骨をこなごなにつき砕いて、河の中に投げ込んだ。それから五日たつと、骨の粉が魚になった。六日たつとまた神の姿となって生き返った。

フン・アプとシュバランケは、冥府のものどもにむかって、

「どうだね、わしたちにはこんな不思議な力がそなわっているよ。望みとあれば、何でも生き返らせてみせる」

といった。冥府のものどもはすっかり感心してしまつて、めいめいいろんなことを申し出た。二人の神はその申し出のままに、冥府の宮殿を焼いてしまつて、真新しい宮殿を出現させたり、冥府の犬を殺して生き返らせたり、人間を片々に切りくだいて、元の体にしたりして見せた。

冥府の首領のフン・カメとブクブ・カメとは、そうした不思議な離れ業を見ているうちに、

「いったい死んでからの感じはどんなものだろう。一度その味をなめて見たいもの

だ」という気を起こした。で、二人の神にむかって、

「どうかわたしたちを殺しておくれ。だが殺しっぱなしでは困る。きつと生き返らせてくれなくては」

と頼んだ。双生児の神は承知して、すぐに冥府の首領たちを殺したが、殺しっぱなしで、生き返らせてはやらなかった。

冥府のものどもは、二人ながら首領を失ってしまったので、顔色を変えて驚き騒いだ。フン・アップとシュバランケとは、彼らを呼び集めて、厳かな口調で、

「お前たちの首領のフン・カメとブクブ・カメは、わたたちの父と叔父とを欺し討ちにした卑怯者だ。わたたちの手にかかって命をなくしたのは、自業自得だ。お前たちも首領に加担して、悪いことをしたのだから、その罰を受けなくてはならぬ。球遊びは身分のいいもののする遊戯だ。以後お前たちは決して球遊びをしてはならぬ。死んだ人間を支配することも、以後は禁物じゃ。森の中の獣類を支配するだけでたくさんだ」

といいつけた。

フン・アップとシュバランケとは、こうして思いのままにしかえしをすますと、冥府の首領たちに殺されたフン・アップとブクブ・フナプとの体を暗い死の世界から運



ククルカン（風の神）

び出して、天界に持って行って、太陽と月とにした。<sup>(4)</sup>

### 巨魔と賈医者

昔、大洪水がまだすっかり大地から退いてしまわぬ頃に、ブクブ・カキシユという怪物が住んでいた。体中が黄金と白銀とに輝いているし、齒という齒はことごとくエメルドから出来ていた。

ブクブ・カキシユは、非常に傲慢な男で、いつも神々のことを嘲り罵って、

「今に見ろ、神々なんど厄介なやつらは、片端から叩きつぶしてやる」

といていた。ブクブ・カキシユには、二人の男の子があった。一人はシパクナと呼ばれ、一人はカブラカンと呼ばれた。二人とも親に劣らぬほど傲慢で気位が高く、口癖のように、

「おれたちも、お父さんの加勢をして、神々の息の根をとめてやるぞ」と威張りちらしていた。



神々はそれを聞くと、非常に腹を立てて、フン・アップにシュバランケという双生児を呼んで、

「お前たち、これからすぐに大地に降って行って、わしたちのことを嘲り罵っているブクブ・カキシュ親子を退治してもらいたい」

といいつけた。二人はすぐに天界から大地へ降りて行った。

ブクブ・カキシュは、一本の不思議な樹を持っていた。その樹には、香りの高い黄色の実がいつもたくさんなっていた。ブクブ・カキシュは毎朝その実をちぎって朝食にしていたのであった。

ある朝、ブクブ・カキシュがいつものように不思議な樹の頂に登って、一番うまそうな実を探そうとあたりを見まわすと、二人の見知らぬ男が、自分よりも先に樹の枝に腰をおろして、枝という枝が、ほとんど裸になってしまったほど樹の実をちぎっていたのに気がついた。ブクブ・カキシュは、口がきけないほど驚きかつ怒った。彼はぎらぎらと光る目で二人の男を睨みつけながら、

「太い奴だ。わしに断りもしないで、なんで大事な果実をちぎった」  
となじった。

樹の上の見知らぬ男というのは、フン・アップとシュバランケとであった。フン・ア

プは、ブクブ・カキシュに怒鳴られると、手に持っていた吹筒を口にあてて、怪物を目がけて、ぷっと吹矢を飛ばした。吹矢は怪物の口にぐさと突きささった。ブクブ・カキシュはあっと叫んで、樹の頂から地面にころげ落ちた。フン・アップはすかさず大地に飛び降りて、怪物に組みついていった。火のように怒り出した怪物は、やにわにフン・アップの腕を掴んで、体からもぎ取ってしまった。そして口の傷の痛さに呻きながら家に帰って来ると、妻のチマルマトが驚き怪しんで、

「お前さん、どうしたんだね。まるで赤ん坊みたいに泣き声を出して……」

と尋ねた。ブクブ・カキシュは、膨れ上がった口の端を指しながら、

「これを見ろ、これを見ろ。泣き声だって出したくなるじゃないか」

といった。チマルマトは、夫の口が一面に腫れ上がっているのに気がつく、びっくりして、

「まあ、お前さん、どうしたの」

と騒ぎ出した。ブクブ・カキシュは顔をしかめながら、

「今朝、いつものように例の樹に登って行くと、わしより先に見知らぬ男が二人梢に腰をおろしているじゃないか。かっとなつて怒鳴りつけてやると、一人の男がいきなり吹矢を飛ばしたんだよ。それが口のはたに突っ立ったんだが、毒矢であつたと見え

て、まるで体中に火がついたように痛むんだよ」

といった。そしてそのまま床の上に倒れて、うんうん唸っていたが、やがて懷からフン・アプの片腕をほうり出して、

「敵の腕だ。仕返しに燃えさかる火の上に吊して置いてくれ」

といった。妻のチマルマトは、すぐにフン・アプの腕を燃えさかる火の上に吊した。フン・アプは腕をもぎ取られたあとが痛んで痛んで仕方がなかった。彼は苦しい息をつきながら、仲間のシュバランケにむかって、

「どうも傷が痛んでしようがない。どうにかしてこれを治さなくては、怪物退治も駄目だよ」

といった。

「まったくそうだ。何とかして早く治す工夫はないだろうか」

と、シュバランケも首を傾けた。二人はいろいろと相談した末に、魔術師に治療を頼むことにした。二人はいっしょになって、シュピヤコシュにシュムカネという二人の魔術師の家に訪ねて行った。そしてわけを話して傷の治療を頼むと、魔術師たちは声をそろえて、

「何しろ、もぎとられた腕を取り返さなくては、手のつけようがありませんね」

といった。フン・アップは悲しそうな顔をして、

「でも、ブクブ・カキシユの奴は、恐ろしい巨魔だよ。うっかりするとまた腕をひっこぬかれるだろう」

と答えた。魔術師たちはフン・アップに同情して、

「ではあいつをうまく欺して、腕をとり返すんですね」

といって、二人ながら医者に変えた。そしてフン・アップとシュバランケとを自分たちの息子に仕立てて、ブクブ・カキシユの家に出かけた。

ブクブ・カキシユの家に近くなると、恐ろしい唸り声が聞こえて来た。魔術師たちはフン・アップをふり返って、

「吹矢の毒がまわって、巨魔の奴が苦しんでいるらしいですね。よし、それを種にきやつをやっつけてやりましょう」

といった。やがて四人は怪物の家に着いた。医者の姿に化け込んだ魔術師たちは、ブクブ・カキシユに声をかけて、

「わたしたちは名高い医師です。この家に恐ろしい唸り声がするので、お訪ねした次第です。病人を治さないでほって置くのは、医師の務めに背きますからね」

といった。それを聞くと、ブクブ・カキシユは非常にうれしかったが、連れの二人の

若者がうさんくさいと思ったのか、

「お前さんたちのうしろに立っている若者は何かね」と尋ねた。

「わたしどもの息子ですよ」

と、魔術師たちが答えた。

「よろしい、そこでお前さんたちは、わしの傷が治せると思うかね」と、巨魔が尋ねた。

「わたしたちに治せぬような傷なんて、まあありませんね」

と、魔術師の一人のシュピヤコシュが答えた。

「だが、どうしてそんな口の端なんかに怪我をしたのです」

「悪魔の奴が吹矢を飛ばしたんだよ。うまく傷を治してくれたら、莫大な褒美をやるよ」

と、ブクブ・カキシユがいった。シュピヤコシュは、怪物の側に坐りこんで、もったいぶった様子しながら、しさいに傷をあらためていたが、やがて、驚いたような顔をして、

「これはいけない。すっかり吹矢の毒が回っていますよ。歯も目玉も抜きとらなくて



は駄目ですね」

といった。巨魔は飛び上がるほどびっくりして、

「なに、歯や目玉を抜きとるといふのかね。駄目だ、駄目だ。そんなことをしたら、まるで不具になってしまふじゃないか」

と叫んだ。シュピヤコシュはそれをなだめて、

「不具にしてしまふようでは、名高い医者とはいわれませんよ。立派に代りの歯や目玉を入れてあげます。安心してわたしたちに任せて下さい」といった。

ブクブ・カキシュは欺されるとは知らないで、とうとう贋医者の治療を受けることになった。

シュピヤコシュは、仲間のシュムカネの助けを借りて、手早く巨魔の口からエメラルドの歯をすっかり抜きとった。それからつづいて二つの目玉をくり抜いて、その代りにとうもろこしの粒をつめ込むと、さすがの巨魔も一声高く叫んで、息が絶えてしまった。

一方フン・アップは、巨魔の妻をおしのけて、火の上に吊してあった自分の腕を取りおろした。二人の魔術師は、魔法の力でそれを傷口に見事にくっつけてくれた。

## シパクナ退治

フン・アプとシュバランケとの働きで、巨魔のブクブ・カキシユは退治されたが、まだ二人の子シパクナとカブラカンとが残っている。シパクナは毎日山の上に山をつみ重ねているし、カブラカンは地震を起こしては、それを揺り動かしていた。双生児のフン・アプとシュバランケとは、お互いに申し合わせて、四百人の若者をそそのかして、まずシパクナをやっつけることにした。

四百人の若者は、一軒の家を建てるような風をした。そしてシパクナがいつも通る森の中に入って、大きな樹を伐り倒した。しばらくすると巨人のシパクナが、大きな足音を立てて、そこを通りかかった。彼は、四百人の若者が一本の樹を持てあましているのを見ると、からからと笑い出して、

「おい、ちび助ども、何をしてる？」  
と尋ねた。

「家の屋根にしようと思って、大きな樹を伐り倒したところです」と、若者たちが答えた。

「お前たちにそれが運べるかね」

と、巨人が尋ねた。

「いや、運べないで弱っているところです。みんなで力を合わせても、持ち上げることもすら出来ないんですからね」

と、若者たちが答えた。と、シパクナはまたからからと笑って、

「どけ、どけ。おれが運んでやろう」

といいながら、体がかがめて、大きな樹を肩にかつぎ上げた。

「素晴らしい力だな。では、こちらに持って来て下さい」

若者たちはこういって、先に立って歩き出した。シパクナは力足を踏みしめ踏みしめ、若者のあとについて行った。若者たちはあらかじめ掘って置いた大きな穴のところに巨人をつれて行って、

「この穴が、家の土台となるんです。ごめんどうでしょうが、穴の中に材木を運び込んで下さい」

といった。計られるとは夢にも知らぬ巨人は、大きな樹をかついだまま、深い穴の中

に入って行った。と見ると、若者たちは、巨人目がけて、大きな石を雨のように投げおろし始めた。巨人は驚いて、素早く穴の片隅にあった凹みに逃げ込んだ。若者たちは、首尾よく巨魔を叩きつぶすことが出来たと思い込んで、うれしさのあまり、歌うやら踊るやら大騒ぎをし始めた。穴の隅に隠れているシパクナは、腹が立つやらおかしいやら、

「馬鹿なやつらだ。おれを殺してしまったと思ひこんで、いい気になって騒ぎ回っている。よし、それならこちらにもその気で、あいつらを欺<sup>だま</sup>してやろう」

と、穴の中を這い回っている蟻たちにむかって、

「おい、蟻公。御苦労だがこれを持って若者どものところに行っておくれ」

といいながら、自分の毛を渡した。蟻たちが毛をひっぱって、若者たちのところに這って行くと、若者たちはすぐにそれを見つけて、

「やあ、蟻が毛を運んで来た。これであの巨人が死んでしまったことは確かだ」

といって、巨人の死体の上につみ重なっていると思ひ込んだ石を土台にして、家を建てた。そして酒を酌みかわして喜び楽しんでいると、穴の隅にうずくまって、じっと様子をうかがっていたシパクナが、時分はよしと、満身に力をこめて、だしぬけに立ち上がった。家も土台石も空高くはねあげられた。家の中に坐り込んでいた若者たち

は、すさまじい勢いで天界まで飛んで行って、星になってしまった。わたしたちが七曜星と呼んでいる星の群も、はねとばされた若者たちのうちで、彼らは天空に坐り込んで、いつまでも大地に帰れる時の来るのを待っているのである。

双生児のフン・アップとシュバランケとは、自分たちのために、多くの若者がこの世からはねとばされたのをひどく気の毒に思っ

「どうしてもシパクナを滅ぼさなくてはならぬ。巨人退治をいつかつた神々に対しても、天界にはね上げられた若者に対しても」

と話し合って、注意深く巨人の様子をうかがっていた。

巨人のシパクナは、今までのように昼間は山の上に山を積み重ねる仕事をつづけるし、夜になると、川辺をぶらついて、魚や蟹などを見つけては、それを捕えて食物にしていた。それを見ると、双生児は、大きな蟹を一匹こしらえて、谷底の洞穴の中に置いて、それからひそかに大きな山の下を掘りぬいて、じっと様子を見ていた。

間もなく巨人が川の端に現われた。二人はシパクナにむかって、

「どこへ行ってるのかね」  
と尋ねた。

「なに、今日の食物を探しているだけだよ」



と、巨人が答えた。

「お前さんの食物って、どんなものかね」

と、二人が尋ねた。

「魚に蟹さ」

と、巨人が答えた。すると二人は谷底の方を指して、

「わしたちがここに来る途中、あの谷底で大きな蟹を見つけたよ。あれを生捕ることが出来たら、すばらしい御馳走になるね」

といった。それを聞くと、シパクナは眼を輝かせて、

「しめた、わしはすぐにそいつを手に入れなくちゃならぬ」

と叫ぶなり、たった一飛びで谷底に飛び降りた。双生児は、シパクナが洞穴の中の蟹を目がけて、静かに歩みよっているのを見届けると、下の方をくり抜いて置いた大きな山を谷の方におしころがした。谷底を歩いていたシパクナは、ころがり落ちた山下に埋まってしまったが、懸命に身をもがいて、そこから這い出して来た。それを見ると、双生児は、

「今度あいつに荒れ出されては大変だ」

といって、シパクナを大きな石に変えてしまった。こうしてベラ・パスに近いメアワ

ン山の麓で、巨人のシパクナはとうとう滅びてしまった。

### カブラカン退治

巨魔ブクブ・カキシユとその子のシパクナを退治したフン・アップとシュバランケは、

「わたたちの仕事も大分片付いたぞ。さあ、今度は残りのカブラカンを退治しなくてはならぬ。あいつを退治すれば、神々をないがしろにする巨魔の種がつきるのだ」といって、カブラカンのいるところに訪ねて行った。折からカブラカンは、大きな山を根こぎにしては、まるでお手玉をとるように、大空に投げ上げていた。二人は巨人の側に歩みよって、

「こんにちは、カブラカン、お前はいったい何をしているのかね」といった。

「何をしているかって、おれがこうして山々を投げ上げているのが目につかないのか

ね。いったいそんな馬鹿なことを尋ねるお前たちは、何という名前かね」

と、巨人が尋ねかえした。

「わしたちには名前なんかないよ。ただの狩人さ」

と、二人が答えた。

「ははあ狩人か。そして何しにここにやって来た」

と、巨人が尋ねた。

「吹矢で鳥を射落とそうと思って来たんだよ」

と、二人が答えた。巨人はさも軽蔑したような目付きで二人を眺めて、そのまま立ち去ろうとした。二人はそれを呼びとめて、

「どうか山投げの芸当をもう少し見物させておくれ。そんな離れ業の出来るのは、世界中でお前さんの外にないんだからな」

といった。それを聞くと、カブラカン是非常に得意になって、

「よし、見たいというなら見せてやろう。どんな大きな山だって平気だぞ。お前たちの方で、どの山と名ざしてくれ。またたく間にそれを投げつぶして見せるから」

といった。フン・アップはあたりを見回した。そしてあたりにそびえていた高い山を指して、

「あの山がほうり出せるかね」

といった。カブラカンはこちらからと笑い出して、

「あんなちっぽけな山なんぞ、造作もなくほうり出せるさ。さあ、あの山の方に行つて見よう」

といった。

「ちょっと待っておくれ。お前さんは朝からまだ何も食べてないだろう。腹がへっていては、離れ業は出来ないよ。さあいっしょにご飯を食べることにしよう」

と、二人がいった。それを聞くと、カブラカンは咽喉を鳴らして、

「よからう。だが何か食物があるのかね」

と尋ねた。

「いや何もないよ」

「何だ、お前たちは馬鹿だな。自分からご飯を食べようといい出して、何も食物がないと答えるなんて」

巨人は怒って、手近にあった小さい山を掴み上げるなり、海の中に投げ込んだ。海は驚いて、大空に波をあげた。フン・アップはそれをなだめて、

「まあ、そう怒らないでおくれ。わしたちは吹矢を持っているんだから、すぐに鳥を

射落としてやるよ」

といった。巨人は少し機嫌を直して、

「それならそれと始めからいいばいいじゃないか。神妙にしている。おれは腹がへっているからな」

といった。ちょうどそのとき一羽の大きな鳥が、彼らの頭の上に飛んで来た。フン・アップとシュバランケとは、すかさず吹筒を口にあてて、プッと矢を吹き出した。矢は見事に鳥の体を貫いて、巨人の足もとにそれを射落とした。

「うまい、うまい。お前たちはなかなか利口な奴だ」

巨人はこう叫びながら、大きな鳥を拾い上げて、生のまま食べようとした。フン・アップはそれをおし止めて、

「ちょっと待っておくれ。火にあぶると、いっそういい味になるんだから」

といった。そして二本の棒を摩り合わせて、そこからほとばしり出た火を枯草にうつして、その上に鳥を吊した。しばらくすると、うまそうな匂いが、巨人の鼻をくすぐって来た。巨人は、よだれをたらしながら、じっと眺めていた。フン・アップは鳥の毛をむしり取って、また火にあぶって、

「さあ、これを食べてみておくれ」



といった。巨人は鳥を受取るなり、たちまちむしゃむしゃと食べてしまった。それを見ると、フン・アップはにやりと笑って、

「さあ、大きな山のところに行つて、お前さんが自慢した通りそれを持ち上げて見せておくれ」

といった。しかしこの時にはもうカブラカンは、おのが胸に怪しい痛みを感じ始めていた。彼は片手で目をこすりながら、

「こりゃどうしたんだろう。おれはお前のいつてる山が見えなくなつたよ」といった。

「馬鹿なことをいってもらうまいよ。それ向うにちゃんと突立っているではないかと、フン・アップがいった。

「いや見えないよ。今朝はおれの目がかすんでいるらしい」

と、巨人が力なさそうにつぶやいた。フン・アップはそろそろ毒が回り出したなと考えるながら、

「そうじゃないだろう。あの山を持ち上げることが出来ると大きな口をきいておいで、今になって恐がっているんだろう」

とからかった。巨人はやっきとなつて、

「いやまったく本当だよ。目がかすんでいるよ。山のところにおれを連れて行ってくれさえすれば、間違いなく持ち上げて見せるよ」

といった。

「よし、連れて行ってやろう」

フン・アップはこういって、巨人の手をとって、山のそばに連れて行った。

「さあ、これならよく見えるだろう」

巨人は一生懸命になって目を見はった。しかしこの時にはもう烈しい毒がすっかり体中にまわっていたので、膝と膝とがぶるぶるとかち合って、まるで戦の太鼓を叩くような大きな音を立てた。そして額からこぼれ落ちる汗が、山の腹を小川となって流れ下るのであった。それを見ると、フン・アップが、

「さあ、山を持ち上げて見せておくれ」

と促した。

「なに、持ち上げることが出来ないんだよ。わしにはそれがちゃんとわかっている」とシュバランケが嘲った。それを聞くと、カブラカンは、齒をくいしばって、体中の精気を絞り出そうと努めたが、駄目であった。彼は大きな呻り声を立てるなり、天地も揺ぐような音とともに、大地の上に倒れて息が絶えてしまった。

こうして親子三人の巨魔は、双生児のフン・アップとシュバランケとに退治されてしまった。<sup>(5)</sup>

### 卵から生まれた小人

あるところに一人の年とった女がいた。誰も親戚のものがなくて、唯一人小屋の中に住んでいた。そして朝から晩まで炉のそばにうずくまって、小屋から出るということとはめったになかった。

年とった女は、子供が一人もないということをひどく苦にしていた。で、ある日卵を一つ取り出して、木綿の布で丁寧に包んで、小屋の隅に安置して、

「こうして置いたら、卵の中から子供が生まれるかもしれぬ」と独言をいった。

年とった女は、毎日じっと卵を見つめていた。しかしいつまでたっても卵には何の変わったこともなかった。彼女はがっかりしたように深い溜息をつくようになった。

が、ある朝目を覚まして見ると、いつの間にか卵の殻が割れて、可愛らしい小さい子供が、二つの腕を割目からさし出していた。年とった女は夢中になって喜んだ。そして出来るかぎり気をつけて大事に大事に育てていたので、一年の終りには、大人と同じように歩き回ったり話したりするようになった。

しかしその子はいつまでたっても背丈が伸びなかった。たしかにそれは小人であった。が、年とった女はちっともそれを苦にしなかったばかりでなく、大変な自慢で、

「この子は今に偉い酋長になるに違いない」といいいいしていた。

ある日彼女は小人にむかって、

「お前は、王さまの宮殿に訪ねて行って、力比ベをするんだよ」

といって聞かせた。と、小人は強く首をふって、

「いやだよ、いやだよ。わたしにはそんなことをさせないでくれ」

といった。しかし年とった女は、どこまでも、

「そんなことをいうのではないよ。早く王さまの宮殿に出かけておいで」

といい張るので、小人もとうとうその言葉に従って、しぶしぶ小屋を出た。王さまの宮殿に着くと、門番が、

「何しに來た。お前のようなものには御用はないよ。早く歸るがいい」といった。小人はおそるおそる、

「わたしは、王さまと力比べに來たんです。どうか王さまにそう申し上げて下さい」と答えた。これを聞くと、門番はプツと吹き出して、

「冗談をいうもんじゃないよ。お前のような一寸法師が、王さまと力比べをするなんて……」

と嘲った。しかし小人がしきりに頼むので、王さまにそのことを申し上げると、王さまは面白がって、

「とにかくわしの前にひっぱって來い」といった。

小人が王さまの前に現われると、王さまは、庭先にあった大きな石を指して、

「わしと力比べがしたいなら、まずあの石を持ち上げて見るがいい」

といった。小人はその石を見ると、とても自分には持ち上げられそうになかったので、すごすごと宮殿から引き退いた。そしておいおい泣きながら自分の家に歸つて來ると、年とった女が、

「どうしてそんなに泣くのかい」



と尋ねた。

「だって王さまがまるで山のような石を持ち上げてみろといったんだもの」

と、小人がしゃくり上げた。年とった女は小人を励まして、

「なぜその石を持ち上げてみなかったのかい。王さまに出来ることなら、どんなことだってお前にも出来るんだよ。さあ、も一度行っておいで」

といった。

小人は再び宮殿をおとずれた。そして王さまにいつかった石に両手をかけたかと思うと、かるがると持ち上げた。体に似合わぬ強力に王さまはびっくりして、いろんな力技をさせて見たが、小人はそれをことごとく見事にやってのけた。王さまはどうとう怒り出して、

「じゃ、今度は大きな宮殿を造ってみろ。この町にあるどの家よりも高い宮殿を造るんだぞ。もしそれが出来なけりゃ、命を取るから、そう思っているがよい」といった。

小人は困ってしまって、自分の家に逃げ帰った。そして年とった女に王さまの命令を話すと、女はからからと笑い出して、

「そんなことなら、何も心配するには及ばないよ。安心してゆっくりお休み」

といった。小人は何だか氣になつて仕方がなかったが、黙つて寢床に入つた。そして朝になつて目を覚すと、自分とお母さんとは、すばらしく大きな、町中のどの家よりも高い宮殿の中に横になっていた。

王さまはいよいよ腹を立てて、すぐに小人を呼びよせて、

「すぐにコゴヨル（極めて堅い樹）を二束持つて来るがいい。わしがその一束でまずお前の頭をなぐるから、お前も他の束でわしの頭をなぐるがいい」

といった。これを聞くと、小人は、

「コゴヨルのような堅い樹で頭をなぐられたら、たちまちころりと死んでしまふ」

と思つて、恐ろしさと絶望とに呻きながら泣き泣き、自分の家に歸つて行つた。すると年とつた女が、

「そんなことでびくびくするには当らないよ。わたしがうまいことをして上げる」

といつて、小人の頭の上にトルティヤというものを戴せてくれた。

小人が二束のコゴヨルを持つて来ると、王さまはすぐその一束を取り上げた。家来たちはこの勝負がどうなるかと思つて、広間にずらりと並んでいた。王さまは微塵になれと小人の頭をなぐりつけた。しかし小人は平氣な顔をして突っ立っていた。王さまはいらだつて、つづけさまになぐりつけたが、いくらなぐつても、少しも小人の頭

を傷つけることが出来なかった。そのうちにコゴヨルの束が粉々に砕けてしまった。王さまは心の中で、

「これはとんでもないことになってしまった。おれの頭をなぐらせてはたまらぬ。どうにかして取り止めにしたいものだな」

と思ったが、大勢の家来が控えている前で自分からいい出したこととて、いまさらそれを取り消すわけにいなかった。

やがて今度は小人がコゴヨルの束を取り上げた。そしてはっしとばかり王さまの頭をなぐると、ただの二撃で微塵に叩きくだいてしまった。並み居る人々はその力に感服して、

「体は小さいが、えらい男だ」

「わしたちの酋長にしよう」

と話し合って、小人を自分たちの酋長に仰ぐことにした。

小人が酋長になるとともに、年とった女が掻き消すように姿をかくしてしまった。

マニという村に深い深い井戸があつて、地下道につづいている。この地下道に流れている河の岸に一本の大きな樹があつて、その樹の下に一人の老女が坐っている。それが小人のお母さんであつた。彼女は蛇を自分のそばに置いていたが、それは人間の赤

子を餌にして命を保つといわれた。<sup>(6)</sup>

## 乙女争い

昔チチェンの地に、カネクという王がいた。

王は、一人の麗しい王女に恋して、度々結婚を申し込んだ。しかし王女はすげなくそれを刎ねつけて、かねてから恋い慕っていたユカタンの雄々しい若者と結婚するこ  
とになった。カネク王は憤怒と失望とおさえかねて、

「こんなに思いつめたわしの胸を踏みにじったつれない乙女、可愛さあまって憎さが、百倍じゃ。この上は相手の男もろとも叩きつぶしてやるまでだ」

といって、たくさんの家来たちを引きつれて、結婚の饗宴の席におしかけて行った。華やかに楽しかった饗宴の席は、たちまち血なまぐさい修羅の巷とかわった。

双方の人々は必死になって戦った。と、カネク王は、戦の騒ぎにまぎれて、うろろろしていた王女を小脇に抱くなり、どこともなく姿を隠してしまった。恋人を奪われ

マヤの石碑

F  
o:



た若者は血眼になってあちらこちらを捜し回った。若者の勇氣におじけ恐れたカネク  
王は、家来たちを連れて、住みなれたチチェンの地から逃げ出してしまった。<sup>(7)</sup>

インカ族の神話伝説

## 電光と雷鳴との由来

昔アタグフという神が、世界のあらゆるものを造って、自ら天上界を支配することにした。が、大地の上には、グァチミネという族が住んでいて、せいっぱいわがままなことをしていた。グァチミネは、「光なきもの」もしくは「闇やみの子」という意味であった。

創造神アタグフは、あるとき人類の始祖であったグァマンスリという男を呼び出して、

「大地に降って、お前の子孫を殖やすがいい」

といった。そこでグァマンスリは天上界から大地に降りて来て、グァチミネ族の女を娶めとったが、グァチミネ族は、グァマンスリを憎んで、

「あいつは、アタグフ神からいいつかって、大地をわがものにしようと思っているぞ。生意気な奴だ。あんなものにこの世界を横取りされてたまるものか。大地の上の

住人<sup>すみて</sup>としては、わしたちがそもそもその始まりじゃないか。あんな奴は生かしておけぬ」

と話し合って、とうとうグアマンスリを殺してしまった。しかししばらくすると、その妻が双生児を生んだ。一人はアポ・カテキルと呼ばれ、一人はピゲラオと呼ばれた。

二人は大きくなると、

「グアチミネ族は父の仇<sup>あだ</sup>だ。一人も生かしておかぬぞ」

といって、グアチミネ族を追いまわしては、かたっぱしからこれを殺していった。

と、天上界にいるアタグフ神が、黄金<sup>こがね</sup>の鋤を大地に下して、

「大勢の人間が、グアチミネ族のために大地の下にとじこめられている。この鋤で地を掘りかえして、彼らを救い出してやるがいい」

と、アポ・カテキルにいった。

アポ・カテキルは、創造神の教えに従って、黄金の鋤で大地を掘りかえすと、大勢の人間がぞくぞくと現われてきた。それが今日のインディオである。だからインディオたちは、アポ・カテキルを自分たちの創造者として仰ぎ尊ぶのである。

アポ・カテキルは、好んで投石器<sup>スリッダ</sup>を使って、大きな石を投げ飛ばす。そして大きな

石が空を切って飛ぶときに火花を散らして大きな音を立てる。それが電光と雷鳴とである。<sup>(1)</sup>

### ビラコチャ神の創造

昔チチカカ湖の水がにわか騒ぎ立ったかと思うと、湖の中から一人の神がぬっと現われた。それはビラコチャという神であった。

ビラコチャは、光り輝く円いものを幾つとなく造った。それには大きいのも小さいのもあった。造ってしまおうと、彼はそれらの円いものをことごとく天空に投げ上げて、それぞれきまつた路を歩くようにした。それは太陽であり、月であり、星であった。

それからビラコチャは大地をこしらえた。大地が出来上がると、

「この上に住むものをこしらえなくてはならぬ」といって、一つの石を取り上げた。



「だが待てよ。こしらえるにしても、どんな形にしたものだろう」

ビラコチャは石を握ったまま、しばらくの間考え込んでいたが、やがて、

「そうだ、そうだ、わしの姿に似せて造ることにしよう」

といって、自分の形そのままの人間を一人こしらえた。それがインカ族の始祖アルカ・ビサであった。ビラコチャ神はそれにつづいて石を取り上げては、どんどん人間をこしらえた。大勢の人間が出来ると、ビラコチャは、

「みんなわしについて来るんだ」

といった。人間たちはビラコチャの後からぞろぞろとついて行った。ビラコチャはクスコという地に来ると、人間たちにむかって、

「お前たちはここに住むことにするがいい」

といった。それからアルカ・ビサにむかって、

「お前はみんなの首領<sup>かしら</sup>となって、安らかにこの地を治めて行かねばならぬ」

といって聞かせた。人間たちは、ビラコチャに教わった通りにクスコに住みつくことになった。インカ人の首府クスコはこうして出来上がった。クスコということばは、

「世界の臍<sup>へそ</sup>」の意味である。多くの民族がそうであるように、インカ人も自分たちだけが人類のすべてであり、自分たちの住むところが世界の中心であると考えたのであ

った。

ビラコチャ神は、万物創造の仕事が終ると、また水をわけて、チチカカ湖の中深く沈んで行った。<sup>(2)</sup>

#### 四つの風の起源（一）

ビラコチャ神は、太陽、月、星、大地、人間などを造り終えたと、四人の召使いをこしらえた。それは東の風と西の風と南の風と北の風とであった。

ビラコチャはこれらの風にむかって、

「お前たちは、それぞれ大地の隅に行つて、そこに住むことにするがいい」

といった。そこで四人の風は、それぞれ大地の東の隅、西の隅、南の隅、北の隅に行つて、そこに住むようになった。

今日風が大地の四方から吹いて来るのはそのためである。

## 四つの風の起源（二）

あるところにパカリという洞穴ほらあながあった。洞穴の中には「曙」あけぼのが住んでいた。

あるとき、この洞穴の中から一人の男が現われた。それは東の風であった。と、やがてまた一人の男が飛び出して来た。二人は顔を見合わせて、

「お前は誰だ」

「わしは東の風だよ」

「そうか、わしは西の風だ」

といった。つづいてまた二人の男が洞穴の中から出て来た。東の風と西の風とが声をそろえて、

「お前たちは誰だ」

と尋ねると、あとの二人が、

「わしは南の風だ」

「わしは北の風だ」

と答えた。四人の風は、いっしょにいても仕方がないというので、申し合わせて、それぞれ大地の四隅に行くことにした。だから今日でも風は四方から吹いて来るのである。

## 人類創造（一）

昔マンコ・カパックという神があった。大地の上に住むものがないのを悲しんで、人間を造ろうと決心した。そこで土をこねて、髪の毛の長い人形、髪の毛の短い人形——さまざまな人形をこしらえて、さまざまな色に塗り立てた。それがすむと今度は、それらの人形たちに命と魂とを与えて、言葉を与えて、歌うべき歌を教えて、地に播くべき食物の種子を与えて、それから、

「お前たちはみんないったん地の下にもぐり込んで、自分たちの住みたいと思うところまで行って、大地の上に現われるのだよ」

と教えた。

人間たちは喜んで地の下にもぐり込んだ。そして暗い冷たい土の中を通過して、自分たちの住みたいと思うところまで来ると、洞穴の中から現われ出たり、丘の腹から飛び出したり、泉の水の中から泳ぎ出したり、樹の幹から脱け出したりして、それぞれ自分たちの好きな土地に住むことになった。そして自分たちの素姓や起源をいつまでも覚えていたために、お祭りの場所を定めたり、ワカという神聖な品物をこしらえたりした。

人間たちが大地に現われると、あるものは石になり、あるものははげ鷹<sup>たか</sup>その他の鳥になり、あるものはいろんなけだものになった。<sup>(3)</sup>だから大地の上には、人間だけでなく、さまざまなものが見出されるようになった。

## 人類創造(二)

パチャカマックが土をこねて、一対の人形をつくった。一つは男で一つは女であつ



た。人形に命の息を吹き入れると、すぐに生きて動くようになった。が、男は食物を手に入れることが出来ないで、間もなく飢死にをしてしまった。女は木の根や草の根をかじって生きつづけていたが、男がいないので、寂しくてたまらなかった。そこで太陽がかわいそうだと思って、女に一人の男の子を恵んだ。するとパチャカマックがその男の子を殺して、地に埋めてしまった。

しばらくすると、殺された男の齒からとうもろこしが生え出て、あばらほね肋骨や肉からさまざまの食用植物が生え出た。

### リヤマの予言

ある男が一匹のリヤマを飼っていた。

ある日、その男が、草のよく茂っているところにリヤマを引っばって行って、

「見事な草だろう。腹いっぱい食べるがいい」

といった。しかしリヤマは悲しそうにうなるだけで、とんと草を食べようとしなかった。

た。男は驚き怪しんで、

「どうしたのかね。こんな見事な草が気に入らないのかね」

と尋ねた。するとリヤマがにわかに言葉を発して、

「草が気に入らないのではありません。悲しくて食べられないのです」

といった。男はいよいよ不思議に思っ

「なんでそんなに悲しいのかね。わしはお前を親切に取り扱っているじゃないか」

といった。

「それはよくわかっていますよ。でも今から五日たつと、海の水が溢れて、大地を沈めてしまふんですもの、どうしてべんべんと草なんど食べている気になれるものですか」

と、リヤマが答えた。これを聞くと、男はのけぞるほどびっくりして、

「それは本当かね」

「本当ですとも。決して間違いっこはありません」

「それは大変だ。どうにかして逃げのびる道はないのかね」

と、男は目の色を変えて尋ねた。

「ないことはありませんよ。五日間の食物を用意して、ウィリャコト山の頂に登った

らいいでしょう」

と、リヤマが答えた。

男は大急ぎで五日間の食物を用意した。そしてそれをリヤマの背に積んで、ウィリヤコト山の頂に登ると、あらゆる鳥や獣類がもうちゃんとそこに逃げて来ていた。

しばらくすると、海の水がにわかになまって、大地の上に溢れて来た。人々は瞬くまに溺れ死んでしまった。水量は日ごとに増して、五日目には、ウィリヤコト山の頂に迫って来た。鳥や獣類は水におし流されまいと思って、お互いに押し合いへし合いし始めた。そのうちに一匹の狐がおし出されて、尻尾を水に濡らした。だから狐の尻尾は、今日でも黒い色をしているのである。

五日すぎると、水がだんだんと退き始めた。生きのこった一人の男は、リヤマをつれて下に降りて来た。今日のペルー人はみんなこの男の子孫である。<sup>(4)</sup>

## ピラコチャ神と人間との争い

ビラコチャ神がチチカカ湖から出て、西の方に旅をしていると、人間たちがその姿を見つけて、

「おい、変な奴が来たぞ」

「あんな奴はろくなことはないぞ。なぐりころしてしまえ」

といって、四方からビラコチャ神にうってかかった。ビラコチャ神は腹を立てて、

「生意気な人間どもだ。一つひどい目にあわせてやろう」

といって、ものすごい暴風あらしを起こした。見る間に家や、その中に入っている品物がめちゃめちゃに砕け飛んでしまった。人間たちは非常に驚き怖れて、ビラコチャ神の前にひれ伏して、

「恐れ入りました。乱暴なことを致しました罪はどうかお許し下さい。以後は、あなた様を首領に致しますから」

といった。ビラコチャ神は気色を直して、

「よろしい。お前たちがそういうなら、罪を許して、いろんな利益になることを教えてやろう」

といった。そして生きて行く上に必要なさまざまな技を人間たちに教えてやった。人間たちはビラコチャ神を非常に尊び敬って、パチャヤチャックという名をささげる

ことにした。<sup>(5)</sup>

## 黄金の杖

太陽と月とに二人の子があった。一人は男でマンコ・カパックと呼ばれ、一人は女で、ママ・オクリヨと呼ばれた。二人は兄妹でもあり、夫婦でもあった。

あるとき太陽の神が二人を呼んで、

「天界から人間の世界を見おろしていると、本当に悲しくなる。人間どもは、お互いに戦いあうことと、飲食して騒ぎ立てることの外何も心得ておらぬ。まことに気の毒なものどもではある。で、お前たち二人で人間世界に降りて行って、いろんな技を教えてやるがいい」

といった。マンコ・カパックとママ・オクリヨとは、

「承知いたしました。これからすぐに出かけることにしましょう」

と答えた。と、太陽の神は黄金でこしらえた一つの杖を取り出して、





北部，中部ペルーの神々の髪飾りの型。

1～8 最高神。9～15 豊穰神あるいは太陽神。17～23 月神。

「これを持って行くがいい。人間世界に降って、あちらこちらと歩き回っているうちに、あるところでこの杖が地の中に沈んでしまふ。お前たちはその地で人間を教え始めるのだよ」

といって聞かせた。

マンコ・カパックとママ・オクリヨとは、黄金の杖を受け取って、人間世界に降った。そしてあちらこちらと歩き回っていると、クスコで黄金の杖がマンコ・カパックの手を離れて、大地の上に落ちた。と思うと土の中深く沈んでしまった。二人は顔を見合わせて、

「お父さんのおっしゃった通りだ。ではここに住んで、人間を教え導くことにしよう」

といって、クスコの地に住家をこしらえた。そして人間たちを呼び集めては、いろいろな利益になる技を教え込んだ。すなわちマンコ・カパックは、男の人たちに地を耕して穀物をつくることを教え、ママ・オクリヨは女の人たちに糸を紡いだり機を織ったりすることを教えた。

人間たちは非常に喜んで、われもわれもとクスコに集まって来て、永くそこに住むことになった。そしてあとでクスコという市の出来る基となった。<sup>(6)</sup>

---

### ペルー人の階級の由来

---

ペルー人が、太陽の教えに従って、クスコの市を建ててそこに住むことになる、太陽が三つの卵を彼らに送った。一つは黄金の卵であり、一つは白銀の卵であり、一つは銅の卵であった。人々は驚き怪しんで、

「どうしたというんだろう。太陽の神さまはどういうつもりでこうした三色の卵を届けて下さったんだろう」

と話し合ったが、

「とにかく神さまがわざわざ届けて下さった品だから、大切に置いて置いたらいいだろう」

ということになった。

しばらくすると、三つの卵が割れて、三通りの人間が現われて来た。黄金の卵から現われた人間は、雄々しい姿をしており、白銀の卵から生まれた人間は気高い姿をし

ており、銅の卵から生まれた人間はいやしい姿をしていた。そして雄々しい姿をしているものは王者となり、気高い姿をしているものはお坊さんとなり、いやしい姿をしているものは奴隷となった。こうしてペルー人の間に三つの階級が出来たのであった。

## 海に消える神

昔トナパという神がいた。

トナパは、ペルーの村々をあまねく歩き回って、人々にさまざまなことを教えることに努めていた。彼はコリャ・スユ地方をふりだしにして、方々を歩き回っていたが、やがてヤムキスパというところに来た。そしていつものように、人々にいろんないいことを教えようとしたが、誰もその言葉に耳を傾けるものがなかったばかりでなく、よってたかってトナパを嘲り罵るあざけのしのであった。

トナパは、雨露をしのぐ宿も手に入らないで、野面に眠らなくてはならなかった。

彼はヤムキスパの人々のつれなさを恨んで、

「こんなやくざな人間は、水の底に沈んでしまいがよい」

と呪った。と間もなく大水が出て、村中が新たに出来た湖の下に沈んでしまった。

トナパはヤムキスパを去って、他の村に来た。村の人たちはいっしょに集まって、結婚祝いの盛んな酒宴を開いていた。トナパはその席に入りこんで、いつものようにいろんないいことを教えようとした。しかし村の人たちは酔いにまぎれて、口々に、「やかましい。めでたい席にやって来てくだらぬことをぬかす奴は、早くつまみ出すがいい」

「そうだ、そうだ。いやにもったいぶったことばかりしゃべって、おかげで酒の味がなくなってしまった。つまみ出せ、つまみ出せ」

と叫んだ。それを聞くと、トナパ神はかっとなって、

「こんなやくざな人間は、石になってしまいがよい」

とのろった。と思うと、今が今まで酒を飲んだり歌ったり踊ったりしていた人々が、みんな冷たい石に変わってしまった。

ペルー中を歩き回っていたトナパは、ある日カラバヤ山の近くにやって来た。彼は大きな十字架をこしらえて、それを肩にのせて、カラプクという丘の上に運んで行っ



た。そしてそこに集まっていた人々にむかって、熱心に教えを説き始めた。そのうちにわれながら、感きわまって、涙をほうりおとした。と、その涙が自分の前にうずくまっていた酋長の娘の頭にかかった。それを見ると、人々は怒り出して、

「無礼な奴だ。ただではおかぬぞ」

「そうだ、そうだ、生捕りにしてしまえ」

と叫ぶなり、トナパをひしひしと縛り上げて、カラプク湖の側の岩室におし込んでしまった。

トナパは、暗くて冷たい岩室の中で唯一人思いに沈んでいると、夜が明けかかった頃に、かすかな足音がした。トナパが怪しんで頭を上げると、目の前に一人の美しい若者が突っ立っていた。若者はトナパにむかって、

「心配しなくてもいいですよ。わたしは天上界からあなたを見まもっていらっしやる神さまからの使いの者です」

といった。そして大勢の番人の目をかすめて、トナパを岩室から連れ出した。

トナパはカラプク湖の中に自分の外衣そとぎを投げ込んだ。そしてそれを船にして湖を渡りきると、チワナクの町に入ったが、ここでも人々はいろんな娯楽に耽って、彼の言葉聞き入れようとしなかった。彼は町のものをすっかり石にしてしまった。

こうしてトナパは、自分の教えに従うものに幸福を与え、これに背くものを罰したあとで、チャカマルカ河を降って海に出て、そのまま姿をかくしてしまった。<sup>(7)</sup>

## 四人兄弟

昔四人の兄弟がパカリ・タムプ（「曙の家」のこと）というところに住んでいた。

ある日一番年上の兄が、近くの山の頂に登って、四つの石を拾い上げた。そして一つの石を東に投げて一つの石を西に投げて、一つの石を南に投げて、一つの石を北に投げながら、

「わしは世界の四つの方角に石を投げた。だから目の届くかぎりのあらゆる土地は、わしのものである」

と、三人の弟たちにいった。二人の弟は、兄の言葉に従うことにしたが、一番末の弟だけは承知しなかった。

「あんなことで、大地をわがものにされてたまるものか。今に見ろ、わしが兄たちを

やっつけてしまから」

彼はこう思つて、いい機会をねらっていた。ある日彼は、一番年上の兄をとある洞穴の側に誘い出した。そして隙を見て、兄をその中に押しこむなり、大きな石で洞穴の口を塞いでしまった。

「今度は二番目の兄を始末しなくてはならぬ」

彼はこう思つて、ある日二番目の兄をさそつて高い山の頂に登った。そして油断を見すまして、兄を崖からつきおとして、落ちて行く間に石に変えてしまった。三番目の兄は、それに気がつくと、

「これは大変だ。ぐずぐずしていると、わしも弟のために酷い目に合わせられるぞ」といって、どこともなく逃げ出してしまった。こうして一番末の弟が、見わたす限りの地を自分のものにしてしまった。<sup>(8)</sup>

## 親子の試し

コニラヤ・ビラコチャという精霊がいた。悪戯好きな性質で、

「おれは、この地上のあらゆるものを造った造物主だ」

と威張りかえることもあれば、貧しいインディオのようにぼろぼろの破衣を纏って、人々を欺したりするのであった。

あるところにカビリヤカという美しい女がいた。人々は彼女の美しさを心からほめた。たえていた。ある日カビリヤカは、一本のルクマの樹の下で熱心に機を織っていた。と、コニラヤ・ビラコチャが一羽の美しい鳥に姿を変えて、その樹の枝にとまって、自分の精液を一粒のルクマの実にして、カビリヤカの側に投げおとした。カビリヤカは、何気なくそれを拾い上げて、

「おお甘そうに熟している」

というなり、すぐに食べてしまった。

それから幾月かたつと、カビリヤカは一人の男の子を産み落とした。彼女は不思議でならなかった。

「この子のお父さんはいったい誰だろう」

カビリヤカはいつもこう考えていたが、男の子がはいまわるようになると、神々や精霊どものところに使いを立てて、

「どうかみんな集まって、どなたがわたしの子供のお父さまであるかお話し下さい」といわせた。神々や精霊どもは、美しい女の夫に選ばれたと思って、みんな華やかに着飾って集まって来た。ただコニラヤ・ビラコチャだけは、乞食のように見すばらしい服装をしていた。カビリヤカはコニラヤ・ビラコチャには目もくれないで、美しい衣を纏っている神々や精霊たちばかりを見つめながら、

「どなたがこの子のお父さまです。さあ早く知らせて下さい」

といった。しかしみんなお互いに顔をのぞき合うだけで、黙りこくっていた。カビリヤカは仕方がないので、

「この子供をおろしましょう。そしたらきっと自分のお父さまのところにはって行くでしょうから」

といって、抱いていた男の子を大地におろした。子供はすぐにはい出した。カビリヤ



カは息をこらして子供を見つめていた。と、男の子は、美しく着飾っている神々や精霊たちには目もくれないで、ぼろを纏っているコニラヤ・ビラコチャのそばにのこのことはいよって行つた。そして彼を見上げながらにこにこと笑つた。それを見ると、カビリャカは、

「まあ、どうしよう、この子のお父さんは、神でもなく精霊でもなくて、ただの乞食だったのか」

と思つて、胸の中が煮えくり返るほど怒り出した。そしてものもいわずにわが子を抱き上げて、一散に海辺をさして駆け出した。コニラヤ・ビラコチャはからからと笑い出して、

「ははあ、汚ない服装をしてるわしを見て、気が転倒したな。よし、今度は見事な男振りを見せてやるよ」

といいながら、立派な衣に着換えて、カビリャカのあとをつけて行つた。しかしわが夫をいちずに乞食だと思ひ込んだカビリャカは、あとをもふり向かずに、いきなり海の中に渡り込んだ。と思うと一つの岩に変わってしまった。あとをつけていたコニラヤ・ビラコチャは、女が行方がわからなくなったので、あたりを見回していると、一羽のはげ鷹たか（コンドル）が目についた。彼ははげ鷹にむかつて、

「おい、このあたりで一人の女を見なかったかね」と尋ねた。

「ええ、つい近くで見ましたよ。何でもひどくふさぎ込んでいましたよ」

と、はげ鷹が答えた。コニラヤ・ビラコチャは喜んで、

「誰でもはげ鷹を殺すものは、自分も死ななくてはならぬ」

と相手の鳥を祝福してやった。そしてなおも、カビリャカの行方を捜していると、今度は一匹のスカンクに出会った。コニラヤ・ビラコチャはスカンクにむかって、

「おい、このあたりで一人の女を見なかったかね」

と尋ねた。スカンクはすまり返って、

「そんなものは見ませんでしたね。どうも御苦労さま」

と答えた。コニラヤ・ビラコチャは腹を立てて、

「お前は、いつまでも臭いにおいをしている。そして臭いにおいのために、みんなから嫌われて、夜でなければ外出が出来ぬようになれ」

と、スカンクを呪った。そしてまたあちらと歩き回っていると、一匹のプーマに出会った。コニラヤ・ビラコチャはプーマにむかって、

「おい、このあたりで一人の女を見なかったかね」

と尋ねた。

「見たんですよ。ついこの近くでね」

と、プーマが答えた。コニラヤ・ビラコチャは喜んで、

「ありがとう。わしは悪いことをしたものを罰する力をお前に授けてやるよ。そして誰でもお前を殺したら、お前の毛皮を頭や歯や目のついたまま剥ぎ取って、お祭りのときにそれを着るようにしてやるよ。そしたら、お前は死んだあとまでも、みんなから尊ばれるというものだ」

と、プーマにいつて聞かせた。そしてまた方々を探しまわっていると、一羽の鷹に出会った。コニラヤ・ビラコチャは鷹にむかって、

「おい、このあたりで一人の女を見なかったかね」と尋ねた。

「ええ、見たんですよ。つい近くで見たんですから、すぐに探し出せるでしょう」

と、鷹が答えた。コニラヤ・ビラコチャは喜んで、

「いや、ありがとう。お前の皮もお祭りのときにみんなが体につけるようにしてやるよ」

といった。それからなおも女を探していると、今度は数羽のおうむに会った。コニ

ラヤ・ビラコチャは、おうむにむかって、

「おい、このあたりで一人の女を見なかったかね」と尋ねた。

「女ですって、そんなものはまるきり目につきませんでしたね。こんなところを探しまわったって駄目ですよ」

と、おうむが答えた。これを聞くと、コニラヤ・ビラコチャはすっかり腹を立てて、「いまましい奴だな。お前は今後遠くまで聞こえるような大きな声で鳴かねばならぬぞ。そしてそのおかげで敵に見つかって、殺されてしまふんだぞ」と、おうむを呪った。

こうしてコニラヤ・ビラコチャは、とうとう海辺にやって来た。そしてカビリヤカとその子供とが石に変わってしまったのを見ると、非常に嘆き悲しんで、いつまでもいつまでも渚に突っ立っていた。



色々な神話的動物にとり巻かれた  
太陽神あるいは最高神。



## 海の魚の起源

昔は海の中には一尾の魚も棲んでいなかった。一人の女神が、少しばかりの魚を小さい池に飼っているだけであった。人々は女神のところに行つて、

「どうかあなたの飼つていらっしゃる魚をわけて下さい。海に放つて殖えるようにいたしますから」

と、度々願つたが、女神はいつも、

「いやじゃ。魚はいつまでもわたしだけの持物にしておくのじゃ」

と答えるのであった。精霊のコニラヤ・ビラコチャがこれを聞き込むと、いつもの悪戯気がむらむらと起こつて来た。

「よし、女神がそんな気なら、おれがからかつてやる」

彼はこういつて、ある夜女神の池に忍びよつた。そして池から海まで一筋の溝を切り開いたので、池の中の魚は溝をつたつて、すっかり海の中に逃げ込んでしまった。

こうして今日のように海にはたくさんの魚が棲むようになった。

女神はひどく怒って、コニラヤ・ビラコチャを欺して殺そうとしたが、彼はいつもうまくきりぬけて、どこともなく姿をかくしてしまった。

### 水晶の中の男

ユパンキが、父のビラコチャ（インカ族の第八代目の王）のあとを嗣いで、インカ族九代目の王となることのであった。彼は王の位に即く前に父の住んでいる館を訪れることにした。

途中でユパンキはススルプキオと呼ばれる泉のほとりに来た。と、ちょうどそのとき一片の水晶が泉の中に落ち込んだ。ユパンキはなにげなくその水晶を拾い上げて、じっとそれを見つめた。するとそこに一人の男の姿を認めた。男は、インカ族の王者のように、額に縁飾りをつけて、双の耳に耳環をはめていた。そして頭のうしろから太陽の光線のような光り輝く三筋の後光がさしていた。

ユパンキは怪しい男の姿が目についた瞬間、思わず驚きの叫び声をあげた。しかしもっと驚いたことには、よく見ると、その男は一頭のプーマを肩のそばに引きつけて、一頭のプーマの頭を両の脚の間にはさんでいた。ユパンキはすっかり脅えきつて、水晶をほうり出すなり、一散に駆け出そうとした。途端にうしろの方で声がして、

「ユパンキ、こわがらなくてもよい。立ちどまって、わしのいうことを聞くがいい」といった。ユパンキは辛くも足をふみとどめて、うしろの方を振り向いたが、人の姿らしいものはさらに目につかなかった。しかし怪しい声はなおもつづいて、

「ユパンキ、そなたが水晶の中に認めたのは、そなたの父じゃ。父といっても生みの親のビラコチャではない。そなたの一家の祖である太陽じゃ。そなたは、ゆくゆく数々の国民を征服することになるであろう。だが決してそなたの父なる太陽を忘れてはならぬ。わしに犠牲を供えて、心をこめて仰ぎ尊ばなくてはならぬ」といった。

ユパンキは太陽の教えを忘れなかった。彼は王の位に即くと、水晶の中で認めた通りの姿に太陽の像を造らせて、かずかずの犠牲を供えることにした。ユパンキは太陽が予言した通りに多くの部族を征服することが出来た。そしてそれらの部族のものた

ちにいいつけて、太陽の神のために壮麗な神殿を建てさせることにした。

### パリアカカ物語

昔五つの卵が、とある高い山の頂に現われた。どこから誰が持って来たのか、そんなことは一切わからないが、とにかく五つの卵が山の頂にころりと並んでいた。

しばらくすると、卵が五つながらおのずと裂けた。そして四つの卵から四羽の鷹が飛び出したかと思うと、やがて四人のすぐれた戦士となった。残りの一つの卵からは、パリアカカと呼ばれる偉い男が現われた。パリアカカは、知恵才覚のすぐれた男であった。いや不思議な力をそなえた英雄神であった。

パリアカカは方々を歩き回った。そしてある日とある村に来ると、村の人たちが寄り集まって、祭礼を催していた。パリアカカは汚ない衣を纏っていたので、誰一人目をとめるものがなかった。それどころか嘲り笑ったり、叱り罵ったりするものさえあった。パリアカカは村人の無礼を憎んだが、胸の中の怒りをおしこらえて、黙って突

立っていた。と、一人の女の子がかわいそうだと思って、酒をみたした盃を持って来て、

「さあ、これをおあがり。今日は村の祭りだから、みんな楽しく日をすごさねばなりません」

といった。パリアカカは女の子の優しい心をありがたく思った。彼は女の子をわきに呼び出して、小さな声で、

「今から五日たつと、大水が出て、この村は滅びてしまうよ。お前さんは早く水の来ないところに逃げ出すがいい。だが、このことは決して誰にも話してはいけないよ」といった。そしてとある丘の頂に登って、恐ろしい暴風雨を起こしたので、見る見る大水が出て、村中の人を溺らせてしまった。

それからパリアカカは、サン・ロレンソという村にやって来た。美しい乙女が一人畑のそばで烈しく泣いていた。パリアカカは怪しんで、

「そなたは誰じゃ。どうしてそんなに泣き悲しんでいるのかね」

と尋ねた。乙女は涙に濡れた顔を上げて、

「わたしはチョゲ・スソというものでございます。水が足りなくて、とうもろこしが枯れてしまうので、それが悲しくてたまらないのです」



# IDOLO\$ IVACAS DEI OSCHIVCHAISV<sup>ivs</sup>



パチャカマックとパリアカカ

と答えた。パリアカカは、乙女の美しい姿にすっかり心を魅せられて、

「わしはそなたを愛している。もしそなたがわしの愛に報いてくれるなら、いくらでも水を出してやろう」

といった。乙女は考え深そうな目付きをして、

「わたしの畑だけでなく、みんなの畑に水を与えて下さるなら、あなたのお言葉に従うことにしましょう」

と答えた。

「みんなの畑に水を与える？ そんなことが出来るかしら」

パリアカカは、心の中でこう考えて、そっとあたりを見回すと、遙かかなたに小さい川が流れているのに気がついた。

「よし、あの川の水を引くことにしよう。堰や水道をうまく造りさえすれば、みんなの畑に水を与えることが出来るにちがいない」

パリアカカはすぐに野山に棲んでいる鳥や蛇やとかげや狐などを呼び集めて、

「向うに見える小川から、四方八方に水道をこしらえてもらいたい」

といった。動物たちは承知して、狐を棟梁にして、すぐに仕事に取りかかった。あるものは草をむしり石を取りのける。あるものは土を掘り返して溝をつくる。あるもの

は木を組んで堰をこしらえる。こうしてみんなが一生懸命に働いてくれたので、しばらくすると、畑という畑にすっかり水が来るようになった。パリアカカは乙女にむかって、

「これでわしは約束を果たした。そなたも約束を果たしてもらいたいが」といった。乙女は喜んでパリアカカといっしょになることを承知したが、

「でも、も一つお頼みがありますわ」

「どんな頼みかね。いってごらん」

「あなたがおこしらえになったたくさんの水道のうちで、ココチャリヨの水道が一番気に入りましたわ。わたし、あの水道の源にあるヤナカカの岩のところに住みたいと思いますわ。許して下さいましょう」

パリアカカは、美しい乙女の望みを叶えてやることにした。

二人はヤナカカの岩のところにいっしょに住むことになった。乙女は非常に喜んで、

「わたしはいつまでもここにいたいと思いますわ。死んだあとまでもね」

といった。そこでパリアカカはとうとう乙女を石にして、とこしえにココチャリヨ水

道の源水に留まらせることにした。<sup>(9)</sup>

### ワチアクリ物語

卵から生まれ出たパリアカカの子にワチアクリという若者がいた。ワチアクリははじめなほど貧しくて、日ごとの食物もろくろく手に入らぬことが多かった。しかし知恵才覚のすぐれた父からさまざまなことを教わって、賢い男となっていた。その頃一人の金持ちの男がいた。この男は非常に珍しい家を建てて、黄色や赤色の鳥の羽根で屋根を葺いた。人々は、彼が莫大な富を持っているというので、よってたかつて彼をちやほやしていた。彼はすっかりいい気になって、

「おれはただの人間ではない。造物主だ」

といい出した。人々も、

「あんなにたくさんの宝を持っているから、ほんとに神さまかもしれん」  
と思った。

ところがあるときその男が重い病氣にかかって、どんなに治療をしても治らなかった。それを見ると、人々は、

「どうもおかしいね。あの人が神さまなら、病氣になっても、すぐに治るはずだがな。治らないところを見ると、やはりわたしたちと同じ人間に違いない」と話し合っていた。

ちょうどその頃ワチアクリは旅に出て、あちらこちらを歩き回っていた。と、ある日彼は、とある森の中で二匹の狐がしきりに何やら話し合っているのを見つけた。彼はそっと狐のそばに忍びよって、耳をすました。狐たちはそれに気がつかないで、なおも話しつづけるのであった。

「お前、金持ちの男が重い病氣になっているのを知っているかね」と、一匹の狐がいった。

「知ってるよ。いくら養生をしても治らないとは変だね」

と、他の狐がいった。すると始めの狐はせせら笑って、

「なに、それにはちゃんとわけがあるよ」

といった。

「わけというのは？」



と、相手の狐が尋ねた。

「それはこうなんだよ。あの男の妻が、他の男と仲よくなっているのだ。それで夫が邪魔でしかたがないので、蛇とがまをつかって、重い病気にしたのさ。あの男の家に行って見ろ、二匹の蛇が屋根の上にうろうろしているし、二つの頭を持った一匹のがまが石臼の下に潜んでいるんだよ。病気が治らぬのもあたりまえさ」と、始めの狐が答えた。

狐たちの話を聞き込んだワチアクリは、金持ちの男がかわいそうでたまらなくなつた。

「よし、おれがあつた男の病気を治してやろう」

彼はこういって、すぐに金持ちの家に訪ねて行った。家の前に金持ちの男の娘が一人立っていた。ワチアクリは、その乙女の可愛い姿に心をひかれて、

「お父さんが病気だそうですね」

と話しかけた。乙女は悲しそうな顔をして、

「ええ、そうです。そしてどんなに介抱をしても治らないので、ほんとに困っていますわ」

と答えた。ワチアクリは乙女の顔を見つめて、

「もしあなたがわたしを愛してさえ下されば、すぐにお父さんの病気を治してあげますかね……」

といった。乙女は眼をこらしてワチアクリの姿を眺めた。ワチアクリはぼろぼろになった衣を纏って、汚ない顔をしていた。乙女はいやな顔をして、

「わたしあなたと結婚することは出来ませんわ。でもお父さんの病気はぜひ治していただきたいと思いますわ」

と、すこぶる虫のいいことをいって、ワチアクリを家の中につれ込んだ。

ワチアクリは、病人にむかって、その妻の身持ちが悪いこと、蛇やがまを使って彼を病気にしたことなどを話して、

「そういうわけだから、悪いことをたくらんでいるものをどうにかしさえすれば、あなたの病気はすぐに治りますよ」

といった。病人の側に坐っていた妻は、それを聞くと、真赤に怒り出して、ワチアクリを睨みつけながら、

「お前さんは、わたしに対してとんだいいがかりをつけましたね。何を証拠にそんなひどいことをいうんです。わたしはそんなだいいそれた悪人ではありませんよ」

と喰ってかかった。ワチアクリは冷ややかにおちついて、

「証拠がほしいというんですか。では早速見せて上げよう」

と答えるなり、屋根にのぼって二匹の蛇を捕えて来た。そしてそれを女の目の前につきつけて、

「それ、これが証拠の一つですよ」

という、女はいやな顔をして、

「それがどうしたというんです」

と、声をふるわせていった。

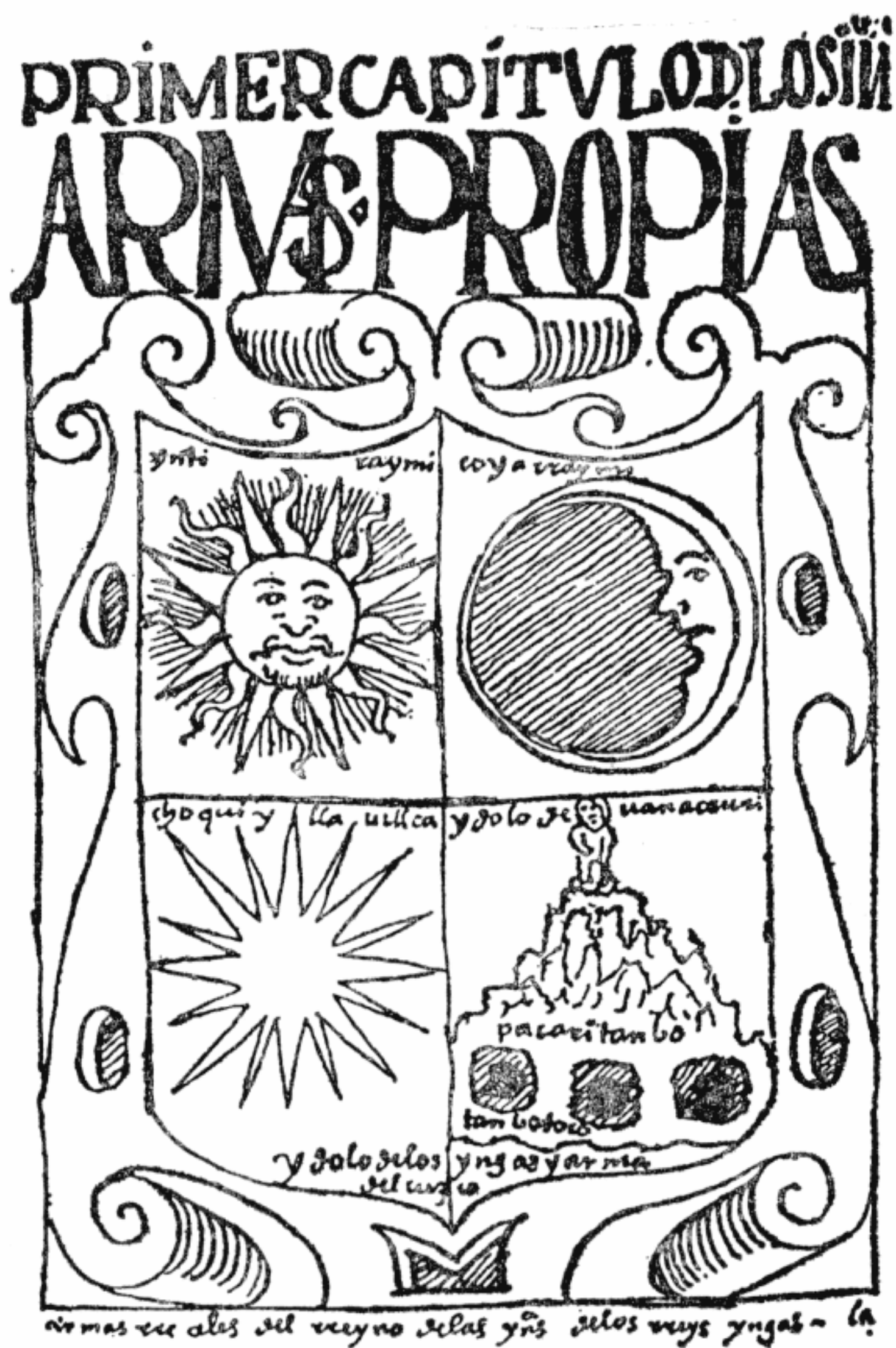
「ちょっと待って下さい。も一つお目にかけるものがありますよ」

ワチアクリはこういって、石臼を引き起こすと、その下に二つの頭を持った大きながまが、ぎらぎら目を光らせていた。彼はそれを掴んで、女の鼻先にさし出ししながら、

「どうです。これでもだいそれたことをしないというんですか」

と詰めよった。女はもうたまりかねて、病人とワチアクリとを睨みかえしたまま、そこそと家から逃げ出してしまった。

ワチアクリは、蛇とがまとを叩きつぶしてしまった。と、金持ちの男はたちまち元気をとりかえして、けろりと起き上がった。そして顔中に喜びの色をたたえて、



インディオの王国とインカ帝国の国王の紋章

「いや、どうもありがとう。お蔭で思わぬ命拾いをしました」

といって、とうとう自分の娘を説きつけて、ワチアクリの妻にしてしまった。

ところが、金持ちの男の息子は、ワチアクリがぼろぼろの着物を着て、よごれくさった様子をしているのがいやでいやでたまらなかった。

「こんな汚ない男を縁者に持つのは、まっぴら御免だ。何とかして叩き出してしまわなくてはならぬ」

彼はこう考えて、ある日ワチアクリの妻になった自分の妹にむかって、

「ワチアクリという奴、どうもいやな奴ではないか」

というと、妹もすぐに調子を合わせて、

「ええ、ほんとにいやな男ですわ。でもお父さんが無理にいっしょにしておしまいになっただけですもの、いまさらどうすることも出来ないでしょう」

といった。

「なに、そんなことがあるものか。あいつを追い払う手段はいくらでもあるよ。お前さえその気になってくれるなら、今にあいつを叩き出してやるよ」

と、兄がいった。

こうして兄は、ワチアクリにむかって、踊りと酒飲みとの技くらべを申し込んだ。



ワチアクリは困ってしまつて、そつと父のパリアカカのところに訪ねて行つた。そして技くらべの話をして、

「どうしたらいいんでしょう。わたしには勝てそうな気がしないんですが」

という、パリアカカはにこりと笑つて、

「そんなに心配しなくてもいい。わしがきつと勝たせてやるから」

といった。そしてワチアクリをとある山の麓につれて行つて、死んだリヤマに姿を変えてやつて、

「いいかね、根氣よく死んだふりをしているんだよ。そうすると狐が酒壺と笛を持つてやつて来るから、おどかしてそれを取り上げるがいい」

と教えた。

ワチアクリは、リヤマの姿で大地に横たわつたまま、根氣よく死んだふりをしていた。するとあくる朝どこからとなく牝牡の二匹の狐が現われて来た。牡の狐は酒壺を抱えており、牝の狐は笛を手にしていた。狐たちはワチアクリを見ると、

「やあ、リヤマが死んでいる。いい餌食が見つかったね」

といいながら、酒壺と笛とを地面に置いて、急ぎ足にワチアクリに近づいて来た。ワチアクリは、彼らを十分近くまで引きよせて、だしぬけに大きな声を出した。狐たち

はびっくり仰天して、酒壺と笛とを置きっぱなしにして、一散に逃げ出した。酒壺と笛とには、魔力がこもっていたので、ワチアクリはそのお蔭でやすやすと飲みくらべ踊りくらべにうち勝つことが出来た。

金持ちの息子は、思わぬ負けをとって口惜しくてたまらないので、

「よし、今度は器量比べだ。お前とわたしとが、お祭りの晴着を着て、どっちが立派に見えるかということを試すのだよ」

と、ワチアクリにいった。ワチアクリは困ってしまつて、また父のパリアカカに相談をすると、パリアカカは、

「そんなに心配しなくてもいい。わしがきつと勝たせてやるから」

といつて、赤いプーマの毛皮を渡してくれた。ワチアクリがそれを体に纏うと、頭のまわりに虹がかかったかと思われるほど美しかった。こうして彼は器量比べにも見事に勝ちを占めたのであった。

金持ちの息子はいよいよ気をあせつて、

「じゃ今度は家の建てくらべだ。お前さんとわたしとで、どちらが早く立派な家を建てる事が出来るかということを試すんだ」

と、ワチアクリに申し込んだ。ワチアクリは困ってしまつて、また父のパリアカカに

助けを乞うた。パリアカカは、

「そんなに心配しなくてもいいよ。わしがきつと勝たせてやるから」

といって、世界中にありとある鳥や獣類を呼び出して、ワチアクリの仕事に手伝いをするようにいいつけた。

「いいかね、ワチアクリ、昼間はお前だけで仕事をするのだよ。夜になると鳥や獣類がいっせいに働いてくれるんだから」

パリアカカはこう教えてくれた。

金持ちの息子は、大勢の人をつれて来て、朝からどんどん仕事をやり出したが、ワチアクリはただ一人でこつこつと働いているだけであつた。だから夕方になると、金持ちの息子の家は、ほとんど出来上がりかけたが、ワチアクリの家は、やっと土台が据えられただけであつた。それを見ると、金持ちの息子はほくほくして、

「今度こそいよいよ技比べに勝てることになったぞ。明日になって、屋根を葺けば、それでもうすっかり家が出来上がるからな」

と思つて、いそいそと夕暗の中を引き上げて行つた。が、すっかり日が暮れてしまふと、ありとある鳥や獣類が集まって来て、ワチアクリを助けて仕事を始めたので、夜が明けかかる頃には、金持ちの息子の家と同じように、屋根を葺くだけになつてしま

った。

朝早く起き出した金持ちの息子は、

「さあ、もう一息であの男を叩き出すことが出来るぞ」

と、たくさんのリヤマにいいつけて、屋根を葺く藁を持って来させることにした。ワチアクリはそれを見ると、一頭の猛獣にむかって、

「リヤマどもが藁を背負って来たら、烈しく吼え立てて、追い払っておくれ」

といいつけた。猛獣は承知して、森かげに隠れた。そしてたくさんのリヤマたちが藁を背負ってやって来るのを待ち受けて、一生懸命に吼え立てた。リヤマたちは森をゆるがすような吼え声を聞くと、驚き恐れて、一散に逃げ出してしまった。

金持ちの息子は、いつまで待ってもリヤマが藁を持って来ないので、手を空しくしている外はなかった。そのひまにワチアクリはとうとう屋根を葺いてしまつて、勝ちを占めた。

パリアカカは、ワチアクリを呼んで、

「あの金持ちの息子は、いろんな技比べをして、お前を苦しめようとしている。どうもうるさい奴だ。今度はあべこべにお前の方から勝負を申し込んで、すっかりやつつけてしまふがいい」

といった。

「そんなことが出来るなら、ほんとに結構です。ところでどんな勝負をするのでしょう」

と、ワチアクリが尋ねた。

「青い肌着を着て、白い綿を腰にまきつけて踊りくらべをするのだよ」と、パリアカカが教えた。

ワチアクリはすぐに金持ちの息子のところに行って、教わった通りの技比べを申し込んだ。金持ちの息子は、

「踊りくらべなら、誰にも負けることはないぞ」

と思って、すぐに申し込みに応じた。そして青い肌着を着て、白い綿を腰に巻きつけて現われて来ると、ワチアクリがだしぬけに大きな声を立てた。金持ちの息子はびっくりして逃げかけた。ワチアクリはそれを追っかけて、金持ちの息子を鹿の姿に変えてしまった。



## 〔原注〕

## ナワ族の神話伝説

(1) ルイス・スペンス氏は、「九蛇きゅうだの風」と

「九洞の風」とを目して、光明と暗黒、昼と夜とを示すものであるとしている。この解釈が当たっているか否かは別として、これらの二人の若者が行なった祈禱の方法は、古い時代のミシュテカ族の祈禱法を示唆するものとして、すこぶる興味がある。

(2) この洪水神話は、ナワ族の間に伝承されるもので、彼らが持っていた *Codex Chimalpopoca* から、ブラシュー師が訳出したものによる。

(3) メキシコの神々の一人にテペヨロトルもしくはテペオロトレクという神がある。テペヨロトルは「山の心臓」を意味し、テペオロトレクは「獣類の主」を意味するといわれる。普通に地震をつかさどる神であ

ると解せられているが、コーデックス・テリアノ・レメンシスという写本の注解者の説によるとテペオロトレクというのは、洪水後の大地の有様を示す言葉で、洪水の名残りとしての山彦もその有様の一つであるという。そうするとテペオロトレクという神は地震の外に山彦をつかさどるわけである。

(4) ルイス・スペンス氏は、この神話を解釈して、ナナワトルは点々たる星をつけた「夜」であり、メツトリはその名の示すように「月」であり、燃えさかる火は「明るい曙あけぼの」である。従って物語全体の意味は、夜が去り月が没して、曙が現われる天然現象を説明したものであるといっている。しかし自分はこの解釈に若干の疑いを持っている。第一にこの物語は、太陽がいかにしてこの世界に存在するようになった

かを説明することを本旨としている。それを夜が去って曙が現われるという日々に起こる現象の説明と見るのははなはだ無理である。第二にナナワトルは、皮膚病、ことに癩病をつかさどる神である。これを「夜」と解するのは、どこに根拠があるであろうか。癩病は皮膚の上に斑点をつけるものであるから、それを空に現われる星くずの点たるにたとえたのかもしれないが、それは余りに事理に遠い比擬といわねばなるまい。とにかくスペンス氏の解釈は、少なからず牽強附会の痕を示している。それならば太陽の最初の出現を説く神話に、なぜに皮膚病の神ナナワトルが引き出されたであろうか。自分の現在の知識をもってしては、この疑問に答えることが出来ぬ。こんな場合には、正直に解釈しかねると言ってしまうのが一番安全でかつ賢明である。古い

昔の信仰の中には、それが滅び去って今日に伝わっていない分子がたくさんあるに違いない。それが判らない以上、神話のある部分の意義が分明にならないのは当然でなくてはならぬ。

(5) こうした神話から推して、ある学者は、ケツアルコアトルを雷雨の人格化であろうと説くものもある。この神を象徴するものは、鳥と蛇と十字と燧石とであった。そして鳥は雲を表わし、蛇は雷光を表わし、十字は四方の風を表わし、燧石は雷霆らいていを表わすといわれるから、ケツアルコアトルは、少なくともその一面においては雷雨の神であつたろう。リントンの如きはさらにまたこの神がウェマク（「強き手」のこと）という称号を負っている事実から推して、地震をつかさどる神でもあつたろうといっている。

(6) この神話は、アステカ族がトルテカ族の国に侵入して、これを追い払った歴史的事実を反映しているといわれる。ケツァルコアトルの最期に関しては、この外にさまざまな伝承がある。すなわちある物語に従えば、王は蛇の筏に乗って東の方に去ったのではなくて、葬式の薪を積み上げて、その上に横たわって、自ら火を放って灰となり、そしてその灰は空に舞い上がって、輝かしい羽根を持ったたくさんの鳥になったといわれる。また一部のメキシコ人の信ずるところによれば、ケツァルコアトルが死ぬと、新しい星が空に現われるようになったので、彼らはケツァルコアトルを呼んで「曙の主」としたということである。さらに他の物語の伝えるところでは、ケツァルコアトルが死ぬと、四日間その姿が見えなくなった。その間彼は下界に降っていたと

信じられた。それから暁の明星が天空に現われた。それはケツァルコアトルが死から回復して、神として天界の玉座にのぼったことを示すと信じられた。

(7) この物語は、ケツァルコアトルに関する一種の後日譚とも見るべきものである。ある神もしくは英雄の信奉者たちは、その神、その英雄が悲しい運命に陥ったことを説く物語をそのままに受け入れることが出来ぬ。何とかしてその終りをよくしようとこいねがうものである。ギリシア神話において、クロノス神はゼウス神との戦に破れて惨めな地位におしおとされた。クロノス神を信奉するギリシア南部の農民たちは、こうした神話が北方から南下して来たアカイア族によって産み出されたのを遺憾として、自分たちの手でその後日譚を作り出した。その物語に従えば、クロノスはゼ

ウスとの戦に破れた後、海中の島に去って、そこに幸福に満ちた楽土を拓いたというのである。アーサー王も、叔父モルドレッドとの戦に痛手を負って、アパロンの仙郷に退いてしまったといわれる。しかもケルト民族は、彼らの景仰する英雄の物語にそうしたあっけない大詰を与えることを欲しないで、アーサー王はアパロンにいつまでも生きつづけて、彼らが敵に悩まされる折には、たちまち出現して、敵勢をうち退けてくれるという後日譚を作り出した。ケツアルコアトルに関する後日譚も、こうした民衆心理の産物でなくてはならぬ。もしそうだとするならば、この物語は、恐らくケツアルコアトル神を信奉することの篤かったトルテカ族の間に生まれたものであるう。

(8) ルイス・スペンス氏のいうところによ

ると、昔のメキシコ人はあまり星を崇拜しなかったらしい。ただ金星だけは、シトラルポル（「大きな星」のこと）もしくはトラウィスカルパンテクトリ（「曙の主」のこと）という名の下に、かなりの尊崇を払っていた。メキシコの一個の大きな殿堂の広間に、イルウィカトラン（「空中」のこと）と呼ばれた一本の柱があって、その上に金星の象徴が描かれていた。そして金星が空に現われると、幾人かの奴隸たちをこの柱の前に引き出して、金星へのささげものとしたと言われる。

メキシコの絵文字に表われた金星は、真白い体をして、その上に長い赤筋が幾本となくはいっている。体の色の白いのは、金星から放射される異様な光を表わしており、幾本かの赤筋は、その白い色を強調するため工夫されたものであらうと解され



る。それから双の眼のまわりには、仮面舞踏会の折につける面のような黒い隈取が描かれ、唇は華やかな朱色をしている。黒い隈取は夜の空の暗さを表わすといわれるが、唇の赤いのは、何を示すか分明でない。

トラウィスカルパンテクトリとしての金星は時として髑髏の顔をしていることがある。金星は太陽のあとについて下界に降って行くと信じられた。髑髏の顔はそれを標徴するのであろうといわれる。

上に挙げた神話——ケツアルコアトルが金星に変わることとを説く神話が、ナワ族がメキシコの先住民から金星の崇拜を学んだ以前のものであるか否かは、にわかに確言し難い問題である。なぜならこの神話は、ナワ族がメキシコの地に勢力を張るようになった時代より以前に生まれたとも考えら

れるし、以後に生じたとも考えられ得るからである。しかしとにかくメキシコにおいては星に関する神話が少ないから、この物語の如きははなはだ貴重な資料であるといわなくてはならぬ。

(9) アルベル・レヴィユ氏は、その著「メキシコ及びペルーの土俗宗教」において、この神話を解釈して、トラソルテオトルは、雨と水との神トラロクの妻として、本来沼沢地に生えている水生食用植物であったに違いない。かくて彼女が、トラロク神の手からテスカトリポカ神に奪われて、その姿を隠したということは、太陽が沼沢地を照りつけてその水を乾かし、その植物を無くしてしまうという自然現象を意味するものであるといっている。自分はこの解釈を受け入れることが出来ぬ。なるほどトラロク神は水に関係が深く、テスカトリポ



カ神は太陽に關係が深い。しかしトラソルテオトルが、沼沢地の水生食用植物であつたということは、單なる推測に過ぎないではないか。自分の考えでは、上に挙げた神話は、自然現象を説明する物語であるといふよりも、むしろ自然民族の間における人事現象の一反映であらうと思われる。いかなる自然神といえども、それが人格的に觀ぜられるようになった以上は、人間世界に行なわれるさまざまの現象が類比的にそうした神々に結びつくのは当然である。神々といえども、人間と同じように戦争をしたり喧嘩をしたり戀愛をしたりするのは、何も怪しむに足らぬ。そうした行動に一々自然現象的な意義を見出そうとするのは、はなはだ無理である。トラソルテオトルは、愛欲の女神であるではないか。そして次の神話が示すように、隱者を誘惑してこれを

墮落させているではないか。彼女がテスカトリポカ神と墮落ちをしたとて、何も不思議なことではなからう。

(10) この物語は、アルベル・レヴィユ氏が、一七四六年にスペインのマドリッドで出版されたボツリニの「北アメリカ全史の觀念」(*Idea de una nueva historia general de la América Septentrional*)の中から引いたものである。この神話に現われたトラソルテオトルは、その媚態と淫蕩とにおいて、古典神話におけるアフロディテもしくはヴィナスに類似しているといふよりも、むしろキリスト教によってその性情を墮廢せしめられたヴィナス——すなわちヘルゼルベルグ山の洞窟に潜んでいたと称せられるヴィナスに酷似している。彼女は洞窟の中で怪しい歌をうたつて、男性の心をとろかすことに努めた。その歌を耳に

したものは、目に見えぬ魔力に引きつけられて、ふらふらと洞窟の中に入り込んで行く。そしてそこで爛れたような肉欲の生活に浸らざるを得なかった。中世紀の伝説に名高いタンホイザの如きは、その最も著しいものの一人である。

(11) この神話が示すように、祭りの儀式をなおざりにしたものが、オマカトル神から受ける罰は、いつも胃腸の病であった。これは実に興味ある示唆を含んでいる。この神の崇拝者たちは、貴族富人等の上流階級に限られていた。言葉を換えていえば、閑が多くて美食に耽る階級の人々だけであった。だから宴楽と歓喜とお祭り騒ぎとの神であったオマカトルを祭るときには、思いきって盛んに飲みかつ食うのが常であった。その結果胃腸を痛めるものが続出したことは想像するに難くない。オマカトル神

の降す罰がいつも胃腸病であるということ、この事実の説話的反映であるに違いない。

(12) 死後の生活をこの世の生活以上に大切なものと考えたエジプト人は、「死者の書」というものを持っていた。どうすれば、死後安穩無事な生活を送ることが出来るかを説いたものである。昔のメキシコ人も、一種の「死者の書」ともいうべき書物を産み出している。それは今バチカンに蔵されているそうであるが、上に挙げた物語は、この書物の最後の数頁に記されているのである。

メキシコ人の信仰によると、人が死ぬと、靈魂がその口から脱け出す。脱け出した靈魂は、テスカトリポカ神（アステカ族の神々の中の主要なもので、ギリシア神話におけるゼウス、ローマ神話におけるジュ

ピターに当る)の前に導かれて、木でこしらえた軛を頸にかけて、裸でその前に立つ。テスカトリポカ神は、いろんなことで靈魂を試したあとで、初めて冥府に送りやるのであった。

### マヤ族の神話伝説

(1) トヒルは、キチエ族の火の神もしくは雷の神であろうといわれる。この神が脚と脚とを摩り合わせて火を出すという考えは木と木とを摩り合わせて火をつくる蛮人の風習から思いついたのであろう。

(2) この神話は、キチエ族が寒い北方から暖い南方に移住した史的事実を反映している。こうした移住神話は、多くの民族の間に見出される。そしてそれらの物語は、荒唐な要素を多く含んでいるにも拘らず、ほとんど常に、その民族の移住史の片影を閃かしているものである。

インディオは、おのが部落の宝として、神聖な巻束を有し、これを目して、部落の盛衰に深い関係のあるものとしている。

(3) トラチトリという遊戯は、昔の中央アメリカで極めて人気のあった一般的な遊戯であった。この球遊びに使われた球庭の跡が、今でもユカタンやグアテマラ地方にくさん見出されるそうである。

シュキクが、大地からとうもろこしを生え出させたことは、すこぶる興味ある事実である。彼女は下界の王女である。そして下界の神は、植物生成の現象と密接な関係を持っているというのが、低い文化階級の民衆に普遍的な信仰の一つである。ギリシア神話におけるペルセフォネ女神の如き、その好適例である。シュキクも下界の王女として、植物を生成させる力を持っていたのである。そして生成させた植物がとうもろ

こしであったことは、メキシコ地方の住民の主要な食物がこれであったからと解すべきであろう。

(4) 双生児の神がつぎつぎに投げ込まれた「暗の家」「槍の家」「寒気の家」「虎の家」「火の家」「蝙蝠の家」などは、日本神話における「蛇のむろや」「百足のむろや」——すさのおのみこと 大国主命が素盞鳴尊に閉じこめられた室屋を想起させ、しかしそれにもまして類似しているのは、ダンテの「神曲」における地獄のもろもろの相でなくてはならぬ。

ある神もしくは英雄その他が冥府を訪ずれて、この暗い世界を荒し回るといふ筋の物語は、多くの民族の神話に見出される。ギリシアの神話では、ヘラクレスが、冥府の王プルトーを傷つけたり、冥府の怪犬を明界に引きずり出している。ポリネシアの

神話では、マウイが、死界荒しの役を演じている。アメリカインディアンのアルゴンキン族の神話では、かけすが、妹のイオイを尋ねて冥府に行き、死界の人々を翻弄している。日本の民間説話でも、軽業師と居合抜きと陰陽師とが地獄に行つて、おのおの得意の技で閻魔大王や獄卒どもを苦しめている。こうした説話を発生させる心理を考えると面白い。自然民族にとっては、死界は賞罰の厳しく行なわれる世界ではないが、とにかくものすごい恐ろしいところである。だから何とかして心的にこれを征服したいという欲求が強く起こる。彼らがさまざまな人物を冥府に送つて、この恐ろしい世界を荒し回らせるのは、すなわちこうした心理の説話における一つの現われであると解すべきであろう。

シュシバルバという冥府は、単に死人の



赴く世界であって、罪惡に対する責罰の世界としての地獄ではない。シュシバルバの支配者は、生前の行為の善惡によって、死人の賞罰をつかさどる神ではなかった。「ポポル・ヴフ」の一転写者の言葉にあるように、

「昔にあっては、冥府の支配者は大した権力を持っていたはいなかった。彼らは単に人間を苦しめたり煩わしたりするものに過ぎなかった。実際彼らは神とは見なされなかった」

のである。シュシバルバという語は、「恐れる」という意味を表わす語根から抽き出されたものである。従ってシュシバルバは、ルイス・スペンス氏がいつているように、多くの危険を含んでいる暗い恐怖の地に過ぎなかった。

上に挙げた冥府シュシバルバの神話に

は、若干の文化史的事実が織り込まれているらしい。ある民族が、他の民族の住地に侵入して、これを征服した場合、被征服民族の残余が、人里に遠い森林や谷地などに逃げ込んで、怨恨の眼を光らせているのは、ありがちの現象である。そしてこうした経験を持った民衆が、それらの逃避民を目して、多少とも超自然的な力を具えた、恐ろしい世界の魔物となすのも、極めて自然な心理でなくてはならぬ。これらの逃避民は、征服民族とは、はなはだ異なった宗教的儀式風習を持っている。そして彼らの目をさけて、暗いところに出没し、見つければ、亡霊のようにたちまちその姿を隠す。こうした事実が相合して、ますます逃避民に魔的冥府的な要素を与えて行く。マヤ・キチェ族が、グアテマラ地方に侵入したとき、彼らは実際に方々の山腹の洞窟に



逃げ込んだ被征服民を見たのであった。マヤ・キチエ族の心に生まれた冥府シュシバルバの表象の構成には、こうした洞窟の姿があずかって力があつたと思われる。

(5) エメラルドの歯と、黄金白銀に光り輝く体とを持ったブクブ・カキシュは、有史以前の日月神であると、ゼラー博士は解釈しているが、自分はこの解釈に疑いを持っている。日月神が、天界における他の神々と不和であるという考え方、日月神が巨魔として、他の神々から退治されるという考え方は、自然民族の間にあつても、すこぶる変妙だといわねばならぬ。ブクブ・カキシュの二子シパクナとカブラカンは、ギリシア神話におけるタイタン族や、北欧神話におけるヨーツン族の型の巨魔であるが、恐らく地震の巨人であろう。双生児のフン・アップとシュバランケとは、疑いもなく多

くの民族の神話に現われる人文的英雄神である。人類の生活を脅かすものを除去し、人類の幸福を増すものを誘導することを、おのれの職能とする神である。

(6) ルイス・スペンス氏にいわせると、この神話の解釈は決して困難ではない。老女は疑いもなく雨の女神であり、小人は宇宙を衣す卵から現われ出た「太陽の人」である。ユカタン地方では小人は太陽の神に神聖なものであつて、時としては同神に犠牲としてささげられたというのである。自分はこの解釈に対して若干の疑いを持っている。この物語は神話というよりも、むしろ一個のメルヘンである。グリムなどに現われる型のメルヘンである。その中に見出される人物を神々と解するのはどうであろうか。メルヘンを目して神話の頽廢した形式となすいわゆる「神話渣滓説」や、この学

説に基いて、メルヘン中の人物をある神に還元することによって、物語の意味を解こうとするいき方——すなわちかのシャルル・プロワ氏が「民譚における超自然的要素」(Charles Ploix, *La Surnaturel dans les Contes Populaires*) において主張した学説や解釈法は、今日ではもうほとんど一顧の価値もなくなっている。

(7) この伝説は、コゴルドの記録に載っていたものである。チチェンの人々が、おのれの市を棄てて他に移ったのは、紛れもない事実である。しかし市を棄てた理由が、上に挙げた伝説の説くように、カネク王とユカタンの若者との美女の争いであったかどうかということは、今日のところ明らかになっていない。

## インカ族の神話伝説

(1) アポ・カテキルが投げ飛ばした石は、

畑地の作物を豊かにし、人の心に情火を燃えたたせる力があるとして、各村がこれを大切に保存している。

(2) この神話は、次に来る神話——インカ人をマンコ・カパックから出たとする神話と矛盾する。恐らくこれら二種の神話は、異なった時期の司祭たちによって産み出されたものである。

(3) 最初の人類が、大地の中から現われて来たという観念は、ペルーの諸民族がもと洞窟生活をしていたという事実から生まれ出たものである。(Payne, *History of the New World Called America* 参照)

人類創造はマンコ・カパックによってなされたという神話の外、パチャカマックによってなされたという神話も存している。そしてマンコ・カパックもパチャカマック

も、土をこねてこしらえた土偶に生命の息を吹き込んでこれを生きて動くようにしたというのであるが、これはペルー人にとっては原始的な考え方ではない。ペルー人にとっては、古くは、意欲すること、思想すること、もしくは意欲または思想を言葉に表わすことそのものが、一つの創造的な行為であると信じられた。旧約聖書に、エホバが世界創造の意欲を表わす言葉「光あれ」その他によって、光を出したり、大空を造ったり、水と水を分ったり、大地をあらわしたり、草や木を地に出したりしたと記してある。いわゆるロゴスの偉大なる霊能力の作用が現われている。ペルー人の創成に関する信仰もこれと同一であった。神は土を材料として人間を造らなくても、おのれの意欲によって「無」から「物質」を進展させる力を持っていたと信ぜられ

た。インカ族の祭儀や造物者に対する祈りの文句の中に「男あれ」「女あれ」などの表現が見出されるのは、そうした消息を伝えていたものでなくてはならぬ。

(4) ペルーの神話伝説には、リヤマがしばしば重要な役を演ずる。これは、リヤマがペルー人の日常生活に大切な動物であった事実の反映である。

(5) パチャヤチャックという辞の意味が何であるかは、今日のところ正確にわかっていないようであるが、あるいは「万物の創造者」を意味するのではあるまいか。パチャという辞は、英語の“things”に当る。そしてこの語は、ペルーの民衆によってしばしば「世界」の意味に使われる。

(6) クスコという辞は、他のところで述べたように「臍<sup>へそ</sup>」を表わす辞から出たものである。すなわちインカ人たちは、クスコ

をもって世界の中心とも考え、また文化の始まった中心とも考えていたのであった。

この伝説において、人文的英雄マンコ・カパック夫婦が、人間たちに文明の技を教え始めた地がクスコとされているのもこうした考えから来ているのである。

(7) トナパは、いわゆる人文的英雄神の一人である。ペルーの民衆に文化的に価値のある事物を教えたと信じられる神である。

この神の本体は何であるか。ルイス・スペンス氏は、トナパが最後に海のかなたに消え失せたという点から推して、一つの太陽神であろうといている。あるいはそうかもしれない。しかし一般にこうした人文的英雄神は、ある民族の間に実際に存在して、その民族のためにさまざまな生活上の利益を計ってくれたものの高貴化、偉大化から生まれるものである。トナパもこうした経

路をとって現われたものではなからうか。海のかなたに消え失せたということも、太陽が海波の間に沈むという自然現象を表示したとするよりも、こうした特殊人の最後を奇怪にし栄光あらしめる手段であると解したいような気がする。

(8) 四人の兄弟は、ペルー人の四つの異なった宗教組織を初めてこしらえ上げた人物と信じられた。そして上に挙げた伝説は、後代のインカ族の僧侶が、ペルーにおける四つの異なった時期の宗教の消長交替を説明するために考え出したものであろうといわれる。すなわち一番年上の兄は、ペルーにおける最も古い宗教を代表し、次の兄は、呪物教的な石崇拜の宗教を代表し、三番目の兄は、ピラコチャの宗教を代表し、そして末弟は、純然たる太陽崇拜の宗教を代表するであろうと考えられている。但し

これを物語の形式の方から見ると、諸民族の間に広く見出されるところの「末子成功説話」の型——末子相続制という、低い文化階層における社会制度が産み出した物語形式を示している。

(9) ペルー人は、古い時代に灌漑の術を考え出している。ペーン氏の「新世界史」などを繙いたものは、農作物を養うための水渠が早くからかなり発達していたことに気がつくであろう。上に挙げた伝説は、そうした水渠組織の起原を説明するために生まれたものに違いない。そして本来は一個の地方伝説に過ぎなかったものが、水渠に自分たちの経済生活の原動力の一つを認めたペルー人によって、あまねく国内に語りつがれるようになったのであろう。



## メキシコ、ペルー神話伝説集 解題

松村 武雄

「アメリカは歴史無き大陸である」ということは、今では笑うべき妄語となった。ヨーロッパの人々の渡来に先つこと幾世紀の前、すでに中央アメリカ及び南アメリカは、優れた文化の一星座であった。メキシコ及びペルーがすなわちこれである。これらの地には、怪奇華麗な芸術と、峻烈凄惨な宗教と、想像や色調において、「千一夜譚」を偲ばせるような豊富さ贅沢さを持つ神話伝説が花を咲かせていた。メキシコにおけるトルテカ族、アステカ族及びマヤ族、ペルーにおけるインカ人（ケチュア族とアイマラ族）の神話伝説は、ギリシャ人や北欧人のような高級な文化民族が産み出した高華な物語と、野蛮未開な自然民族が産み出した素朴野拙な物語との間をつなぐ説話的橋梁として、両者のいずれとも異なった色彩と音調と内容とを持っている。この意味において、メキシコ及びペルーの神話伝説は、説話界にそびえる三大標柱の一つを形成するという特色を具えていると見なくてはならぬ。

メキシコ及びペルーの民族の歴史、彼らが産み出した文化等については、それぞれ本文に詳かに説いて置いたから、ここに喋々する必要はない。ただ一言して置きたいのは、これらの民族の言語の発音である。神話や伝説には、神の名や人名地名などがしばしば現われる関係上、どうしてもこの点を明らかにしなくてはならぬ。ところで中央アメリカの諸民族の間にあっては、その

言語はいずれも同族語であるに拘らず、発音に至っては、時に著しい差異がある。Xがエックスと発音せられたり、シュと発音せられたりする如きその一例である。自分はルイス・スペンス氏に従って、それぞれ異なる発音を書き分けて置いた。読者は同一の文字<sup>レター</sup>が、時に異なった発音に表されているのを見て、妄りに怪しまないようにしなくてはならぬ\*。

メキシコ及びペルーの神話伝説を編著するに当って、自分が用いた書物は、

- (1) Brinton (D.G.), *Myths of the New World*.
- (2) Brinton, *American Hero-Myths*.
- (3) Markham (C.), *Rites and Laws of the Incas*.
- (4) Müller (J.G.), *Geschichte der Amerikanischen Urrigionen*.
- (5) Payne (E.J.), *History of the New World called America*.
- (6) Réville (A.), *The Native Religions of Mexico and Peru*.
- (7) Spence (L.), *Myths of Mexico and Peru*.
- (8) Spence, *Mythologies of Mexico and Peru*.
- (9) Spence, *Dictionary of Non-classical Mythology*.
- (10) Waitz (Th.), *Anthropologie der Naturvölker*.

等である。就中主として用いたのは、ルイス・スペンス氏の著作であった。氏の著書は専門的ではない。通俗書の高級なものである。だから科学としての立場からいえば飽き足らぬところも少

なくないが、自分たちが「神話伝説大系」で狙っている程度にはぴたりと合っているので、主としてこれに拠ることにしたのである。

\*    本文庫では個有名詞の発音表記は、現在行なわれている形に訂正統一したので、原語のつづりは省略した。



## メキシコの神々と神話伝説について

小池佑二

## (一)

メキシコ共和国の中央部から東部のユカタン半島、南部のオアハカ州やチアパス州にかけて、さらにグアテマラとホンジュラスにまたがる地方は、文化的な領域としては「メソアメリカ」と呼ばれている。スペイン人による征服（一六世紀初頭）以前には、地域ごとにそして時代ごとに幾多の文化が発展し、滅んだのであったが、それらは皆、トウモロコシを主要な食糧源とするなど様々な面で共通の特徴をそなえていた。中でも、メソアメリカの「母なる文明」と称されるオルメカ文化の誕生したメキシコ湾岸地方、サポテカ文化やミシュテカ文化が盛衰を繰り返したオアハカ盆地、テオティワカン、テノチティトラン（アステカ王国の都、現在のメキシコ市）といった大都市を生んだ中央高原地方、ティカル、コパン、ウシュマル、チチェン・イツァー、パレンケなどの祭祀センターの栄えたマヤ地域には、現在もなお往時の壮大な建造物が残されていて、我々の目を瞠らせる。これらの文化は宗教の面でも、地域差と歴史的な変遷は認められるも



のの共通の要素を数多く有していた。

まず第一に、メソアメリカの社会では宗教は極めて重要な役割を担っていたといえる。その影響は人々の生活のあらゆる側面にまで及んでいた。いわゆる古典期（三～九世紀）までは神官階級が世俗的な権力をも行使し、後古典期（一〇世紀～一六世紀始め）以降、軍人の勢力が増大したにもかかわらず、神官の権威はけっして失墜することがなかった。自然現象を司る神々がトウモロコシや豆などの作物の豊作を保証していたからで、人々は仲介者の神官に依存せざるをえなかった。このような呪術的な性格とともに、アニミズ的な性格も強く、太陽、星、火などの自然の物体を拝み、神々をなだめるために荘厳な神殿を築き、生贄と供物を欠かさず、時には肉体的な苦行をも実践した。

人身御供の風習は古代民族の間に広くみられるが、時代を経るにつれて人間の代わりに動物や供物を捧げるようになっていく。だが、メソアメリカでは各地で人身御供はたとえ小規模であれ続けられた。中でもアステカ族はその領地が拡大するにしたがいますます大量の捕虜や奴隷を生贄にしたことが知られている。都テノチティランで一四八七年に大神殿が完成した際に催された祭では数日間に何千人もの生贄が捧げられた。メキシコ中央高原の人口は一五世紀に急速に増大し、飢饉も頻繁に起こったので、人身御供は、人口を調節するためまた蛋白源を補うための、生贄という形式をとるカニバリズム（食人風習）であったと主張する者さえいる。生きた心臓を太陽に捧げ新鮮な血を神々の像に塗りたくる儀式は、現代人の我々からみれば極めて残酷で信じ

がたい行為のように思われるが、夜間に闇の世界で戦い翌朝再び東の空から昇るのに必要な活力を太陽に与えねばならないと考えたアステカ族にとっては大切な事柄であった。生贄にする人間は戦争の際の捕虜が最適と考えられたので、隣接する部族との間で戦争（「花戦争」と呼ばれた）を行なって互いに捕虜を得たほどである。

次に、メソアメリカの宗教の特徴として二元論的な性格が挙げられる。創世神話において男性と女性をそれぞれ代表する神格が宇宙と人間を創造している。そして、自然を昼（光）と夜（闇）、善と悪、生と死などの対立する神々の間の永遠の戦いの場としてとらえる傾向が強い。また、現在の人類が誕生する以前に世界が嵐や火の雨や洪水によって何度か滅んだことを信じていた。その他に、天上と地下の世界がこの世界のはてに存在すると信ぜられ、現世での行ないいかんによって死後に住む世界が定められた。生贄に捧げられた者、戦死者、そして出産の際に死んだ女はそのまま天国に行けるのであった。

神々の中には、部族神やケツアルコアトルのように伝説上の偉大な指導者も含まれるが、大部分は一般大衆の生業である農業に深くかかわるものと、神官階級が体系化した公式の神々の二種類に分類することができると。もちろん、商業の神とか音楽の神とかいうような特殊な集団を守護する神格も存在した。マヤ族の間では暦の計算がことに重視されたので、月や日を支配する神さへあった。また、メソアメリカの人々は他の部族の神々に対し寛容で、例えばアステカ族は征服した地方の神を都に持ち帰り、自分たちの神々の列に加えたほどである。

一つの神に多くの属性が与えられ、各種の機能をそなえるに至ったのも、メソアメリカの宗教に見られる特色である。これは長い歴史と様々な文化の融合のせいであつたろう。同一の神が部族によって別の名前と呼ばれることもある。絵に描かれる時もいろいろな姿で表わされ、特定の動物（ジャガーや蛇）の特性を具有している例も多い。猫科の動物のモチーフは最初オルメカ文化（紀元前第一千年紀）に出現し、テオティワカン文化（紀元前一世紀～紀元後七世紀頃）、そしてトルテカ文化（一〇～一二世紀）に受け継がれている。蛇のモチーフはオルメカ文化にも少し見られるが、テオティワカン文化に明瞭に現われ、アステカ文化（一四世紀～一五二一年）においても多用されている。

## (二)

メソアメリカで最古と考えられている神は、火の神と雨（水）の神である。雨の神は、農耕文化の成立に伴って生まれた神で、風や雷などの自然現象とも結びついている。ナワ系諸族（トルテカ族、アステカ族など）によりトラロク、マヤ族によりチャク、サポテカ族によりコシホと呼ばれた。中央高原では、髯<sup>ひげ</sup>状の房飾りをつけた口と、輪で囲まれた大きな目をもつ姿に表わされる。マヤ地域では、長い鼻、口から垂れ下がる捩れた二本の牙、T字型の目を有している。前者は、オルメカ文化の石彫・土偶にみられる人もしくは神の顔から進化してできたものと思われ、後者の長鼻の神もやはり、オルメカのジャガー神に由来すると推定される。チャクは、四つの方

角を表わす神格から成り立っている。東はチャク・シブ・チャク（赤い人）、北はサク・シブ・チャク（白い人）、西はエク・シブ・チャク（黒い人）、南はカン・シブ・チャク（黄色い人）の四人である。マヤのプウク様式の建物の壁面にみられる、曲った長い鼻を持つ顔はチャクのものであると考えられている。絵文書の中で最も頻繁に現われる神もこのチャクである。テオティワカン文化では、壁面石彫や翡翠の容器、土器などに雨の神の顔が象られ、アステカ期にも都テノチティトランの大神殿に、部族神ウィツィロポチトリとともに祀られている。メキシコ市の国立人類学博物館の入口脇に巨大なトラロクの石像が安置されている。この像は重さが一六八トンあり、テオティワカン期に彫られたもので、もとはコアトリンチャン（メキシコ市の東方二五キロメートル）にあったのだが、一九六四年に博物館が完成した際に運ばれてきたのである。トラロクは、グアテマラ、ホンジュラス、エル・サルバドルなどの遠方の地にも出現し、極めて広範な地域で崇拝されていたことがわかる。

水の神チャルチウトリクエ（正しくは、チャルチウクエイエ——「翡翠のスカート」の女）は、トラロクの妻で、ケツアルコアトルの母であったと伝えられる。テオティワカン遺跡内で、この女神の大きな石像が発見されている。

もう一つの古い神は火の神で、アステカ族などの言語であるナワトル語ではウェウエテオトル（「年老いた神」と呼ばれた。頭や背に火桶を載せ、顔に皺のある老人の坐像として表わされるのが常である。クイクイルコ（メキシコ市南郊にあった祭祀センター、紀元前六～二世紀）、テ



オティワカン、ベラクルス州のセロ・デ・ラス・メサスで発見された像が有名である。古代社会において火が重要であることは明らかな事実で、メソアメリカでは火の神は第一番目の神で、他の神々の生みの親であるとも考えられた。祭りの際に常に一番最後に崇めるのはこの火の神で、それは、年老いているので大層ゆっくり歩いて来ると思われたからである。アステカ族は、五二年の周期の終わりに宇宙の存続を祈願して「新しい火」の儀式を都の南方にある「星の丘」で執り行なった。神官たちがそこで生贄を捧げるとともに火錐で火を起こし、新しい火を各家庭に配ったのであった。

アステカ族の神話によれば、宇宙を創造したのはオメテクトリ（男性の創造神、別名トナカテクトリ）とオメシワトル（女性の創造神、別名トナカシワトル）であった。天上の世界は一三層に分かれていたが、この二名がオメヨカンと呼ばれる最高位の二層に住んだ。オメテクトリとオメシワトルはまた、他の神々をも生み、地球を鰐のような怪物の背の上に創造した。だが、この一對の神は人間自体とは特に関わり合いを持っていない。やはり神となった四人の子供がいたが、その名前は記録者<sup>クロニスタ</sup>により異なる。四人ともテスカトリポカと呼び、色分けしたに過ぎない場合もある。その四人とは、青いテスカトリポカ（ウィツィロポチトリもしくはトラロク）、赤いテスカトリポカ（シペ・トテクもしくはトナティウ）、白いテスカトリポカ（ケツァルコアトル）、そして黒いテスカトリポカ自身である。色は順番に南、東、西、北の方角をも表わしている。

メソアメリカで最初に祭祀センターを築いたオルメカ文化において崇拜されたのは、ジャガー



と人間を融合した顔を持つ神格であった。上唇が厚く牙を生やしているのが特徴で、俗に「ベビー・フェイス」と呼ばれるのもこれに含まれる。そして、このジャガー神は各地に波及し、石彫、土器、土偶にその影響を留めている。ほぼ同時代のチャビン文化（ペルー北高地）にもジャガー神が登場していることは大変興味深い事実で、恐らく中米と南米の間に間接的な接触があったためであろう。

オルメカのジャガー神にいかなる属性が付与されていたのかは想像の域を出ないが、神官の権力と威信を誇示する働きがあったに違いない。前述のように、雨の神トラロクの表象もこのジャガー神に関係があると説く人もいる。

一方、蛇は「羽毛の蛇」としてテオティワカン文化にはっきり現われてくる。古代民族の間で蛇が神聖視されるのは珍しくはないが、メソアメリカ（特に中央高原）では、珍重されたケツァル（熱帯産の尾長きつつき、もしくはその羽毛）と結びついて崇拜されたのであった。このケツァルコアトルは農業と文化の神で、羽毛の生えた蛇の姿で表わされ、さらには風の神、暁と宵の明星の姿をもとる。テオティワカンには「ケツァルコアトルの神殿」が建てられ、トルテカ文化やアステカ文化でも羽毛のある蛇の石彫が多く残されている。マヤ地域には、一〇世紀頃トルテカ族がケツァルコアトル神の信仰をもたらし、ここではククルカン（マヤ語で「羽毛の蛇」と呼ばれ、チチェン・イツァー遺跡（ユカタン州の州都メリダの東方約一二〇キロメートル）などにこの神を祀ったと伝えられる神殿が造られている。

ケツァルコアトルは、生命と豊穡を司る神で、神話学でいう文化英雄であるが、トルテカの伝説にこの名を冠した首長が登場する。その者はセ・アカトル・トピルツィンと呼ばれ、セ・アカトル（「一の葦」）の年——西暦九四七年か——に生まれ、後にショチカルコ（メキシコ市の南方約七〇キロメートル）で神官としての教育を受けて、トピルツィン・ケツァルコアトルと名乗った。伝説によれば、この首長は人身御供に反対し、供物は蝶や花に限るように主張した。そのためにテスカトリポカを信奉し人間の生贄に賛成する勢力との間に争いが生じ、結局は策略にかかり追放されてしまうのであった（本書の「蜘蛛の災い」参照）。最初に Cholula（メキシコ市の南東約九〇キロメートル）に逃れ、そこからメキシコ湾岸に出、東方の海の彼方に去っていったという。その際、いつか「一の葦」の日に再び帰って来ると約束し、「黒と赤の国」に向かったと伝えられる。この物語がどのような歴史的事実を反映しているかは不明だが、マヤの伝説によると、一〇世紀末に「ククルカン」という指導者がユカタン半島北部に侵入し、マヤパンとチチェン・イツァーの町を占拠し、後に西方に帰っていったという。マヤ地域以外にも各地にケツァルコアトルが出現したという伝説がある。トウモロコシ栽培を教えるなどメソアメリカの住民に文明を授けたケツァルコアトル神と、このケツァルコアトルと呼ばれた首長あるいはその名前で呼ばれた他の指導者とが混同された場合もあったろう。伝説や神話の中では神と伝説上の人物との区別が極めて曖昧になるからである。また、アステカ王国の征服者コルテスはメキシコに到着したのが「一の葦」の年（一五一九年）であったので、人々はケツァルコアトルの再来ではないか

と恐れ、その宿命論的な世界観が禍<sup>わざわい</sup>してコルテスに対し効果的に反撃する機会を失ってしまった。その結果、ほどなく都テノチティランは陥落しアステカ王国は滅亡したのである。

トルテカの伝説の中でケツアルコアトルに敵対した人々の信奉した神はテスカトリポカであった。この神の名は「煙を吐く鏡」を意味し、様々な姿をして現われ、全能・遍在の神であった。夜の神であるが、月や星また破壊をもたらす邪悪な闇の怪物に力を貸し、泥棒や呪術師の守護神ともなった。そして、ケツアルコアトルのライバルであるのみならず、ウィツィロポチトリの敵でもあった。ジャガーによって象徴されたが、それは、ジャガー（アメリカ豹）の皮には夜空の星のような斑点があるからである。別名として、ヨアルリ・エヘカトル（「夜の風」、チャルチウトリン（「美しい七面鳥」、イツトリ（「黒曜石のナイフ」、ネサワルピリ（「断食する王子」、テルポチトリ（「若者」）などがある。罪を罰し、復讐を行なう善なる力を持ち、善と悪、生命と破壊という矛盾した機能を兼ね備えた神格である。顔は黒色と黄色の縞模様で描かれ、大地の神に片足をもがれていたの、そこに煙を吐く鏡をつけ、世界中の出来事をその鏡の中に見ることができるといわれた。

アステカ族の部族神ウィツィロポチトリは、太陽、戦争、狩猟の神で、その語源はしばしば「南の蜂鳥」などと解釈されているが、正しくは「蜂鳥の左足」であると考えられる。この神は、太陽が死滅することのないように闇の神々を追ひ払う戦士であったので、人々は人間の生きた心臓を捧げた。アステカ族が北方の地からメキシコ盆地にまで移住して来る途中絶えず導き守護し

た神で、都テノチティランを建設し始める時も、このウィツィロポチトリの神託に従ったのであった。絵では、蜂鳥の頭の形をした頭飾りをつけ、房が五つついた盾を構え、槍もしくは弓矢を携えている。女神コアトリクエの子として生まれた。この大地と豊穡の女神コアトリクエ（「蛇のスカート」は星と月の母で、その名前の通り振れたスカートをはいていた。本書の「腹の中の神」にも記されているように、ある時突然天から羽毛の小さな玉が降ってきて、それによりウィツィロポチトリを身籠ったのである。ウィツィロポチトリは結局、四〇〇人の兄と姉コヨルシャウキを殺してしまい、彼らは天に昇ってそれぞれ星と月になったという。このコヨルシャウキは、近年一大発見がなされたおかげで、脚光を浴びた。その発見というのは、この女神を象った石盤（直径約三メートル、厚さ二五センチメートル、重さ八トン）が一九七八年二月末にメキシコ市の中央広場近くにある大神殿の遺構の一角から偶然出土したことをさす。

シペ・トテクは青春と豊穡の神で、人身御供を司るので、その名「皮をはがれた我らが神」が生まれた。太陽暦の三月にこの神の祭礼を執り行なったが、その際生贄として捧げられた人間の皮をはぎ、神官がその皮を身にまとして踊ったのである。「ヨピ」とも呼ばれるので、もともとはゲレロ州東部に住んでいたヨピ族の神であったかも知れない。金銀細工師の守護神で、また収穫を保証し、プルケ（竜舌蘭から作る醗酵酒）の神でもあり、メソアメリカの広い地域で崇拝された。

その昔、未だ弱小であったアステカ族は祭礼の折に、特別の名誉を与えると称して近隣の有力



な首長から娘を借り受けた。首長が祭りに赴いてみると、その娘は生贄にされアステカ族の神官がその皮を身にまとい踊っていたのである。アステカ族にとって、それは神と一体になることを意味し、大変な誉ほまれなのであったが、その首長は激怒し、兵士を送ってアステカ族を蹴散らしたという（本書の「乙女の犠牲」参照）。

ミクトランテクトリは地下の世界を治める神で、その名前は「死者の国の首長」を意味する。頭は頭蓋骨として描かれ、手にはやはり頭蓋骨か骨を持っている。この神と対をなすのはミクトランシワトル（地下を治める女神）である。アステカ族は地下に九層の世界があると信じていた。戦闘で死んだ者、生贄として捧げられた者、お産で死亡した女性は、「太陽の館」あるいは「トウモロコシの館」と呼ばれた天国に行けた。一方、雨の神や水の神のもたらす病気（癩病、水腫、リ्यूーマチ）に罹り死んだ者、雷に打たれた者、溺死した者、自殺した者は、トラロカン（「トラロクの国」という天国に行った。これ以外の死者はミクトラン（「死の国」）に行ったが、そこで罰を受けるためではなかった。ただ、八つの地下の世界を苦勞して通り抜け、最下層の世界に達するのであった（本書の「死人の旅」参照）。

マヤ族にもアフ・ピチと呼ばれる死の神がおり、地下の世界を治めていた。マヤの絵文書では、骸骨の姿をし、鈴を髪または首飾りにつけ、犬やフクロウを連れている。アステカ族と同様にマヤ族も地下には九層の世界があると信じていた。アフ・プチはその最下層を支配し、他にボロンテイク（「九人の神」と呼ばれる神も地下の世界を治めていた。この神は一体としてあるい



は別個の神として崇拝された。

### (三)

「アステカの暦」あるいは「太陽の石」と呼ばれる巨大な石彫は、一五世紀後半に作られた、アステカの暦と宇宙観を記した碑である。現在はメキシコ国立人類学博物館に収められており、彩色もわずかに残っている。もともとは極彩色で塗られていたのであろう。真中に太陽神（トナティウ）、その周りには過去に滅んだ四つの時代を象徴する豹・風・雨・水の図、および人間の心臓をつかんでいる爪、この外側にはアステカの暦の日を示す二〇の象形文字、さらに外側には翡翠の環、血を表わす環と太陽の光線、そのほか炎・蛇・星・金星が浮彫りされている。アステカの暦法や宇宙観は、他のメソアメリカの諸民族と共通点を多く有した。例えば、マヤ族は、すでに世界は三度洪水により滅びたと信じ、現在の世界もいずれ洪水によって滅亡すると考えていたように、その類似性は明瞭である。

さて、アステカ族の神話によれば、第一番目の時代——ジャガーの太陽——は、テスカトリポカにより創造された巨人の生きていた世界で、六七六年続いた後、テスカトリポカはジャガーに变身し人間を食べてしまった。第二番目の時代——風の太陽——はケツァルコアトルにより創られ、六七六年経つと激しい嵐が起こり人々を吹き飛ばした。生き残った者も猿になってしまった。第三番目の時代——（火の）雨の太陽——はトラロクが支配し、三六四年続くと火の雨が降

り人間は死滅した。生き残りも鳥に姿を変えた。第四番目の時代——水の太陽——はチャルチウイトリクエの時代で、三二二年後に洪水によって滅亡した。生き残った者も魚に変わってしまった。そして、現在の世界はケツァルコアトルが再び人間を創ることにより生まれた時代であるが、いつの日か飢饉と洪水が起こり最終的には地震で滅びることになっている。しかもその終末は五二年周期の終わりにやって来るのであった。先に述べた「新しい火」の儀式も、この第五番目の時代が終わることのないように祈るためのものである。

今述べたように、現在の人類は、前の時代の人間の骨をケツァルコアトルが回収し、自らの血をふりかけて蘇らせたもので、本書の「太陽の出現」にも書かれている通り、他の神々も自己を犠牲にした結果、第五番目の太陽が生まれたのである。それゆえ、アステカ族などのメソアメリカ諸民族は、太陽の運行には人間の生贄も欠かせないと考え、それを実践したと考えられる。

#### (四)

アステカ族は、一五世紀前半にメキシコ中央高原の覇者になり、この地域の神話や伝説を集大成した。一五世紀末にヨーロッパ人がアメリカ大陸を「発見」したことにより、その後の歴史は外部から大きく振じ曲げられることになった。一五一七年にはスペイン船が初めてマヤ地域に到達し、マヤ人と接触している。当時マヤ人は既に大都市を放棄して小さな首長国に分散して住んでいた。そのためかスペイン人はユカタン半島の奥地に最初は足を踏み入れなかった。エルナ

ン・コルテスに率いられたスペイン人（当初は七〇〇名ほど）が現在のベラクルス市付近に上陸したのは一五一九年のことである。間もなくベラクルス市の建設に着手し、また近隣の住民を味方につけて、西方にある未知の大国に向けて進撃を開始した。途中戦闘、虐殺を繰り返しながらやがてアステカの都テノチティランに到達した。コルテスは策略を用いて首長のモテクスマを軟禁し、多量の宝物をも我が物にしている。スペイン軍はアステカ族の抵抗に会い、一時的に都から逃がれたものの、一五二一年八月にはテノチティランを陥落させ、最後まで勇敢に戦った首長のクアウモクを捕虜にした。宗教が著しくアステカの社会生活を制約していたためか、宿命論的な世界観に支配されていたためかアステカ族はスペイン人侵入者に対し有効な反撃を加えることもできずに王国は短期間のうちに瓦解した。新しい「真実」の神が到来し、伝統の神々は少なくとも表面上は死に、インディオは集団でキリスト教への改宗を受け入れた。マヤ地域ではキリスト教の布教に対する抵抗は強く、奥地に逃げ込んだり武力で抵抗したりしたので全面的に改宗するのは中央高原と比べるとかなり遅く、一七世紀末の出来事である。しかも、スペイン人宣教師の情熱と努力にもかかわらず、各地で土着の信仰は部分的に生きのび、キリスト教の中に巧みに組み込まれたのであった。

さて、征服直後からスペイン人宣教師・官吏の中には、土着の文化に興味を抱く者が多数現われ、布教のために土着語（ナワトル語、マヤ語など）を学んだり、土地の古老をインフォーマント（情報提供者）に用いて土着の社会・宗教・歴史に関する記録を残したりしている。また、土

着の貴族・有力者などの子弟も宣教師にスペイン語を学んで、土着語（アルファベットを使い）あるいはスペイン語で自分たちの歴史を記した。これらの人々はクロニスタ（「年代記作者」と通例呼ばれるが、もちろんその「年代記」には自然や文化や宗教についての記述も含まれている。代表的な記録者として、中央高原地方に関してはサアグン（『ヌエバ・エスパニャ事物総記』、トルケマダ（『インディアス君主国』）、アルバ・イシュトリルショチトル（『歴史著作』）、マヤ地域に関してはランダ（『ユカタン事物記』）が挙げられる。その内容をみると、キリスト教の影響を受けて歪められた記述をしたり、歴史を過剰に美化したりするという欠陥が時にはあるものの、メソアメリカの古代文化の宗教・神話を知る上で欠くことのできない文献である。また、征服後に編纂されたものも含めて絵文書がかなりの数現存している。特に、マヤ系の三つの先スペイン期絵文書——現在はドレスデン、パリ、マドリッドにある——は、資料の乏しいマヤ文化を理解するのに貴重な記録である。これらの絵文書は、暦法・宗教を扱っているので、マヤの神々についての有益な情報を提供してくれる。もともと中央高原地方には簡単な絵文字しか存在しなかったし、マヤの象形文字も未だに部分的にしか解読されていない。そのために絵文書とか征服直後にアルファベットで記された記録に頼ってアステカやマヤの神話を分析、研究せねばならないのである。

植民地統治が本格的に軌道に乗ると、土着の社会は次第にその影響をこうむった。特にスペイン人のもちこんだ伝染病や苛酷な支配のために人口が急激に減少していった。多くの地域で一〇



○年の間に半分以上に減り、人口が増加に向かうのは一七世紀後半以降のことである。一九世紀の初頭にスペイン本国から独立するのだが、現在までの四世紀半の間に土着のインディオ社会はヨーロッパ文化の圧倒的な影響下に置かれ様々な面で著しく変貌してきた。その変貌の度合は、植民地化の歴史の浅いアフリカやアジアの各地域の社会と比べると甚だしいといえよう。

さて、ヨーロッパ文化と土着文化の衝突は宗教面において融合あるいは折衷と呼ばれる現象をひきおこした。その代表的な事例がグアダルーペの聖母信仰である。グアダルーペ寺院が現在建っている場所（メキシコ市北郊）は、かつて「テペヤカクもしくはテペヤク（「山の鼻」）」と呼ばれた丘の麓で、その丘にはトナンツィン——大地の女神（「我らが母」）——が祀られていた。ところが征服直後の一五三一年にこの丘で聖母マリアが土地の老人の前に現われ、この地に教会堂を建てるように命じたという。この事件は直ちに司教にも報告され、後に奇跡であると認定された。グアダルーペという名称は、スペインにある地名から採られているが、やがてここに寺院が建立され、褐色の聖母マリアが礼拝されるようになった。現代でもなお、メキシコ全土はおろか中南米各地からここを訪れる巡礼客は跡を絶たない。圧政と貧困に苦しむ民衆にとって大切な精神的拠り所となってきた。グアダルーペの聖母は、植民地統治におけるキリスト教土着化の典型的な例で、征服後に生まれた新しい神話とみなすことができる。

## (五)



メソアメリカの文化、中でも宗教についての著作は少なくないが、神話に関する研究はさほど多くない。古くは、編者の松村武雄氏が解題で挙げているものくらいで、その内容も必ずしも学術的とは言えない。最近の研究者としては、ロペス・アウステイン（ケツァルコアトルに関する研究）やレシノス（マヤ・キチエ族の神話・伝説である『ポポル・ヴフ』の研究・スペイン語訳）などがよく知られている。

メソアメリカの宗教・神話に関してさらに詳しくお知りになりたい方のために、最後に参考文献を紹介しておきたい。

Alva Ixtlilxóchitl, Fernando de

1975-77 *Obras históricas*, 2 tomos, México.

Caso, Alfonso

1953 *El pueblo del sol*, México.

1958 *People of the Sun*, Norman. (tr. by Lowell Dunham)

*Códice Chimalpopoca: Anales de Cuauhtitlan y Leyenda de los soles*

1975 Universidad nacional autónoma de México, México.

*Códice Ramírez*

1975 Editorial Porrúa, México.

Durán, Fray Diego

1967 *Historia de las Indias de Nueva España e Islas de Tierra Firme*, 2 tomos, México.

*Historia de los mexicanos por sus pinturas* (García Icazbalceta, ed.)

1891 México.

Landa, Fray Diego de

1959 *Relación de las cosas de Yucatán*, México.

1941 *Landa's Relación de las cosas de Yucatán*, Cambridge, Mass. (Tozzer, Alfred M., tr. & ed.)

1982 『ユカタン事物記』 林屋永吉訳 岩波書店

León-Portilla, Miguel

1963 *La filosofía náhuatl*, México.

1963 *Aztec thought and culture*, Norman. (tr. by Jack Emory Davis)

*El libro de los libros de Chilam Balam*

1963 México.

1981 『マヤ神話』 望月芳郎訳 新潮社

López Austin, Alfredo

1973 *Hombre-Dios*, México.

Recinos, Adrián, ed. & tr.

1947 *Popol Vuh*, México.

1950 *Popol Vuh*, Norman. (tr. by Delia Goetz and Sylvanus G. Morley)

1961 『ポポル・ヴフ』 林屋永吉訳 中央公論社

Sahagún, Fray Bernardino de

1977 *Historia general de las cosas de Nueva España*, 4 tomos, México.

1950-69 *Florentine Codex*, 12 vols., Santa Fe.

Séjourné, Laurette

1957 *Burning Water: Thought and Religion in Ancient Mexico*, New York.

1957 *Pensamiento y Religión en el México Antiguo*, México.

Spence, Lewis

1923 *The Gods of Mexico*, London.

Thompson, J. Eric S.

1970 *Maya History and Religion*, Norman.

Torquemada, Fray Juan de

1975 *Monarquía indiana*, 3 tomos, México.

## ペルーの神話

大貫良夫

## (一)

アンデスの砂漠と高原に独特の発展をとげ、一六世紀に悲劇的な崩壊をみたアンデス文明は、文字を知らなかったので、その神話や伝説はインカ帝国を征服したスペイン人の手によって書かれた記録を通してしか今日の私たちには知りようがない。その記録といえども、ごくわずかのスペイン人が書いているだけであり、同じ話でも矛盾する内容になっていたり、ひとりだけが記録して、ほかの者は誰も書き残していないという場合もある。しかし、土器、織物、建築の配置や装飾、石や木の彫刻をみれば、インカ帝国以前からの少なくとも三千年間のアンデスの諸文化は、豊富な神話を口頭でつたえてきたにちがいない。

ペルーはアンデス山脈が太平洋の海岸近くを南北に走り、西側の山麓すなわち太平洋岸は砂漠となっている。山脈の東麓部は湿潤な森林地帯で、さらに下ってアマゾン川上流の広大な熱帯雨林につながる。アンデス山脈はペルーにおいて最も高くもあり、五千メートル以上の雪山が

あちこちに連なり、その雪どけ水は山地に深い谷間をきざんでいる。アンデス文明は、海岸と山地に発展し、海岸では砂漠を横切って流れる谷間にかんがい施設を設けて畑地とし、山地では山の斜面を畑として、トウモロコシ、ユカ（マニオク）、ジャガイモ、マメなどを主作物とする農耕を発達させた。また、海拔四千メートル以上の高原はリヤマとアルパカの飼育、シカやビクニャ（リヤマやアルパカと同じラクダ科の野生動物）の狩猟の場となり、海岸では、魚、貝、海草など海産物が豊富であった。

アンデス文化は、紀元前二千年紀、農耕を発達させ、石造の神殿や土器、織物を生んだが、紀元前一千年頃、ジャガー、ワシ、ヘビなどを重要なシンボルとする体系化された宗教がひろまり、神殿の規模が著しく大きくなり、石彫、金細工、土器、織物などがそれに伴って洗練の度を加えた。その後、山地と海岸の各地に地方的な文化が消長をくりかえし、一五世紀初頭には、いくつもの王国や部族連合のような、比較的大きな統一政体ができあがっていた。北高地のカハマルカ、北海岸のチムー、北高地南部のヤロビルカ、南海岸のイカ・チンチャ、南高地チチカカ湖からボリビア高原にかけてのコリャ（ルパカ王国などアイマラ族の諸政体）などがその例である。南高地北部のクスコの谷間にはインカ族がいたが、北隣りのチャンカ族、南隣りのコリャとの戦争に勝ってから征服の壮挙に挑み、一五世紀末には、エクアドルからチリにおよぶアンデス地帯を支配するインカ帝国を建設した。

インカ帝国は、それまでのアンデス各地で長い伝統をもつ諸民族を統合し、太陽の神殿祭祀を



中心とする国家宗教とインカ族の言語ケチュア語を普及させ、諸民族をひとつのインカ国民にまとめあげることかなりの程度成功した。この過程で、各地方の伝統はさまざまな修正を受け、民族本来の言語を失うこともあった。神話でも、インカ族の伝承をとりいれたり、それとの調和をはかるようなことが行われたらしい。

一五三二年フランシスコ・ピサロの率いるスペイン人が渡来し、カハマルカの町でインカ皇帝を捕え、翌年黄金略奪のちこれを殺し、首都クスコを占領して、インカ帝国を滅ぼした。戦争、虐待、ヨーロッパからもちこまれた病気のために、土着民の半分以上、ところによってはほとんどが死んでしまうという悲惨な状況がつづき、さらにカトリック教会による伝統的宗教の弾圧が追いうちをかける格好となり、伝統文化の変容は急速度で進んだ。口頭伝承としての神話の多くも、この過程で失われたことはまちがいない。

## (二)

インカ帝国征服後、わずかな数のスペイン人と、読み書きのできる例外的なメスティーソ（スペイン人とインディオとの混血）とインディオが、アンデスの神話その他の口頭伝承を記録している。ただし、それらの記録は、情報提供者が誰であるか、記録者の性格や価値観によって、さまざまなゆがみがあるので、ひとつの記録だけに頼ったり、書かれていることすべてが正確であるともみなしたりすることは危険である。たとえば、ワマン・ポーマやサンタ・クルス・パチャク

ティは非常に貴重な記録を残しているのだが、キリスト教の影響が濃厚であるという批判がある。これは、記録者自身の罪だけでなく、植民地体制下にくみこまれたインディオたちが、キリスト教の教えに合わせて神話を改変して語るといふことのせいでもある。また、当時の記録者が、神話の中に、聖書の中の事件や使徒の業績を重ねてみようとするところから生じたゆがみもある。

征服直後の聞きこみで、ヨーロッパ文化の影響が比較的少ない記録もある。フワン・デ・ベタソス、シエサ・デ・レオン、サルミエント・デ・ガンボア、クリストバル・デ・モリーナなどの記録者は、それゆえに高い評価を受けている。これらは、インカ帝国やインカ族の伝承や国家的祭祀の模様をくわしく書き残している。

一方、アントニオ・デ・ラ・カランチャ神父は海岸地方の伝承を残し、フランシスコ・デ・アビラ神父は一六世紀末から一七世紀初頭の中部高地のワロチリ地方の神話をケチュア語のまま記録している。そのほか、一七世紀の教会による異教撲滅キャンペーンの際に、ペルー各地の伝承や儀礼が記録されていて、現在でもそれらの記録の研究が興味深い事実を明るみに出しつづけている。

### (三)

そのようにいくつもの記録から、アンデスの神話についてどのようなことがわかっているのかわろうか。以下、創世神話、創造神、インカ族の起源、その他について概略をまとめてみよう。

創世神話とは、世界と人間のはじまりを語る神話である。また、そこには、現世より前の時代、いつてみれば神代の物語も含まれる。松村武雄氏の本書では、「電光と雷鳴との由来」、「ビラコチャ神の創造」、「人類創造」、「海に消える神」、「パリアカカ物語」などがこれにあたる。このうち、「電光と雷鳴との由来」はペルーの北高地ワマチューコ地方の神話で、「パリアカカ物語」はアビラの記す有名なワロチリ地方の神話である。「人類創造」のうちパチャカマックの話は、カランチャの記録した中部海岸地方のもので、「海に消える神」の原典はサンタ・クルス・パチヤクティの記録で、南部高地の伝承である。そしてビラコチャの登場する創世神話がインカ族のもので、何人もの記録者がいろいろな異伝をつたえている。

ビラコチャはインカ族につたわる創造神であるが、創造のわざは、すでに存在していた大地の上で展開される。すなわち、チチカカ湖に姿を現わし、太陽、月、星を空に投げあげて、闇の世に光をもたらす。人間を創ると同時に、教えに従わない人間を石にしたり、火の雨を降らせて罰を与える。そして海の彼方へ姿を消す。ビラコチャは老人に似てあごひげをはやし、杖をもち、言葉を発してあらゆることを実現する。男でもあり女でもあり、豊饒と増殖の力の源であり、創造者であると同時に破壊者でもある。

ビラコチャには助手がいたり、いくつもの名前がついていたりする。モリーナは、イマイマナ・ビラコチャとトカプ・ビラコチャという子がいたと述べ、サルミエントはタグアカパともうひとりの助手がいたとつたえ、シエサではトゥアパカとアルナワンという名前でビラコチャをよ

ぶところもあるという。おそらく、南アンデスにはビラコチャ的創造神の話が一般的であったのだろう。また、最近では、本当の創造の源はカマックという原理にあって、ビラコチャもまたそれによって創られたという考え方が、アンデスの神話の基本ではないかという説も出されている。

海岸での創造神にはパチャカマックがある。太陽とパチャカマックは兄弟であるらしいが、パチャカマックは太陽の子を殺して地中に埋める。その子の歯からトウモロコシ、骨からユカといういも、肉からはカボチャや果実が生え、これによって海岸低地の人々は飢えから解放されたという。太陽の第二子のビチャマとの戦いでパチャカマックは海に逃げる。ビチャマはそれまでの人間を石に変え、太陽に対して新たに人間を創ることを頼むと、太陽は金、銀、銅の三個の卵を与える。金の卵から村長や身分の高い男、銀の卵からはその妻たち、銅の卵から一般のインディオが生まれたという。アントニオ・デ・ラ・カランチャの原典では、本書の「人類創造」(パチャカマック神)と、「ペルー人の階級の由来」とはひとつづきの話となっている。ただし、この神話では、海岸地方の創造神パチャカマックを太陽の子ビチャマがこの世界から追放しており、太陽神の土着神に対する優越が説かれており、インカ帝国の成立の中で、改変されたのかもしれない。

ビラコチャは南高地の伝統的な創造神で、他界から来て他界へ帰った。そして太陽や月の運行を定めたり、火の雨を降らせたりして、天とのつながりが深い。これに対して海岸地方の創造神



パチャカマックは、海に縁があり、また地下より作物を生じさせることに関係している。おそらく、高地と海岸では、創世の考え方にちがいがあったのであろう。

#### (四)

ワマン・ポーマというメステイソが一七世紀に書いた記録には、本来北高地南部に一般的であつたらしい、世界の交替の話がある。最初の世界はワリウィラコチャルナといい、人間は未開で洞穴を住居とし、創造主のことすら知らず、無心に、平和に暮していた。二番目の世界ワリルナになると、灌漑や耕作を行ない、家を作つて住み、創造主の存在を知った。第三の世界プルナでは、織物が普及し、王や戦士が生まれ、海岸低地へも進出する。第四の世界アウカルナでは諸王国間の戦争が激化し、山上の要塞が築かれ、国の行政組織が固められた。それと明白には言及していないが、ワマン・ポーマの歴史に従えば、このあとインカの時代そしてスペイン植民地時代がつづくことになる。

現在の時代の前にいくつかの時代が先行してあつたという考え方はひろくアンデスに共通するものである。また、時代（世界）は四つが継起し、現在は第四番目の時代であるというのも一般的といえる。ワロチリ地方の神話では、創造神が四人いて、交替している。最初はやナムカ・トゥタニヤムカ、つぎがワリヤリヨ・カルウィンチョ、そしてパリアカカ、クニラヤ（クニラヤ・ピラコチャ）である。パリアカカとクニラヤはどちらが先かわからないと述べつつも、クニラヤ



の方があとも述べる。しかし、四人の主神は同時には存在しない。特に興味深いのは、後続の神が先の神を打負かすことになっている点である。ワリャリヨはヤナムカを破り、ワリャリヨの火の力をパリアカカは水の力で破る。ただし、パリアカカとクニラヤの戦いはない。チチカカ湖周辺の南高地では、サンタ・クルス・パチャクティの記録によれば、プルンパチャ、カリヤックパチャ、プルンカチャ・ラカプティン、トナパ・ビラコチャの世界が継起したという。

四という数はアンデスのみならず南北アメリカの全般において神聖なものとされ、四方の方角とも関連するのであるが、世界や神との交替にも四という数があてられる。さらにインカ族の神話では、最初の支配者マンコ・カパックは四人兄弟としてこの世に出現し、三人の兄がいろいろな形で姿を消し、最後に末子のマンコ・カパックとその妻ママ・オクリヨがクスコの谷間に到達し、人々を教化してインカ族の繁栄の基礎を築くことになっている。

各時代はあるひとりの神の時代であり、時代の交替は神々の戦いで生ずるという考え方は、今日でも継承されている。インカ帝国滅亡から現在までの時代は、イエス・キリストという神とインカリー（インカ・レイ、つまりスペイン語でインカ王の意）という神の戦いで、インカリーが敗北したあとの世界ということになっている。そして近い将来、インカリーが復活するという予言も語られる。これはインカリーの神話として、二〇世紀後半に注目されたもので、いろいろな異伝がペルー各地から報告されている。

## (五)

インカ帝国は太陽神の信仰を国教としたといわれるが、ビラコチャ神は太陽を創った神であり、アンデスの創世神話で太陽が主神となるような話はない。太陽が主神となるのは、世界の創造のあとの話である。たとえば、カランチャ神父の記録するパチャカマック神話では、太陽の二番目の子供ビチャマがパチャカマックを追放して以後、太陽に新しい人間を創らせている。これは、インカ帝国の海岸地方征服以後に神話が追加されたか改変された結果ではなからうか。

インカ帝国がクスコの谷間の外へと征服事業に着手するのはパチャクティ帝の時代からであり、パチャクティ帝は王子のときにチャンカ族の侵入を撃退したときの立役者であった。そして父はビラコチャ帝であった。伝承では、太陽の神殿や砦をはじめ、クスコの都の整備などがパチャクティの業績とされ、パチャクティ帝は、先行する時代と一線を画す、一種の改革者、新しい世界の建設者になっている。それは、ビラコチャ帝やビラコチャ神に対する、パチャクティならびに太陽の優位を意味する。

インカ族の始祖伝説では太陽の役割は何もない。ビラコチャ神とマンコ・カパックとその兄弟が主役である。パチャクティ帝以後すなわち一五世紀後半から太陽の神殿祭祀が最も重要かつ神聖な行事となる。アンデス諸民族を征服し、巨大な領土を統治するために行政組織を再編成したインカ王朝は、その支配の正当性を示す新しいイデオロギーを必要とした。従来の神話の再解

釈、新しい神話づくりがその過程で生じたと考えられる。「水晶の中の男」の話は、モリーナの記録が原典であり、この伝承で太陽を父とするパチャクティの諸民族征服の正当化がなされている。

## (六)

スペイン人によるインカ帝国の征服後、インカ帝国の国家的祭祀や神話は、帝国の支配階級の崩壊と共に、いちはやく消滅した。残ったのは、各地に根深い基盤をもつ神話や信仰や儀礼であった。なかでも、ワカ、雷光、山上にいる神（ワマニその他）、パチャママという地母神への信仰は強固な伝統として存続した。

ワカというのは神秘的な力をもつ物あるいはその表象物や神聖な場所を意味する、非常に幅広い概念である。また、ワカは神格や神像も含む。これらの神格には名称をもつものが多く、ペルー北高地ではカテキルという強力なワカがあったと一七世紀の記録にある。これは、黄金の鋤で人間を大地から掘出したアプ・カテキルの神話の系統をひくのであろう。

雷と稲妻は天の神のべつの姿ともみられ、雨をもたらす力にも結びつくようである。やはり北高地の伝承であるが、人里離れた高所の湖で雷に打たれてのち呪術師（伝統的宗教の聖職者つまり神と人間の仲介者）になるという話や、山に落ちた雷が人間の祖先であるという話がある。

大地は地下にある豊饒な増殖の力によって作物を育むところで、この増殖の力はパチャママす

なわち大地の母とよばれる。今日でも、農民はチチャというトウモロコシの酒を大地に注いで、パチャママをたたえる。しかし、パチャママは、神話にはほとんど登場しない。作物の起源を説く伝承は一六、七世紀よりも現代の方が多く記録されているが、ここでもパチャママは出てこない。にもかかわらず、大地は女性視され、天の男性の力との結合で豊饒が実現するという考え方は、儀礼の構造の中にみてとれるのである。

アンデスの神話は、一七世紀の文書の研究から今後も少なからず異伝や新しい話が発見されて、豊かになってゆくことであろう。また現代のインディオ社会の伝承や儀礼の研究が、古い記録に残る神話の解釈に新しい光を投げかけてゆき、また逆に、古いが内容の豊富な神話が今日の儀礼や伝承の意味を探る鍵を提供することもある。

## (七)

松村武雄氏の紹介するペルーの神話は、原典から直接選びだしたのではなく、内容にところどころ原典と異なるものがある。話のもとになっていると思われる伝承を記録している原典と、邦訳のある一六世紀のスペイン人の記録をつぎに紹介して、この解説を終る。

- (1550) 1952 *Relación de la religión y ritos del Perú*. Lima.  
 Avila, Francisco de
- (1598?) 1966 *Dioses y hombres de Huarochirí*. Lima.  
 Betanzos, Juan Diez de
- (1551) 1924 *Suma y narración de los Incas*. Lima.  
 Calancha, Antonio de la
- 1639 *Crónica moralizada del orden de San Agustín en el Perú, con sucesos ejemplares en esta monarquía*. Barcelona.
- Cieza de León, Pedro
- (1550) 1967 *El Señorío de los Incas*. Lima.
- Garcilaso de la Vega, El Inca
- (1609) 1960 *Comentarios reales de los Incas*. Lima.
- Guamán Poma de Ayala, Felipe
- (1613) 1956 *El primer nueva crónica y buen gobierno*. Lima.
- Molina, Cristóbal de
- (1557) 1943 *Fábulas y ritos de los Incas*. Lima.
- Santa Cruz Pachacuti S., Juan de



(1613?) 1950 *Relación de antigüedades deste reyno del Perú*. Buenos Aires.

Sarmiento de Gamboa, Pedro

(1572) 1947 *Segunda parte de la historia general llamada índica*. Buenos Aires.

一六、一七世紀の記録で、神話関係の手頃なアンソロジーとして、ピースの近著があり、イン  
カリーなどの神話は、オシオの著書にある。

Pease, Franklin

1973 *El dios creador andino*. Lima.

1982 *El pensamiento mítico*. Antología. Lima.

Ossio A., Juan M. ed.

1973 *Ideología mesiánica del mundo andino*. Lima.

また、シエサ・デ・レオンの記録は、邦訳がある。

シエサ・デ・レオン 『インカ帝国史』 岩波書店。一九七九年。

現代ペルーの民話については、下記の邦文がある。

友枝啓泰 「中央アンデスの民話とアマゾンの神話——栽培植物・労働・死の起源」 『国立民

族学博物館研究報告』五卷一号、二四〇—三〇〇頁。一九八〇年。

ヒメネス・ボルハ他 『インカの民話』 新世界社。一九七九年。

本書は、昭和三年近代社刊、松村武雄編「神話伝説大系」の「メキシコ・ペルー神話伝説集」を再録・再編したものである。原文を新漢字・現代かなづかいにあらため、なお、部分的には表現を新しくした。また、原書の図版は削除し、すべて新たに挿入した。

編集部記



## 解説者略歴

大貫良夫（おおぬき よしお）

1937年生まれ

1960年 東京大学卒業

《現在》 東京大学教養学部助教授

《訳書》 「インカの失われた帝国」, 「新大陸の先史学」, 「南米の謎をさぐる」, 「アマゾン」など。

《現住所》 横浜市緑区つつじが丘 29-12

小池佑二（こいけ ゆうじ）

1947年生まれ

1981年 東京大学大学院社会学研究科博士課程修了

1971~72年, 1977~79年メキシコ滞在

《現在》 東海大学文明研究所講師

《著訳書》 「世界の国シリーズ, ラテン・アメリカ」 「インカ文明」, 「ヌエバ・エスパニャ報告書」

《現住所》 横浜市戸塚区深谷町 103

### 〈お願い〉

☆現代教養文庫の定価は、すべてカバーに明記してあります。

☆万一、落丁乱丁の場合は、直接小社にお送りくだされば早速お取替致します。

© Y. Takano 1984

Printed in Japan

---

## 現代教養文庫 1098 マヤ・インカ神話伝説集

---

1984年 3月 30日 初版第1刷発行

1988年 8月 30日 初版第11刷発行

編 者 松 村 武 雄

解 説 者 大 貫 良 夫

小 池 佑 二

発 行 者 小 森 田 一 記



発行所 株式会社 社会思想社

(113) 東京都文京区本郷3の25の13

電 話 (03) 813-8101 (代表)

振 替 東 京 6-7 1 8 1 2

---

ISBN 4-390-11098-5

双文社印刷・小林共文堂

民話・伝承シリーズ

民間説話

理論と展開

全 2

S・トンプソン  
荒木博之他訳

世界各地の民間説話につき、その発生、歴史、形式等、様々な角度から分析した民間説話研究の古典的名著。

世界最古の物語

H・ガスター  
矢島文夫訳

四千年前にバビロニア、ハツティ等近東諸国の民衆により粘土板上に書かれた、世界で最も古い物語を復元。

古代エジプトの物語

矢島文夫編

古代エジプト人がバビルスに書き記した物語九篇と、ギリシヤ語で遺された物語一篇を収め、解説を付けた。

ギリシヤ神話

山室 静

今日の西欧文化の源であるギリシヤ神話を、著者独特の新しい感覚で面白く物語る。付北欧神話。

聖書物語

山室 静

神話や、感動的な人間の記録、美しい詩歌、慈愛に満ちた教え等からなる聖書を、物語風に記した手引書。

ユダヤ笑話集

三浦鞞郎訳編

数奇な運命を背負ったユダヤ民族の異常なまでの深さと鋭さをもつ笑話の数々を網羅する。

ユダヤの笑話と格言

S・ラントマン  
三浦鞞郎訳

小数民族として苦しい生活を強いられた、東欧のユダヤ人の笑話と格言だけをあつめた。

モンゴル国ものがたり

森田 雄蔵

モンゴルの神話や伝説、民話などを豊富に紹介し、ジンギスカン、ラマ教のエピソードを讀切にまとめた。

世界の民話

矢崎源九郎訳編

世界各民族の特色のにじみ出る代表的民話を、一国あるいは一民族から一篇ずつ、計八〇篇を収録した。

世界のことわざ

矢崎源九郎編

全世界の民族の長年に亘る生活経験の結晶であることわざを、約一〇〇〇民族から約二五〇〇えらんで収めた。



# 教養文庫

日

本

論

戴季陶  
市川宏訳

ジャーナリストとして身を立て、孫文の秘書も勤めた著者は、日本の社会事情万般に通曉する。数多い外国人による日本論の中の白眉。

バイクでシルクロード

—マルコ・ポーロの道を行く—

セヴェリン  
中川弘訳

東方見聞録には今なお不明な記述が散見する。その疑問を解くべく、好奇心溢れる三人の若者がバイクでポーロの道を進む冒険記。

科学のたのしい発想法

—身のまわりから宇宙まで—

シュナイダー  
塚原周信訳

どうしてわかったのか。身のまわりの現象から宇宙の謎の解明まで、科学で行なわれる手続きや発想法がどんなものなのかをさぐる。

徳川家康

—乱世をいかに生きぬいたか—

江崎俊平著

幼少時の逆境につちかわれた忍耐力、時代の読み取りの深さ、家臣団の巧みな利用など、現代にも通じる人間家康の実像を浮彫りにする。

新版一粒の麦

賀川豊彦著

キリストの教えによって更生した青年の「愛」と「信仰」の物語。キリストの精神を伝える現代のバイブルとも言われるべき傑作小説。

アジモフ博士の輝け太陽

I・アジモフ  
酒井昭伸訳

アジモフ博士再々度登場。太陽・惑星・人間について分り易くユーモアたっぷりの解説。読む者はたちまちのうちに科学のとりこ。

織田信長

—決断と行動の武将—

江崎俊平著

既成のものにとらわれない判断力と行動力をもつて、近世への扉をひらき、天下統一の曙光をもたらした武将—信長の魅力をさぐる。

楽しいバイク

テクニック入門

J・ポポフ  
進士古径訳・絵

ラフロードやオフロードを乗りきるテクニック—バイクの本当の楽しみ方を、基礎から身につけるための、イラストも楽しい入門書。

# 人文科学

(背マーク＝黄A)

## ◆総記・入門・解説

新訳 哲学入門 B・ラッセル  
 禅とはなにか 関口真大  
 心理学入門 依田新  
 パーテイー学 川喜田二郎  
 人類の百万年 モンテギュー  
 新版 歴史の見かた 和歌森太郎  
 民族学入門 諸民族と諸文化 イエンセン他  
 日本 文化人類学的入門 ハルミ・ペフ  
 現代語訳 学問のすゝめ 伊藤正雄訳

## ◆人生・箴言

幸福論 アラン  
 人生論 トルストイ  
 友情論 ボナール  
 恋愛論 スタンダール  
 愛することと生きること ロマン・ロラン  
 人生の探求 プーシキン他  
 愛と苦悩の人生 太宰治  
 名将名言行録 岡谷繁実  
 日本のことわざ 金子武雄  
 続日本のことわざ 金子武雄  
 中国の故事ことわざ 芦田孝昭  
 世界のことわざ 矢崎源九郎編  
 格言の花束 堀秀彦編  
 高校時代を生きる 堀秀彦  
 恋愛 そのロマンと真実 堀秀彦  
 結婚 その幸福と背景 堀秀彦  
 愛と性のレポート 白石浩一  
 楽しい心理学 白石浩一  
 高校生心理学 白石浩一

愛の心理学 白石浩一  
 恋愛の方法 卷正平  
 生きる意味 椎名麟三  
 結婚と道徳 B・ラッセル  
 新訂全き人間 H・デュモリン  
 若い女性の生きかた 田中寿美子  
 学生に与う 河合榮治郎  
 人生の日々 武者小路実篤  
 生きるための思索 串田孫一  
 ユーモア人生抄 三浦一郎  
 続ユーモア人生抄 三浦一郎  
 ゲーテとの対話 エッカーマン  
 対話 人間いかに生きべきか 鈴木大拙他  
 恋愛カウンセリング 卷正平  
 若き死者たちの叫び J・ビレッリ  
 ほんの話 青春に贈る挑発的読書論 白上謙一  
 若き日の悩み 塩尻公明











東京むかしむかし  
東京の民話  
日本怪談集(幽霊篇)  
日本怪談集(妖怪篇)  
日本笑話集(全2)  
日本伝説集  
沖繩民話集  
新編世界むかし話集(全10)  
インド民話集

斉藤・吉岡著  
小池・万代著  
今野圓輔著  
今野圓輔著  
武田明編著  
武田静澄著  
仲井真元楷編著  
山室静編著  
渋谷青花著

インドとんち百話  
朝鮮民話集  
ベトナム民話集  
中国の民話  
中国笑話集  
中国奇談集  
中国神話伝説集  
ユタヤ笑話集(全2)  
ユタヤの笑話と格言

渋谷青花著  
渋谷青花著  
矢野由美子編訳  
沢山晴二郎訳編  
村山吉廣訳編  
鈴木了二訳編  
松村武雄編  
三浦鞆郎訳編  
S・ラントマン編  
三浦鞆郎訳

社会思想社

定価400円

0198-11098-3033

# マヤ・インカ神話伝説集

松村 武雄 編  
大貫・小池 解説

教養文庫

1098

D

611

¥400